

続編 語り継ぐ思い

～戦没者遺族として～

一般財団法人 静岡県遺族会

続編 語り継ぐ思い～戦没者遺族として～の発刊に当たり

戦没者の家族として体験し、また、母親等から伝え聞いた苦労や戦争の悲惨さ、平和への思いをまとめた冊子「語り継ぐ思い～戦没者遺族として～」を昨年2月に発刊したところ、大きな反響をいただき、遺族の皆様から私も思いを語り継ぎたいとの声が多く寄せられ、続編を発刊することといたしました。

先の大戦後77年以上が経過し、戦争を知らない世代が国民の8割を占め、戦争の記憶が風化の一途をたどっていますが、一方で、ウクライナへのロシア軍の侵攻など世界平和への懸念も拡大しており心配が尽きません。私共遺族にとりましては先の大戦も思い起こされる昨今となっております。

ぜひ多くの皆様にも前編と合わせてお読みいただき、戦争の悲惨さ、平和への思いを次世代に語り継いでいっていただければ幸いです。

令和5年1月 静岡県遺族会会長 杉山英夫

祝 辞

静岡県知事 川勝平太

このたび、一般財団法人静岡県遺族会から「続編 語り継ぐ思い～戦没者遺族として～」が発刊されますことをお慶び申し上げます。また、寄稿いただいた会員の皆様にも心から感謝するとともに、編集委員の皆様への御尽力に敬意を表します。

昨年刊行されました前編は、戦争の記憶の風化が危惧される中、戦中・戦後の混乱期を生き抜いてきた方々の生の声を伝える、大変貴重な資料となりました。続編においても、身をもって体験された方々だからこそ語ることのできる、戦争中から戦後にかけての壮絶な日々や、大切な御家族を思う深い愛情、そして平和への切なる願いが、実感のこもった幾多の言葉で綴られ、戦争を知らない私たちの心をも揺さぶります。

前編と合わせ、本書が戦争体験を語り継ぐ貴重な資料として、様々な場面で活用されることを願います。

県では、今後も御遺族の思いに寄り添いながら、戦没者の慰霊に取り組んでまいりますので、引き続き御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、貴会の活動のますますの充実と、会員の皆様への御健勝、御多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

目 次

| | | | |
|---------------------------------|----------|-------|----|
| 平成 24 年 沖縄平和祈願慰霊大行進に参加して | 下田市遺族会 | 笹本睦子 | 1 |
| 母に感謝、亡き父に会いたい | 熱海市遺族会 | 米山 勉 | 3 |
| 私の生い立ち | 伊豆市遺族会 | 萩野富央 | 3 |
| 母と歩んだ 17 年 | 伊豆の国市遺族会 | 相原 肇 | 4 |
| 追悼 親父さんへ… | 松崎町遺族会 | 斉藤卓一郎 | 5 |
| フィリピン慰霊友好親善訪問に参加して | 沼津市遺族会 | 宮島信明 | 6 |
| 私 と 戦 争 | 三島市遺族会 | 中村 俊 | 7 |
| 無言の墓石に手を合わせ | 三島市遺族会 | 山田智司 | 10 |
| 令和 4 年 7 月 6 日 追悼の辞 | 三島市遺族会 | 堀池俊子 | 11 |
| 念願の慰霊巡拝 | 御殿場市遺族会 | 田代恒輔 | 12 |
| 孫へ伝えたいとの一心で妻と孫二人護国神社へ | 御殿場市遺族会 | 小池 武 | 12 |
| 玉砕の島ラブアン島を訪ねて（マレーシア） | 御殿場市遺族会 | 根上治美 | 13 |
| 写真でしか知らない叔父を祀る | 御殿場市遺族会 | 勝又將雄 | 14 |
| 運命を変えた戦争 | 御殿場市遺族会 | 岩田俊光 | 16 |
| 父のいない生活 | 御殿場市遺族会 | 杉山いとゑ | 17 |
| 私の戦中戦後 | 御殿場市遺族会 | 勝又静江 | 18 |
| 遺族のひとりとして | 裾野市遺族会 | 横山清美 | 20 |
| 日の丸拝揚に思う | 小山町遺族会 | 遠藤 豪 | 20 |
| あの戦争と私 | 富士市遺族会 | 栗田 穎 | 21 |
| フィリピン レイテ島参拝の思い出 | 富士宮市遺族会 | 清 功 | 22 |
| 予科練甲飛十期の碑に思うこと | 静岡市静岡遺族会 | 高井成治 | 23 |
| 初めて知った父の戦死の状況 | 静岡市静岡遺族会 | 為貝宏邦 | 24 |
| 支部長として思うこと | 静岡市静岡遺族会 | 野田成子 | 24 |
| 平成 28 年フィリピン墓参二回め追悼文より お父さんへ | 静岡市清水遺族会 | 深澤きぬ子 | 25 |
| 平成 11 年 8 月 15 日 追悼のことば | 静岡市清水遺族会 | 鈴木喜代枝 | 26 |
| 父の温もり | 静岡市清水遺族会 | 小野塚通子 | 28 |
| 戦争の悲惨さを後世に伝えたい！ | 藤枝市遺族会 | 神谷陽子 | 29 |
| 戦後 70 余年過ぎて、亡き父と母を知る | 藤枝市遺族会 | 塚本真人 | 30 |
| 恒久平和を願って | 藤枝市遺族会 | 服部之子 | 32 |
| 母への感謝 | 藤枝市遺族会 | 小柳八州子 | 33 |
| 戦争を二度と繰り返させないために | 藤枝市遺族会 | 深見和子 | 33 |
| 戦争の傷跡 | 藤枝市遺族会 | 秋元ゆき江 | 34 |
| 父と母への想い | 藤枝市遺族会 | 増田久代 | 34 |

| | | | |
|----------------------|-----------|-------|----|
| フィリピン慰霊巡拝の旅 | 藤枝市遺族会 | 川久保光代 | 35 |
| 母の苦勞に感謝 | 藤枝市遺族会 | 西谷芳子 | 36 |
| 父と叔父の戦争に思う、命の尊さ | 島田市遺族会 | 栗原利行 | 36 |
| 戦中・戦後の我が家 | 島田市遺族会 | 鈴木政亮 | 39 |
| 戦争の記憶 | 島田市金谷遺族会 | 大久保昌彦 | 41 |
| 文化の違いを知らなかった子供の頃の思い出 | 島田市川根町遺族会 | 遠藤良一郎 | 41 |
| 祖母の涙 | 島田市川根町遺族会 | 小沢康宏 | 43 |
| 戦時中の子供達の情景 | 島田市川根町遺族会 | 久保田文雄 | 44 |
| 私の戦争体験、後世へ伝えたい思い | 島田市川根町遺族会 | 鈴木彦吉 | 46 |
| 兵 役 | 島田市川根町遺族会 | 前川吉夫 | 48 |
| 戦争末期の思い出 | 島田市川根町遺族会 | 又平りつ子 | 50 |
| 戦時中の歌ごよみ | 島田市川根町遺族会 | 松島恵美子 | 51 |
| 戦争と母と私 | 島田市川根町遺族会 | 守谷庄平 | 55 |
| 「大陸の空 南方の空」より抜粋 | 島田市川根町遺族会 | 諸田平八 | 56 |
| ハワイ真珠湾のアリゾナ記念館を訪ねて | 川根本町遺族会 | 中野秀男 | 58 |
| 父 | 焼津市遺族会 | 鈴木一子 | 59 |
| 焼津と戦争と私 | 焼津市遺族会 | 松永安子 | 60 |
| 私の戦時期体験 | 牧之原市遺族会 | 久保みつ | 64 |
| 遺児の想い | 菊川市遺族会 | 山田いち | 68 |
| 父、母、そして私 | 菊川市遺族会 | 室屋近子 | 70 |
| 戦死した父への思いと戦後の生活 | 菊川市遺族会 | 鈴木好雄 | 71 |
| 戦没者家族の思い | 菊川市遺族会 | 中山 猛 | 73 |
| 父と母の一端の面影 | 菊川市遺族会 | 落合判俊 | 74 |
| 小学生の兄が白木の箱を胸に | 菊川市遺族会 | 平松とみ | 76 |
| 復員を待っていた家族と日章旗 | 菊川市遺族会 | 藤本春江 | 77 |
| 死ぬまで帰ってくると信じていた戦没者の母 | 菊川市遺族会 | 鈴木 榮 | 77 |
| 語り継ぐ戦争の記憶 | 菊川市遺族会 | 寺本達良 | 78 |
| 戦争はダメだ誰もが明るい家庭を | 菊川市遺族会 | 海野昌久 | 79 |
| 父のこと 故戸塚昇 | 菊川市遺族会 | 戸塚宏一 | 82 |
| 父の記憶 | 菊川市遺族会 | 赤堀三千男 | 84 |
| 三島の陸軍基地で面会 | 菊川市遺族会 | 樽林 努 | 84 |
| 死んだとも思えない父 | 菊川市遺族会 | 内田昌義 | 85 |
| 戦地から届いた遺書 | 菊川市遺族会 | 有海辰男 | 85 |
| 軍人として短い一生 | 菊川市遺族会 | 堀井龍雄 | 86 |
| 人 生 | 掛川市遺族会 | 弓桁かね | 86 |
| 平和を祈る | 掛川市遺族会 | 山崎和子 | 87 |

| | | | |
|------------------------------|--------|-------|-----|
| 戦争の悲惨さを知り平和を願う | 掛川市遺族会 | 平出芳枝 | 88 |
| 「従軍記録とその思い出」より抜粋 | 掛川市遺族会 | 宇田幹男 | 89 |
| 平成26年8月15日 追悼のことば | 掛川市遺族会 | 松永 猛 | 91 |
| 平成25年8月15日 遺児の言葉 | 掛川市遺族会 | 名倉武雄 | 92 |
| 戦地慰霊参拝のときのこと | 袋井市遺族会 | 安間幸甫 | 93 |
| 天国へのことづけ | 袋井市遺族会 | 岡本禮子 | 95 |
| 忠魂碑を歴史的遺産として残す 活動の必要性について | 袋井市遺族会 | 兼子春治 | 97 |
| かすかな父の記憶と紙一枚の遺骨箱 | 磐田市遺族会 | 伊藤行昌 | 100 |
| 遺児として歩む | 磐田市遺族会 | 増田 努 | 101 |
| 戦中戦後を生きる | 磐田市遺族会 | 伊藤三喜男 | 103 |
| ビルマの父 | 磐田市遺族会 | 村松初江 | 104 |
| 「永遠に生きる母の愛」より一部抜粋 | 磐田市遺族会 | 加藤なを江 | 105 |
| 非業の死 | 磐田市遺族会 | 米津幸男 | 109 |
| 母の遺稿 | 磐田市遺族会 | 市川勝己 | 111 |
| 戦後77年平和の俳句 | 磐田市遺族会 | 磯部節子 | 111 |
| 三ヶ根山の思い出 | 磐田市遺族会 | 大橋洋子 | 112 |
| 知らなかった伯叔祖父の戦争参加 | 磐田市遺族会 | 森口雅博 | 113 |
| 父の眠る沖縄 | 水窪町遺族会 | 知久勝宣 | 114 |
| 母を想う | 水窪町遺族会 | 井水正勝 | 115 |
| 当り前の平和に | 水窪町遺族会 | 大藤積平 | 116 |
| 戦争をかたらなかった義母 | 水窪町遺族会 | 高木罔乃 | 117 |
| 叔父を偲ぶ | 水窪町遺族会 | 竹下裕二 | 118 |
| 遺族会への思い | 湖西市遺族会 | 近藤伊織 | 120 |
| 殉難学徒への思い | 浜松市遺族会 | 阿部俊子 | 121 |
| 竹の子べんとう | 浜松市遺族会 | 天野ふ志江 | 122 |
| 戦争とその家族 | 浜松市遺族会 | 鶴飼重雄 | 123 |
| 戦争と私 | 浜松市遺族会 | 小山敦子 | 125 |
| 私の人生 | 浜松市遺族会 | 佐藤康一郎 | 127 |
| お昼はじゃがいもひとつ | 浜松市遺族会 | 杉浦芳己 | 128 |
| 残念・無念な思い出 | 浜松市遺族会 | 鈴木東二郎 | 130 |
| 西部ニューギニア地域戦跡巡拝団に参加して | 浜松市遺族会 | 加藤えい | 131 |
| 浜松市街大火災のころ | 浜松市遺族会 | 伊藤ゆきゑ | 132 |
| 運命の昭和20年6月18日浜松大空襲 | 浜松市遺族会 | 奥村利彦 | 134 |
| 婦人部のあゆみ | 浜松市遺族会 | 小倉てい | 137 |

平成24年 沖縄平和祈願慰霊大行進に参加して

下田市遺族会 笹本睦子

昭和20年5月26日。私の父が沖縄で戦死した日です。毎年6月23日の沖縄慰霊の日をテレビで見ている、私はどうしてもこの日に沖縄に行きたいと思いつけて来ました。義母を一昨年、6年間の介護の末96歳で亡くしました。天寿を全うしおくり出すことが出来、時間にも余裕が出来ました。

そんな時、下田の遺族会会長の長谷川さん、副会長の村田さんのご尽力で、沖縄本土復帰40周年という節目の年に、日本遺族会静岡県の代表として、第51回沖縄平和祈願慰霊大行進に私達夫婦と娘2人、他に5名の計9名が行くことになったのです。

当日は、全国から参加した人達総勢約1,000人で、糸満市^{まぶに}摩文仁の平和記念公園まで9kmの行進に、夫の体調が悪く私達は途中からの行進になりましたが参加できました。公園内の沖縄全戦没者追悼式会場に到着すると、追悼式参加者5,500人から盛大な拍手で迎えられ入場しました。正午の時報に合わせ式典は始まり、一分間の黙祷の後、照屋会長が追悼の言葉を述べ、野田総理に対し早急に靖国神社に参拝し、慰霊と世界の恒久平和を祈願する様強く要望しました。その後、各代表による献花、仲井真沖縄県知事の平和宣言、沖縄県立首里高校三年生の金成さんの平和の詩「礎に思いを重ねて」の朗読があり、野田総理が挨拶し追悼式は終了しました。

その後私達は、平和記念公園内にある静岡の塔と国立戦没者墓苑に献花をしてから、戦没者の名を刻んだ「平和の礎（いしじ）」に行き、父の名前「笹本誠」を見つけ、お参りをしました。ようやく父に会えたという思いで胸が一杯になりました。「お父さん。お母さんは今も元気で仕事がんばっているよ。もっともっと長生き出来るよう見守ってね。」と語りかけました。あのハイハイしていた睦子がこんな白髪のおばあちゃんになっていてびっくりしたんだろうな。父の名前をさすりながら、いろいろ語りかけました。

かつて、母は戦地の父から送られてきた数枚の葉書を私に見せてくれました。表には「軍事郵便」と赤い判が押され、裏には父の細かい字がぎっしりと書かれていました。そして、母は私にこう言いました。「私が死んだら、この葉書はお前が持っていないさい。お前のことしか書いていないから。」と。

ぎっしりと書かれた文字の中で、私には「睦子」という字しか読めませんでした。丁度その時、父の従妹にあたる坂田のおばちゃん（坂田てい先生）が義母に線香をあげにきてくれました。おばちゃんにその葉書を見せると「私が解

読してくるよ。」と言ってくれ、丁寧に一冊のノートに書いてくれました。

それは、母からの手紙への返事の様でした。幼い私を連れて、身重で満州より帰国した母への思い、「睦子が見違える程大きくなった事を想像している。」とか、「満州の気候で育った睦子の身体に十分気を付けるように。」とか、所々に「睦子」という文字が入っており、母の言う「お前の事しか書いていない。」という言葉の意味が分かりました。

父は弟「兼治」の顔を見ていない、私しか…。父の顔を私も知らない、でも父は私を見ている。父の顔も知らない弟と、自分の息子にも会っていない父、どんなに無念であっただろうか…。

夢も希望も未来も何もかも戦争に奪われてしまった父。戦後70年、あの大战が風化しつつある中、私たち遺族は子や孫、曾孫まで尊い生命を祖国のために捧げた父達のことを伝え続けていかねばならないと思います。日本が戦後幾多の困難を乗り越え、平和で豊かな生活が出来るのは、多くの犠牲者のお陰だということは忘れないでほしいのです。

式典の終わった後の平和の礎には多くの人がお参りをしており、亡き人の名を何度も指でなぞる人、子や孫を連れて飲み物や花を手向ける人でいっぱいでした。

平和の礎を後にした私達は、糸満市米須の「魂魄（こんぱく）の塔」に行きました。戦後、沖縄の方々が散乱している遺骨を拾い上げつくられた最大の慰霊塔です。ここでも大勢の人達が花を手向け、香をたいていました。

毎月お参りしている父の墓に遺骨はありません。母は沖縄の石を入れてあると言います。摩文仁の丘から眺めた沖縄の海は、言葉に表せないほどきれいな海でした。このきれいな海が真っ黒になったと言います。米軍の軍艦で…。

私は、沖縄に行き、戦没者追悼式に参加したことによって、長年の胸のつかえがとれた様な気がしました。同行してくれた病弱な夫にとっては大変な旅だったと思いますが「来てよかった。」と言ってくれました。そして、私達が沖縄に行き、父に会ってきたことを一番喜んでくれたのは母でした。いつも心配ばかりかけていますが、少しは親孝行ができたかな、と思っています。

お父さん、いつも私たちを見守ってくれて有り難う。

今日も世界のどこかでテロや戦争が行われています。地震や津波などの天災はどうにもならないかもしれません。でも、戦争は人間の力でどうにもなるも

のです。

子供や孫の時代が戦争の無い平和な世の中であることを、心から祈っています。

母に感謝、亡き父に会いたい

熱海市遺族会 米山 勉

私は昭和19年6月1日生まれ、父は昭和19年9月19日ビルマ（現ミャンマー）のインパール作戦に参戦、マラリアにかかり戦病死したと知らされています。私が誕生して100日目のお祝いの写真を戦地に送ったようですが届いたかは不明です。父が昭和19年4月戦地へ行く前、母は最後の面会のため奈良まで行きました。姉6歳・次女3歳・私がお腹に（6か月目）宿していた時です。

母は生前良く父の話をしてくれました。父は網代の定置網船の機関長でした。お酒はあまり飲まなかったようですが、陽気で甘いものが好きで特に羊羹を好んで食べたようです。地元の祭りでは仮装をして周りの人達を楽しませました。そんな父に会いたいなど感ずることが多々ありました。

父の戦死後、母は大変苦勞して私達三人の姉弟を育ててくれました。魚・履物・衣類の行商、そして菓子製造工場勤務など母は懸命に働きました。私が小学校入学時、近所の同級生が肩掛け鞆を得意そうな顔をして自慢しているのを見て羨ましく思いました。母は入学前日まで行商に出かけ、入学日当日の早朝に肩掛け鞆を購入し入学式に間に合わせてくれました。私はこのような母の苦勞に報いるため、将来は大工になり家を建てる事を心に誓いました。その後大工は断念しましたが、高校卒業後地元の金融機関に就職、昭和44年に家を新築することが出来、母に喜んで貰いました。母は6人の孫に囲まれ、平成8年8月14日に82歳で亡くなりました。

母には私を一人前の社会人に育ててくれた事に感謝の気持ちで一杯です。母の死後私は網代地区遺族会の役員となり、平成24年からは熱海市遺族会長となって現在に至っています。会員減少に歯止めがかからない現状ですが、何とか維持できるよう事務局と常に連絡を取り合い、熱海市遺族会が存続できるよう努力してまいる所存です。（令和3年4月発行の静岡県遺族会報より）

私の生い立ち

伊豆市遺族会 萩野富央

私は昭和14年12月12日生まれの満80歳です。私の父親は満州で捕虜となり終戦後の昭和21年10月10日満31歳で戦死ですが、戦友会の方々に招待さ

れ、戦争のことをいろいろと聞かされました。ほとんどの人が厳しい寒さと強制労働、飢えと病により死亡し、鉄砲玉に当たって死亡した人はほんの僅かとのことでした。

私は戦後初めての小学校への入学生でまだ尋常小学校でした。私は長男でしたので、家業が畳屋と百姓で家を継がなければならぬと祖父や親戚の者から常に言われ、母も父親の弟と昭和 23 年に再婚し二人の弟と妹が生まれました。

私が中学三年の三学期になってから、家の者、親戚の者から今後 10 年 20 年すると日本もどんな時代が来るか分からないので高校ぐらゐは卒業しろ、大学へ進学する普通高校へは行くでないと言われ、農業高校を昭和 33 年卒業し家業を継ぐつもりでいましたが、近所の郵便局長様から郵便局で働いてみないかと強い誘いがあり非常勤職員として就職しました。

ところが母親と再婚した父が昭和 33 年 9 月 26 日狩野川台風により近所の家に救助に行き家ごと水に流されて亡くなりました。狩野川台風では 930 人の人命が失われ、旧中伊豆町では 83 人が亡くなりました。私の家も田畑が流され山林も崩れてその復興も大変でした。

その後、いろいろの試験を受験し合格、最後には沼津合同庁舎内郵便局長を平成 13 年退職し、その間地域の遺族会で妻の公務扶助料や国債の請求・失権の手続き、軍人恩給の請求や特別弔慰金の請求手続き等に携わらせて頂きました。又、地域の区長会長、神社総代（12 年間）も行い現在遺族会長、県理事として微力ではありますが活動しており、平成 30 年 12 月 12 日には県の推薦により厚生労働大臣表彰を受賞致しました。今後共地域に貢献できるよう頑張っ
てまいります。 (令和 2 年 4 月発行の静岡県遺族会報より)

母と歩んだ 17 年

伊豆の国市遺族会 相原 肇

私の母は、昭和 13 年に沼津より田京に嫁いできました。

昭和 15 年に誕生したのが私です。父はトビ職だったと母から聞かされております。その 2 年後に弟が生まれ我が家もやっと光が見え始めた 2 年後、昭和 19 年…あの赤紙が、30 歳でした。私には、この時の母の心中はいかばかりだったろうと。幼い二人の子を母に託す父の思い。

出征の朝だったろうか、我が家の玄関に日の丸の国旗を左、右に組んだその下で、父が私の頭に手をやり満面の笑顔での写真が一枚、この満面の笑顔は一体何を思っていたのでしょうか。私 4 歳、弟 2 歳、出征時の写真は全く覚えていない。だから父の面影は想像できない。

そして、1年するかしないかの終戦間近の昭和20年6月5日の戦死公報が。私の父もそうですが、全国で出征された多くの仲間（同志）、育ちも環境も違う、だがみんな命は一つである。

命って何。私の父も何の為に30年を生きたのだろうか…。

終戦後、昭和20年以降、母は親戚などに世話になりながらも田京の家を何とかやりくりして行きました。

時は流れ、母と一緒に日雇いの作業に行く日もあり、小学校の中頃から母が体調を崩しながらも生計を何とかやりくりしていたからこそ、兄弟二人は元気に育って行きました。それなのに体調すぐれない母の毎日だったと思います。

私が中学校に入った頃には、毎日学校から帰ると母と近くの山の畑に通いました。母に代わり荷物運びの手伝いでした。

昭和29年春、私は父の妹（沼津）の家に預けられた。一人残った弟は、隣に住む小母さんにも面倒を見てもらいました。どうしてかと言いますと、母は体調を崩し国立病院（沼津黄瀬川）に入院中でした。弟は2年間一人で大きな家の何もない空間に。私は何もしてやれない、弟には。入院中の母に弟は自転車で会いに行った。途中で自転車がパンクしてしまい、丁度仁田の自転車屋さんでパンクの修理をお願いしたところ、無料で修理してくれたと弟からの話でした。弟は2年後東京へ…。

入院中の母は、昭和32年11月2日入院先の病院で永のお別れ。

亡くなる前のほんの数分だと思います。母の枕元で私の手を握り締めて、涙流して最後の力を込め私の眼を見つめて別れの言葉が母から…親戚やみんなの言うことをしっかり聞くんですよと、安らかな深い深い眠りの旅立ちでした。私はただ泣くだけでした。

泣き言一つ言わなかった母。優しくかった母。

母には何一つしてやれなかった。あと10年元気でいてくれたら私たち二人の出発を見せてあげられたのに残念で、残念でなりません。

私からのせめての恩返しは、父と（お父さんと書かせてください）又母との倍の生命を生き、更に命のある限りに。

追悼 親父さんへ…

松崎町遺族会 齊藤卓一郎

親父さん、北ボルネオの地にまた立っています。そして親父さんの靈感に触れることが出来、感慨無量の心情です。

前回の慰霊訪問から13年が経ち、もう一度来たいと思っていたが、今回は

姉（節子）と二人で来ることが出来ました。親父さんの亡き後、私達兄弟三人を育ててくれた母は平成16年1月、88歳をもって他界しました。

戦後の混乱期、大家族の中で本当に頑張ってくれたと、子供ながらに感謝しております。

現在の我が家は妻と二人の生活、子供達は横浜、東京とそれぞれ生活して居ます。唯一人の孫は中学三年生になり、勉強に、部活にと元気に頑張っています。

親父さんが勤務した隣町の花弁栽培開始50周年記念誌「田子の花」「思い出に残る人々」の一番目に親父さんの名前があり、文面は昭和の始め農事監督として岩科出身の齊藤技手が赴任してきて、絹莢豌豆^{きぬさやえんどう}が普及し、農家の換金作物として大盛況を呈した時、その先頭に立って種子の斡旋から栽培技術指導や組合の運営に至るまで協力し、「田子の絹莢」の地盤作りに大いに貢献した。また^{そさい}蔬菜の促成栽培や果樹の接木剪定作業等も指導し、花卉栽培の開始にあたっては積極的に推進し、戦前の花作り発展に多大な足跡を残した、と記されています。私の妻はその田子出身です。科学では図りしれない縁を感じています。

人それぞれの生き方がある中で、戦争と言う非常事態の為に若干36歳で人生を終えなければならなかった無念さは想像に絶するかと思います。今、私は親父さんの2倍の年齢となりました。出来れば孫と酒を酌み交わし、ゴルフと一緒に出来ればと密かに夢を抱いています。家を守り、子供に託すまではと日々過ごししながら、ゴルフ仲間にも恵まれ、町内、近隣市町の友と月数回のラウンドを楽しんでいます。

北ボルネオの地に2回立てたことを忘れず貴重な体験を心の糧として、これからも生きていきます。

いつまでも見守って下さい。 平成26年10月26日 タワウにて

(平成27年4月発行の静岡県遺族会報より)

フィリッピン慰霊友好親善訪問に参加して 沼津市遺族会 宮島信明

2008年11月28日から12月3日にかけて政府、日本遺族会のご支援により、フィリッピン慰霊友好親善訪問団の一員として、フィリッピンルソン島クラークへ巡拝に行きました。総勢150名の団体、我々C班29名、静岡県からは4名。全ての参加者が戦争遺児で、戦争で父親を亡くし、戦後の混乱期を歯を食いしばり苦難に耐えて生き抜いてきた者です。国民の全てが生活に苦しくて、一家の大黒柱の父を戦争で失った母も両親と共に戦後の復興に頑張っている

てきました。太平洋戦争ではフィリッピンで50万人以上の戦死者と、100万人以上の遺児をつくったのです。私共は「おとうさん」という言葉を一度も言えず、苦しい生活と戦ってきました。

フィリッピンルソン島での兵士との戦争の話聞くにつけ、見るにつけ、戦争といえるようなものではありませんでした。戦艦・戦闘機もない我が陸海空軍兵士に対し、アメリカ軍は、おびただしい戦艦・飛行機・戦車・ブルドーザー等の鉄の固まりで攻撃を仕掛け、陸軍の混合部隊50万人は、広い海岸、平原で逃げる所もなく、神風特攻隊の精神で全員戦死したとのことです。真実の話聞き、唯、涙が止まりませんでした。特に、マッカーサーの指令により、「日本人は一人も生かしておくな。」との事。最前線にはフィリッピン人を立て戦い、フィリッピン人111万人が死んだとのことです。我が国は戦争に負け、武器も持たない軍人50万人をも犬死させ、何の意義もありません。日本国領土に上陸させないための戦い。懐かしい故郷、父母、妻子の事を思い散っていた父・勇士たち、唯、無念だったことかと思ひ、涙涙の一日でした。

クラーク基地の中のホテルにてようやく父に会うことができました。「お父さん、きっとまた会いに来るからね。」心に誓いながら、最後に、参列者全員で歌「故郷」と「海ゆかば」を合唱して帰路につきました。

戦争は、起こすはたやすく、終わらせるはむずかしいといひます。結果は得られず、戦争は絶対あってはいけなことを父達は死をもって訴えたのです。日本の方向を正したのです。フィリッピンの広い原野に眠り続け、日本の平和を望んでいるのです。私達も、その意志を受け、後世に残したいと思ひます。

(平成23年沼津市遺族会発行「戦争と平和」より)

私と戦争

三島市遺族会 中村俊

[父との別れ]

1942(昭和17)年11月23日、私が満五歳になる2日前に、父は補充兵として静岡三四連隊に入隊しました(29歳)。

農業を営む家族は妻(26歳)と母親(53歳)、二人の子供(4歳、2歳)。その後、数回面会のため静岡を訪れた記憶があります。

ある夜、私が就寝中に「半狂乱」になり家族を困惑させたようです。父に会いたいのだろうから面会に行こうと「にぎり飯」を準備していたら、「元気で発つ」との電報が届いて、初めて知ったことでした。以来、再び会う機会は絶たれてしまいました。戦地に向かうことも軍事機密として家族にも知らせるこ

との出来ない無情な時代でした。このとき以来「夢で知らせる…」という科学では証明できない機微な心霊現象を信じるようになりました。

生前、父の地元「青年団」「消防団」等の活動での慰労の写真の中には、幼い私の姿が常に映っております。短い親子の愛情が濃縮されたとでも言うのでしょうか。

[父の兵役としての足跡]

- 1942 11-23 補充兵として召集。静岡三四連隊に入隊
- 12-20 18:00 広島「宇品港」にて乗船（日欄丸 6,000 トン級）
- 31 22:00 廣東上陸 南支派遣 鳳第一〇四師団
- 1943 4-14 ビルマ派遣 烈第一〇七〇八部隊と隊名変更南支黄阜に集結
- 5-28 西貢（サイゴン）にての最後の写真あり
- 1944 1-1 仏印、タイを経てタイメン国境を越えてビルマ国へ
- 7 大本営、「インパール作戦」を認可
- 3-8 「インパール作戦」開始参加
- 15 第三一師団・五八聯隊・左突進隊としてチンドウイン河を渡る
- 25 第三三師団長・柳田元三、第一五軍司令官・牟田口廉也に
インパール作戦中止を提言
- 4-3 人跡未踏のアラカン山脈を越えてインド コヒマに入城
ディマプール～インパール道を遮断
- 6 第三一師団、インド東部の「コヒマ」を占領
- 18 戦闘救護班担架長として、同僚の負傷者收容のため潜進
負傷者を肩にして後送中、敵集中砲弾のため
「腹部盲守透性迫撃砲弾破片炸」により戦死（31歳）
- 5-31 第三一師団長、佐藤幸徳中将、独断でコヒマ放棄、撤退を命令
- 7-2 南方軍、「インパール作戦」の中止を下命

[慰霊の旅]

毎年のように「日本遺族会」による「戦没者遺児による慰霊友好親善訪問」が行われています。2021（平成24）年3月「ミャンマー・インド方面…」の参加募集を知り応募しました。聞くところによると当地「インド・インパール」は治安が悪く、今までには行くことが出来なかった場所でした。東の間の平和の貴重な機会だったのです。一行の遺児32名のうち殆どがミャンマーであり、インドへは4名でした。

巡礼コースには有名な「コヒマ市内激戦の三叉路」、小学校・病院の友好訪問や、コヒマ・インパール両地区では仮設の祭場を設け般若心経をBGMに供養を行いました。拝礼、黙祷、国歌斉唱、追悼の詞、ふるさと斉唱、焼香、献花、拝礼。慰霊祭には4名がそれぞれ準備した追悼の詞を読み上げました。その気持ちは10年を経た今でも全く変わっておりません。

「追悼の詞」

お父ちゃん、ようやく逢いに来ました。

この地を、この足で訪れ線香を手向けることが出来るとは今まで思ってもおりませんでした。最後の声を聞いてから 70 年の歳月が流れました。お父ちゃんの記憶は年々薄れつつありますが、残された写真で辛うじて繋ぎ止めています。そこに浮かぶ姿は若いお父ちゃんです。三つ年下の妹には記憶は全くありません。

15 年前母が逝きました。30 歳の父と 80 歳の母の 55 年ぶりの夫婦の対面でお互い分かりましたでしょうか？

若くして夫を失ったその後の母の辛苦は計り知れないものがありました。女手一つで残された妹と二人の子ども達を育て、僅かばかりの田畑を耕し、世間と付き合い、文字通り血を吐く思いの日々でした。そうした姿をお父ちゃんは遠くから見ているくれたことでしょう。

あの日、静岡の連隊から外地に向かう日時を留守宅に知らせることも許されず、当日の朝、「元気で発つ」との電報が届いて初めて知ったことでした。以来、再び逢う機会は絶たれてしまいました。

その後、戦地から数多くの便りは届いても心根を吐露する事も許されず、「毎日お国のために元気でやっている」「しっかり勉強していい子になりなさい」「今年の米の収穫はどうか？」等々、当たり障りのない内容ばかりでした。

歳月が流れ、子を持って初めて親の気持ちが分かりますと言われます。5,000km も遠く離れた異郷で息絶えるときの心境を推し量るとき、「残念だったでしょう」「悔しかったことでしょう」「妻や子に逢いたかったことでしょう」そして何を言い残したかったのでしょうか。

豪雨と飢餓と病疫を乗り越えて無事帰還された戦友の方々の綴られた記録により、後方からの食糧、弾薬の補給もなく、上級軍司令部の無謀な作戦のため犠牲者となった戦病死者は、余りに悲惨であったことを知りました。

お父ちゃん、残された家族は孫 5 人、ひ孫 8 人みんな元気です。

来年 1 月 8 日はお父ちゃんの生誕百年を迎えます。その日、墓前で思いを新たにしたいと思います。これからも私達を見守り続けて下さい。 俊

平成 24 年 3 月

〔宇品港〕

旅が好きです。いわゆる「鉄ちゃん」です。その一環として、国鉄～JR 全線の乗り尽くしを 2006 年 9 月 16 日に達成しました。

その後路線改廃もあり、2017年の春の時刻改正で広島地区の「可部線」が、1.6km 延伸（復活）されたのです。全線乗り尽くし100%確保のため、その区間の踏破に行ったついでに付近の観光を計画しました。

全国的に名の知れた観光地はすでに訪れていたつもりでしたが、何故か「錦帯橋」「原爆ドーム」「宮島」は盲点でしたのでいい機会でした。

広島地区の定期観光では「原爆ドーム」の後「宮島」へ向いました。通常宮島へは「JR宮島口」から宮島航路で渡りますが、コースは「広島港」でした。「広島港？」何か胸騒ぎがして記録を手繰り寄せながらガイドさんに尋ねました。「広島港、って昔は宇品港、と言いませんでしたか？」「昔の人は今でもそう言います」

宇品港 そこは亡父が外地に向け乗船した港でした。二度と再び日本の地を踏むことが出来るかどうか？不安だったことでしょう。軍港であった面影は今では無く、観光地でした。しかし、変わらぬあの山並みを振り返り、波の音を聞きながら、明日をも知れない戦地へ向かう父の心境はいかばかりであったか。73年前の遠い昔を偲びつつ、再び同じ山並みを、又同じ波の音を聞き感無量でした。

「そうか、父はここからこうして故郷に思いを寄せながら出航したのか～」その同じ場所の船上で、思いを新たに何度も振り返ったことでした。

そして、父は再び日本に帰ることも出来ず、1944（昭和19）年4月18日コヒマで戦死しました。31歳でした。

無言の墓石に手を合わせ

三島市遺族会 山田智司

昭和20年（1945）6月父が戦死した通知を受け取ったのが同年7月だったと母から聞かされたのが、小学校へ入学する頃かと想像しています。勿論それ以前に話が有ったと思いますが、自分が理解出来ない事を考えての事と思います。

以来、自分には父親像というものは有りませんでした。姉を含め親子三人の生活は静かな日々で有ったと記憶、当時食糧事情は困難を極め、イモ中心と、すいとんの食事が続いていました。周りの子供達も同様、思う様に食料を口にする機会は、限られたもので有りました。

母親も小さい子供二人を抱え仕事に就き、苦労を重ね、日々の生活を支えてくれました。更に母親に苦労を強いた事は、小二時代、足骨折治療の診たて違いで、現代程リハビリも定着しておらず、回復まで仕事を休み、自分と街中を

歩行訓練で歩いてくれた事でした。この事は今でも折に触れ思い出す、人生の忘れられない大事な出来事でした。

そして、自分が小学校卒業と同時に「山田家之墓」が建立されました。墓標裏面の母の名前、建立年月を見て、頭が下がり手を合わせています。

昭和40年代に入り三島市遺族会の皆様とお会いし、お話を聞く機会に恵まれました。同じ境遇の皆様でしたが、強くしっかりした生き様を感じたのも、この頃だったと思います。

学校卒業後、会社勤めが始まった時、社会人として恥じない行動をと、母親から口癖の様に教えられました。以来、高度成長期から企業戦士張りの勤めを続け、あらゆる事を経験、退職に至りました。

この間、母親も亡くなり四半世紀、数年前姉も逝去、子供達は独立し、我が家では長年世話を掛けた妻と仏壇を守っています。

県主催行事で千鳥ヶ淵戦没者墓苑・靖国神社参拝の折、遊就館見学者が意外と若い世代の入場者が多く、彼等が何を目的、何を感じ取っていたか、戦争（争い事）は誰一人幸せにならない事実を、多くの人々に理解して欲しいと考えるのは、自分だけでは無いはずです。

令和4年7月6日 追悼の辞

三島市遺族会 堀池俊子

私は、昭和20年5月フィリピン・ルソン島で集中的に爆撃をうけ基地に戻ってこなかった、と言う通知を受け戦死した堀池潤一の長男の嫁でございます。

戦友と言う方が、唯一形見の時計を届けて下さったときいております。

昭和14年に第一子が誕生する頃、静岡歩兵三四の六の一から手紙で、父親にひで子の方は如何ですか、何分お願い致します。異常の無い限り通知は手紙で結構ですと5通の手紙の中で初めて義母の名前がありました。

一人息子を亡くした父親は翌年胃の病で亡くなり、それから義母は針仕事、姑は台所仕事で残された3人の孫の食事係。義母は、おかずの文句も言わないで食べてくれたよ、姑は口数の少ない人だったとか話してくださいました。

カナダから着いたタイサンボク、戦死した義父がうまれた記念に植え、ご近所にも同じ頃植えられた木が2本ありますが、一番大きく成長した我が家は、手入れが行き届かなかったのだと勝手に想像しておりました。

義母に、天国に召されたらお義父さんに会えるでしょうかと話したら、私が年を取ったから潤一は会ってもわからないでしょうと笑っていましたが、今頃は、3年前に亡くなった長男、私の夫と世界の平和を祈念している事と思

います。

何も苦勞せず歩んできた私ですが、今の平和の為に貢献して下さった多くの御霊に感謝し、改めて日常の変わらない毎日が幸福だと実感しております。

本日、発表する機会を下さった田中様のお陰と、心より御礼申し上げます。

念願の慰霊巡拝

御殿場市遺族会 田代恒輔

長年私の心の奥にあった、父の戦地である中国旧満州地域への慰霊巡拝への思いが今日、日本遺族会より中国東北地区友好親善訪問参加案内が有り、同じ静岡県より参加希望の杉山さんから一緒に参加しないかとお誘いが有り、私はこの機会を逃したらもう行く機会がないと思いきさっそく申し込みました。

後日、幸いにも二人に参加通知が有り安心しました。世間では、もう戦後60年経っているからと一口に言うのを耳にする今日この頃ですが、私たちにとって60年は、色々なことが有りすぎて長く厳しい年月でした。この旅行に参加することに対して、父の顔を知らない弟と姉、母の親子4人で一緒に参加できないことが残念でなりません。

まだ見知らぬ他国の地、父がどんな場所で戦死したのか、この62年間一日も思わないことの無い日々でしたが、やっとの思いで父の眠る地へ来ることができ胸が一杯です。

中国瀋陽に着いた日の夜、テレビで北朝鮮が日本海にミサイルを7発発射したというニュースを見て、さっそく福村団長が日本へ電話し、安否を確認しました夜でした。

お父様、遅くなりましたがようやく父の眠る地に来ることが出来ましたよ。父と別れて62年、今日は7月9日誕生日を迎え、65歳になりました。誕生日の夕食会のとき、日本遺族会より誕生日おめでとうとケーキを出してくれました。予想もしなかった出来事でおどろきました。

母を連れ4人で来たかったのですが実現できず御免なさい。母とも兄弟3人元気で暮らしています。安心してお休みください。

最後に、日本遺族会、名鉄観光関係担当の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

7月9日 海拉爾（ハイラル）にて

孫へ伝えたいとの一心で 妻と孫二人護国神社へ

御殿場市遺族会 小池 武

父は昭和20年6月20日、沖縄で30歳の若さで戦死しました。戦後の母の

苦勞は想像を絶する、生きるが為の闘いは云うまでもありません。若い頃の私の気持ちは母に親孝行の一念でした。

そんな私も、戦死した父、ご先祖様の御加護により、現在妻と子・孫と平和な生活をしています。毎年5月中旬ごろになると、護国神社から父の命日祭(6月)のご案内があり、妻と参拝していましたが、前年は都合が悪くなり、前々から一度孫と一緒に参拝したいと思っていましたので誘うことに…まだ小学校低学年(四年と二年)では、昇殿参拝の意味を理解するのは難しいと思いつつ話をしましたが、あまり乗り気ではありませんでした。最終的に子ども達が遊ぶ「るくる科学館」へも行くという事を理解し命日祭に参加が決まりました。

当日は天気も良く、命日祭に参列し、最後に紅白の御幣串をお供えし、孫も真剣に参拝していた姿が、今でも鮮明に印象に残っています。

参拝後、遺品館に立ち寄り収蔵品など見て廻り、上の子は興味深げに見ていました。

孫たちが自分の曾祖父が戦争の犠牲者であることで、護国神社に魂が眠り祀られているという事を知る機会ができたと思います。

これから日本の国がどういう方向に行くのか不安多い中、人の命と平和を大切にし、英霊顕彰の理解者になってほしいと、心から願っている今日この頃です。
(平成29年1月発行の会報ごてんばより)

玉砕の島ラブアン島を訪ねて(マレーシア)

御殿場市遺族会 根上治美

毎日報道されるウクライナの悲惨な状況、なぜ同じ過ちを繰り返してしまうのか。戦没者遺族は私たちでたくさんだ。

父は二度の召集を受け、母と一緒に過ごしたのは2年7ヶ月だと話していた。戦跡巡拝に参加した母も102歳で他界した。

私も一度は参加したかった父最後の地ラブアン島、息子夫婦の応援を得て一家6人成田空港へ。途中クアラルンプールで乗り換えて、ラブアン島への到着は夜遅かった。

翌朝は静かな海、椰子の木が茂り沢山の鳥がさえずり舞う海岸。何故この島で…

私はどこまでも続く海岸波打ち際を歩いた。ただただ、歩いた。父もこの海を渡りこの海岸を見たのだらうと感傷的になる。小さな石ころを一つポケットに忍ばせ持ち帰った。小さな島と聞いていたが、廻るのに2日を要する。途中、

日本の支援団体が作った平和公園（タマンダマイ）に参拝した。

爆撃で気を失い豪州兵に救出された戦友の本によると、敵上陸前、寸土を砕く艦砲射撃が連日あり、20年6月16日～21日の間に玉砕したと思われるが、広報生死不明である。

父の属する第三中隊守備地、現在飛行場付近で献灯、御殿場の水で献水、香を焚き、帰還できなかった将兵に6人でお参りをし、「ふるさと」を歌い、最後の別れをした。涙腺が緩んだ。

夕食後、プロペラ機でコタキナバルへ。部隊の上陸した港である。19年10月に960人で編成、サンダカンに向かうも密林の行軍、65人を失い、1月6日集結完了とある。現在のコタキナバル～サンダカンには所々に穴がある舗装道路が往復700km以上、両側には椰子の木が植えられた変わらぬ景色が延々と続く。車でも大変なのに徒歩で密林の行軍、想像を絶する。

2月には転進命令がくだり撤退、2月12日より日を追って小隊ごとに先遣隊の白骨が道をふさぐ密林の行軍、生き延び健康な者だけがラブアン島へ渡った。

サンダカンの捕虜収容所跡地に記念館があり、豪州、イギリス人の捕虜1,550人移送行軍中、生存者6名のみ、まさに不幸な死の行軍である。記念館には6名の写真が掲げてあった。途中多くの戦没者墓地もあり複雑な思いだった。

二度とこの惨禍を繰り返さないよう継承していく事が遺族会の責務だと思う。

写真でしか知らない叔父を祀る

御殿場市遺族会 勝又將雄

父が亡くなり、遺族会の会員とともに、『平和の礎』を引き継いだ。昭和41年3月に地元玉穂報徳社が発刊したものだ。戦死した叔父の尋常小学校時代の教科書も一緒にあった。少年時代の叔父が墨で書いた名前がある。写真でしか知らない戦死した叔父の唯一の遺品となっている。

『平和の礎』は、先人たちが戦後20年の節目を意識して編纂したもので、編纂委員長の土屋正夫氏の書かれた「序」には「終戦後20年、移り行く時代に私たちの胸裡から忘れがちな英霊のこの崇高な精神を深く心に刻んで、心新たに玉穂の皆さんと共に明るく楽しい平和な社会を築き上げることが、英霊に答える道であり、今日の大切な務めであると信じます」とある。当時忠霊塔に奉祀されていたのは玉穂地区戦没者105柱。戦争体験者がかかわって編纂作業をして完成させた。それから半世紀が過ぎている。

地元遺族会の活動を父から引き継ぐも、地域の姿で知らないこと、わからな

いことの多いことに愕然とした。何より、教えてもらおうとすると、親戚、近所で長老の立ち位置の方の多くが亡くなっている。相談相手の「いない」その現実に呆然とした。戦後70数年の歳月を改めて思ってしまった。

いつしか、手元にあった昭和63年12月に発刊された地元の郷土史『中畑の歴史』を開くことが多くなった。先見性のある発刊事業を担われた先人に深い敬意と感謝をする。

そこに掲載されている「中畑区内除隊及復員者名簿」をめくった。区ごとに氏名、階級、在役年数、主要任地、帰還年月日が掲載されている。全部で131人の名前がある。原典資料は『玉穂郷友会従軍者名簿』。すでに父の兄弟は全員他界している。この資料で、初めて我が叔父たちの様子が分かった。私の子ども時代に、父を含めて叔父たちにも軍隊時代の話をおもひに聞いていない。兄弟に戦死した者がいることによって、自分の体験談は控えていたのかもしれない。

父の兄弟で成人した者は7人であったが、男6人中5人が召集されている。

昭和17年10月 二男 召集

昭和18年8月 長男 召集

昭和19年6月 三男 召集 … 戦死

昭和19年9月 四男 召集

昭和20年2月 五男 召集

戦争末期の国、国民の厳しい状況が如実である。戦争に行かなかったのは末弟の叔父ただ一人。叔母は少女時代に病により視力を失っていた。祖父母は成人した担い手の子どもたちのいない生活で農業を営んでいた。貧農生活そのもの。多分どこの家でもそうした状況であったのだろう。

この「先の戦争」の結末として、中畑地区内だけで58人の戦死者を数えている。そのうちの一人が叔父である。

40年近く前、突然父がパスポートを取得したいと言うので、手続きに静岡まで送迎した。まだ県庁で発券していた時代である。しかし、その直後に体調を崩してとうとう一度も使われずに亡くなってしまった。

戦友たちにかかわりある旅行社から、「フィリピンからのバシー海峡慰問の旅」の案内をもらい、そこに参加するつもりでいたらしいことが後で分かった。思いはあっても状況が許さなかった歳月だったのだろう。

先般亡くなった叔母が病床で、「子ども時代には家のために粉骨砕身働かされ、大人になって戦争でお国のために命までささげたのにあまりに不憫だ」と、

台湾バシー海峡で撃沈され亡くなり、いまだに遺骨が故郷に戻らないその兄を語り、さめざめと涙を流した。「必ず現地に行って供養してくるから」と約束したのが最後の言葉となってしまった。コロナ禍でいまだ実現していないのが切ない。

戦死した家族の最後を知っている者がいればまだ救われたという話も聞かすが、玉砕とか撃沈とか戦友たちがだれ一人残らず、その戦闘そのものが歴史から消されていることもある。戦死した叔父は所帯をもたないまま召集され戦死し、直系の血族もいない。父たち兄弟の無念さも今なら理解できる。

いまだに外地戦没者の半数近くが戦地に眠ったままで、遺骨収集も進まないのが日本の現状である。人は誕生すれば必ず肉体的な滅びがある。それが一度目の死である。二度目は人の記憶から消されることである。^{ねんご}懇ろに先祖供養している家庭であっても世代が交代していく中で、戦没者に対する思いは複雑だろうと思う。人として、「時が過ぎたので」と、切って捨てるような対応はだれもできない。戦没者を「二度殺してはならない」と、毎年「暑い夏」にその思いを新たにし、他の先祖と異なる軍服姿の叔父の写真を見ては、子や孫たちに話をしている。

運命を変えた戦争

御殿場市遺族会 岩田俊光

私の伯父岩田綱良は、実業学校卒業後、両親妹達と実家の農業を営んでいましたが、昭和16年25歳で応召し、昭和18年暮に旧ビルマフーコン県で偵察任務中に狙撃され、27歳で戦死しました。私は伯父の顔は勿論、声すら聞いた事はありません。家に残るわずか一枚の写真を見ただけです。綱良の両親（私の祖父母）は悲嘆の中、綱良の弟（私の父）を家に呼び戻しました。弟は既に旧農林省の職員でしたが、家を継がせる為に退職させたのです。その時祖父は私の父に「お前の兄綱良は、地元では評判の優秀な男だから、復員しても、地元の役職を色々やるようになって、家の農業はあまり出来なかったかもしれない。慣れない農業を憶えて運命と思ってこの家を継いで欲しい。」と話したそうです。

昭和23年に私の母が父の許に嫁いできました。それから私の両親は、朝日よりも早く起き月が沈むまで働いて、夜には床にも入らず上がり戸で寝た事もありました。私も小学校二年からは田植えもして、必死で手伝いました。それでも生活は困窮を極め、私の靴はゴムで6年間同じ靴でした。そんな時に国から頂いた戦没者の恩給は本当に有難かったです。

私が社会人になってからようやく生活も安定し、私にも子供が出来てからふと思います。この戦争で伯父が亡くなっていなかったら、私も私の子供達もこの世に存在しなかったかも知れない、何とも言えない運命のやるせなさを感じました。そんな事を思いながら、すべての戦死戦没者と伯父の御霊が安らかならん事を祈ります。…合掌

父のいない生活

御殿場市遺族会 杉山いとゑ

祖国を愛し祖国の為に散った父。父を全く知らない私。小さい頃の苦しさ、悲しみは、片時も私の心から忘れた事はありません。

母より聞かされている父の事は、大阪の尼崎の工場で働いていた昭和18年11月召集を受け、マニラでアメリカ軍との戦闘で負傷し、マニラ病院より大阪の陸軍病院に運ばれ19年4月15日戦死した。

子は親の背中を見て育つと言います。私は母親が父替りとして村内の仕事や農業を女手一つでやり、朝早くから家の仕事、そして勤めに出かける。帰ってくると月の光で農作業をしている姿が、今でも目に浮かびます。近所の友達の家で暗くなるまで遊び、一人の淋しさをまぎらわしておりました。特に雷が鳴ると、あまりの恐ろしさに布団をかぶって、一人で泣いていた事が今でも忘れられません。戦争という二文字で誰を憎むことも出来ず、只々生きる事だけを目標として母と過ごして来ました。成人になった私は、苦勞して育ててくれた母に恩返しをしてやりたいとの一心の思いでした。

今では三人の子供達もそれぞれ就職し、苦しいながらもようやく世間並みの生活が出来るようになりました。人に言えない苦勞や近所の家庭をうらやましく思った10代。母と二人で過ごした過去が、夢の内に過ぎ去った感じが致します。せめて子供達には私が味わった苦しい経験はさせたくない気持ちで一杯です。

今の時代は物は豊富にあり、お金さえあればどうにでもなる時代に変化した今日、たった半世紀前の出来事が夢のようです。今ある豊かな生活の陰に、数えきれない犠牲者によって生まれる数々の不幸な戦争を、二度と繰り返す事のない様願っています。

平成6年4月15日、父の五十回忌の法要も家族全員にて実施する事が出来、父への孝行ができたように思っています。

(平成7年7月発行の平和へ乃道のりより)

私の戦中戦後

御殿場市遺族会 勝又静江

平成6年8月、永い年月気にかけてくれた心やさしい夫とともに、肉親が眠る北満の地に立つ事ができました。かつての満蒙開拓青少年義勇軍の人達の訪中に便乗しての8日間の慰霊の旅でした。その中には私と同じように母と弟妹をソ満国境で失った、元中隊長の息子さん（大学教授）も一緒でした。

在郷軍人だった父は、日支事変が勃発すると間もなく応召、私が小学校二年の時でした。母は幼い子供達を育てながら祖父母を助けて野良仕事や養蚕、竹行李作り等に精出して夢中で働き、毎夜のように神社へ丑の刻（午前二時）参りをして父の無事を祈っておりました。上海、南京等の第一線で戦っていた父は2年後に無事帰還しましたが、その翌年家が全焼したのがきっかけで、義勇軍の幹部として渡満いたしました。

満蒙開拓青少年義勇軍とは、14歳位の少年が、満州は日本の生命線、五族協和、王道楽土建設といった当時の国策に大きな夢を抱いて渡満、一年間の訓練を経てソ満国境近くへ開拓団として入植、軍事教育を受けながら大地を耕し、自分達と関東軍の食糧増産に励み、お国のために尽くした人達の事です。

日本が太平洋戦争に突入して戦果が華々しく報道されていた昭和17年3月、国民学校初等科の第一回卒業式に、父はいかめしい軍服姿に金鵄勲章をつけて、来賓と父兄を兼ねて出席していました。卒業生代表にも選ばれ、進学も決まって最高に幸せな私の卒業式でした。父は家族を呼び寄せるために帰国し、私の卒業式に出席できたわけです。私は進学のため祖父母と残ることになっていました。祖父母に非常に可愛がられていたので、私が残らなければ母は父のもとに行かれなかったのです。御殿場実業学校（現御殿場高校）入学式のあと沼津駅ホームまでの見送りが、肉親との最後の別れとなってしまいました。

やがて食糧事情が悪化し、買う衣料品もなく、母親代りの祖母は私の弁当を作るための米の買い出しに苦勞し、セルの着物を染めてセーラー服やスカートを作り、学校の裁縫の教材には古い着物をほどいて手まめに洗い張りして整えてくれました。向学心にもえ、父母と遠く別れてまで入った学校なのに、好きな英語は二年から廃止、毎日のように田植えや畑うないの勤勞奉仕と軍事教練ばかり。今思えばそんな悲惨な学校生活でも、すべてお国のためと思い、従軍看護婦になりたいと本気で考え、神風の起こる事を信じて終戦のその日まで戦争に負けるなど夢にも思いませんでした。人類が殺しあう戦争に何の疑いも持たなかったのですから、軍国主義教育の影響は本当に恐ろしいものです。

昭和20年8月9日ソ連参戦。それまでに若者はほとんど現地召集され、女、

子供、老人ばかりのソ満国境の開拓団は、頼みにしていた関東軍に見捨てられ、悲惨な逃避行が始まったのです。1カ月ほどの食糧とわずかな身の廻りの品を荷車に積み、当時11歳の弟がその荷車を引き、8歳の妹は赤子を背負い、母が2人の幼子の手を引いての逃避行では、どうして気の遠くなるような長い道のりを逃げる事ができましょう。

母達は二度に亘るソ連戦車軍の攻撃を受け、砲弾に散った者、又子供達を道づれに自害し果てた人も多く、全滅に近い状態だったと聞きました。せめてその時父が一緒だったらとふびんでなりません。応召中の父は牡丹江の収容所で栄養失調のため死亡したと推定されていますが確かな事は何もわかっていません。

満州で一番の犠牲になったのは開拓団の人達でした。奇跡的に生還した人達の手記には、ぼろぼろの衣服をまとい、靴は破れ、食べるものとてなく、灼熱、極寒の中の逃避行、足手まといの子供は殺すしかなく、ソ連軍と匪族の襲撃、坊主頭の婦女子でも犯されて自害する者、まさにこの世の地獄絵巻が書かれています。苦勞して奉天あたりまで辿りついても、収容所で病と栄養失調でばたばたと多くの人が命を落としたのです。

満州からの仕送りがなくなってからの祖父母と私の生活は大変でした。祖父は苦勞して求めた土地を売り、祖母の作っただんごを横浜のやみ市へ売りに行ったりして生活していましたが、私を立派に卒業させてくれました。未帰還者として扱われていた息子達の無事を毎日神に祈り、「必ず帰ってきます。」という占い師の言葉に一縷の望みを託しながら、やせて病がちだった祖母は、私が村役場へ就職後まもなくこの世を去りました。最愛の祖母を失い、どうして私一人だけ生き残ったのかとうらめしく、一時は自殺まで思いつめました。でも私のまわりの人達は皆私を可愛がって下さいました。生活のために始めた勤めも次第に生き甲斐となり、好きな人と結婚することができました。

祖父の亡きあと戦時死亡宣告の手続きをして戸籍を抹消し、遺骨のない7人の葬儀を済ませて供養いたしました。

私の子ども達が当時の父母をとくに越える年齢となりました。それでも私の父母はあくまで若く立派で、弟妹達は幼いまま、私の中に生きています。

戦争の犠牲者は私達だけではありません。一部の軍部の人達のために日本人は加害者でもありました。命を軽んじる戦争に正義などあろうはずがありません。

激動の時代に生きた過去に思いをはせ、又、ぜいたくな日舞の発表会の練習

に励みながら、今のもったいない程の幸せをかみしめております。

戦後五十年、この辺で私の戦後も一区切りつけたいと思います。そしてこれからが決して戦前でない事を祈りながら。

(平成7年7月発行の平和へ乃道のりより)

遺族のひとりとして

裾野市遺族会 横山清美

昭和18年3月3日、夫の父重利は駆逐艦“朝汐”乗船中ニューギニア方面にて敵弾を受け“朝汐”と運命を共にしました。遺児である勝利(私の夫)は父の戦死後、同年7月30日埼玉県にて生を受けました。母は勝利が三歳の頃、中清水の重利の両親に託し実家に戻りました。その後、勝利は祖父母のもと成長し、小学生の頃より伯母を母と慕い従兄や従姉達に弟としてかわいがられ、生活の全てをお世話になって成人となりました。私と結婚し苦勞もありましたが幸せな生活を送りました。

夫は平成6年厚生省の援助を受け、静岡県の代表としてニューギニアの慰霊団に加わり父の顔も知らず慰霊の為旅立ちました。洋上での慰霊祭では“お父さん、一緒に日本に帰ろうよ、と涙して大声で叫び続けたそうです。

その夫も大病を患い、平成17年11月26日薬石効無く温厚と実直さを惜しまれながら62歳で私達家族のもとから、父の待つところに旅立ちました。“行く先に未だ見ぬ父の待つものを、と墓誌に刻みました。

戦後77年の歳月が経ち、戦争の悲惨さを知らない若者達が多く、仕方のない実情ではありますが、現在の私達が幸せで、平和な生活が維持出来ることは、戦争で無念の犠牲者があるものと常日頃考えます。

今後も遺族のひとりとして息子達に祖父重利のこと、父勝利の悲しい思いを忘れないよう、引継いで行くことを誓います。

日の丸拝揚に思う

小山町遺族会 遠藤豪

私の家では、父親の弟、いわゆる叔父が3人戦死しております。こんな思い出があります。私が小学校五、六年生の頃、学校で先生から『国民の祝日には、日の丸を各家庭で揚げましょう』との話がありました。しかし我が家では、これまで一度も揚げたことはありません。決して考え方の違いなどの理由からではありません。当時私が祖父に「なぜ家では日の丸を飾らないのか」と子供心に不思議に思っていたことを話した時です。いつも気丈夫な祖父が突然涙を流し、こう言いました。

「豪や、うちでは俺の息子4人が国に応召され3人が帰って来なかった。これだけ日本と言う国に奉仕したのに、今、平和になったとはいえ日の丸を揚げることは、戦死した子供達に申し訳が立たない」と話しました。私もおもわず、涙が込み上げてきた事を今でも鮮明に覚えております。以来私も、日の丸を飾った事はありません。決して日本と言う国が嫌いな訳ではなく、愛国心がない訳でもありません。ただ心の問題として私の代まではそうするつもりです。

今、遺族会の役員となり、護国神社や靖国神社などの参拝をする機会が増えてまいりました。そこで気付くのが靖国神社の合祀の問題です。これについては、様々な意見がありますので、あえてどれが正しいなどとは言えませんが、天皇陛下をはじめ誰もが参拝出来、諸外国からも批判をあびることなく参拝出来る靖国神社であらん事を願ってやみません。

(平成28年4月発行の静岡県遺族会報より)

あの戦争と私

富士市遺族会 栗田 穎

昭和15年生れの私76歳です。終戦時まだ5歳、戦争の事はほとんど知りません。

ただ昭和20年の2月、父戦死の公報が入り、白木の箱だけが帰って来ました。本当に空箱だけ。この時の事は鮮明に覚えています。この事が長い間ずっと気に掛かっておりました。

最終の地はレイテ島。玉碎の地と聞かされました。気掛かりなまま自分の生活に追われて定年退職になるまで、何か借り物をしている様な落ち着かない中途半端な気持ちでした。61歳になってレイテ島慰霊訪問団に加えていただき、父の最終の地らしき場所で小さな慰霊祭を致しました。

「こんな所に長い間放っておいてごめん」初めて号泣しました。追悼の辞がまともに読めませんでした。

その後地元の遺族会活動に加えていただき、種々の話が出る都度腹立たしい事も有り稚拙な文を書かせていただきました。

第一は、あの戦争の正式名称は『大東亜戦争』であり、『第二次世界大戦』とか『太平洋戦争』と呼ぶのは間違いであり、名称により意味あいが違ってきます。

第二は、靖国神社問題も他国の内政干渉であり、自国の為戦って亡くなった将兵に時の総理大臣が尊崇の念を表すことも出来ない歯痒さ。

第三は、間違いだらけの東京裁判。

第四は、慰安婦問題は一介の詐話作りのフィクションに大新聞が乗せられたり。

と書き出せばまだまだ色々な事象がありますが、歴史についての見方はそれぞれライトの当て方で全く逆の見え方もあると思いますがこれは私の感じた事を書きました。

最後にもっと困った事は、遺族会の会員の減少です。英霊の父母は勿論その寡婦も毎年減り続け、その子供である私達も70歳を過ぎていたので当然かと思いますが、英霊に対する慰霊と顕彰の気持ちはこれからの時代の平和の維持に絶対欠く事が出来ない。続けることが今生きている我々の責務だと思います。

雑文で失礼いたしました。 (平成29年4月発行の静岡県遺族会報より)

フィリピン レイテ島参拝の思い出

富士宮市遺族会 清 功

太平洋戦争が終わり、父を失って77年の歳月が過ぎ去ってしまいました。

平成25年2月6日、念願かなって姉二人と共に静岡県フィリピンレイテ島参拝団の一員として、県議団の方々そして私たち遺族が夢にまで見たこの島に来ることができました。

レイテ島は思っていたよりジャングル化し、また時間の制約もあり戦争の傷跡はあまり見ることは出来ませんでした。目的である式典(追悼式)は丁寧にさせていただきました。平和の碑の周辺は現地の人達が草刈りもしてくださっており、すがすがしい中で始まりました。まず神社庁の方々が日本から持参して頂いた水を記念碑にそそぎ、県議団長の挨拶の後、私も遺族代表の挨拶をと言われ、何しろテントの中ではありますが、35度くらいあったでしょうか、私は「お父さん遅くなってごめんなさい」と叫んでしまいました。来賓の方々、遺族の皆様、この地レイテ島に足を運んでくださった方々にお礼を言いながら、「父がこの地で祖国日本の繁栄、これからは平和であってほしいと願いつつ、戦死する時はどんなことを考えただろう。きっと『妻を、5人の子供を、年老いた両親を残して、ここで死ぬ』。私は考えただけで、自分の心を抑えることができません。そんな思いが脳裏をよぎってしまい、途中からは涙と汗で読んでいるメモが見えなくなってしまいました。ふとわれに返り、前を見上げると、遺族はじめ県議団の方々も感激したのか涙してくださっていました。私の姉たちは出発する時から、これが最初で最後だと言っていたこともあり、最初から最後まで泣いている始末でした。

式典後よく見ると慰霊碑には「平和の碑」と刻まれ、横には石川前県知事の

名前があり、裏には「日比両国の永遠の繁栄を祈念し建立 戦後 60 年 2006 年 1 月静岡県議会英霊にこたえる議員団」と刻まれてありました。

最後に、遺族の方達と、帰国したらお墓に入れてやりたいと、碑の周りの小石を頂いて帰ることにしました。また、この記念碑を守ってくださるレイテ島の方々に感謝しながらレイテ島を後にしてマニラに向かいました。夜は議員団の方々や遺族の人達と交流を深め、有意義な時間を海外で過ごすことが出来ました。

この参拝は、私にとって残された短い人生ではありますが、決して忘れる事はできない思い出になりました。

予科練甲飛十期の碑に思うこと

静岡市静岡遺族会 高井成治

ウクライナの惨状に心が痛みますが、同時に強く心に浮かんでくるのが、昭和 20 年 6 月の静岡大空襲の後、清水山の隠れ場所から我が家に戻ると、隣近所は全て焼け落ちて、すさまじい匂いが立ちこめていました。

暫くして両親にも再会できましたが、その後は防空壕での厳しい生活が続き、戦争の恐ろしさを実感したことを今でも忘れません。

やがて、終戦を迎えましたが、両親が待ちわびていた長兄の消息は全く不明でした。

数年後、漸く公報が届き、比島で戦死していたことが判りました。遺骨として届けられた木箱の中は、兄の名前が書かれた一枚の紙切れでした。気丈な母が深夜嗚咽していた姿は忘れられません。

暫くして予科練十期の戦友たちのご尽力で、兵庫県宝塚市のお寺『聖天』さんに『神風特別攻撃隊之魁／甲飛十期の碑』が建立されました。

碑文によれば、

『敷島の大和心を人問わば

朝日に匂う山桜かな 本居宣長

この歌より「敷島・大和・朝日・山桜」さらに「菊水」の五隊が【神風特別攻撃隊】として編成されることとなり、甲飛十期の零戦搭乗員より 20 余名が選抜されて神風特別攻撃隊の先駆けとなった。

若干 20 歳に満たない若者がひたすら祖国最後の勝利を信じ、父母を思い故山を偲び、黙々とその任務を完遂して散華し、卒業時 1,004 名の 80% が帰らぬ人となった。その崇高で至純な行為と精神を後世に伝え、霊を慰め徳を顕彰するためにこの碑を建立する』とあります。

私の長兄も、同じ予科練 10 期生として比島で戦死し、仲間と共にここに眠っています。

兄たちの安らかな眠りを祈るとともに、また会いに行きたいと念じています。

初めて知った父の戦死の状況

静岡市静岡遺族会 為貝宏邦

母の三回忌が済み、遺品の整理をしている中で、父と同じ部隊に所属し、復員してきた方からの手紙がありました。内容は父の最後の状況について書かれており、初めて知ることでした。

母からは、南方で敵方の空爆を受け、爆弾の破片が体中に刺さり、昭和 19 年 10 月 19 日に戦死したと聞いていました。私は被弾して直ぐ戦死したと思っていました。しかし、手紙には 7 月 19 日に被弾し、命は助かったが、破片が無数に刺さり、テントに担ぎ込まれたが治療は十分でなく「痛い、痛い」と言っていたとのことでした。2 ヶ月位経って最後を悟り、手紙を書きたいと訴えたのですが、書く力はなく、1 カ月後位に命が尽きたということが書かれていました。

私は、80 歳近くになるまで 3 か月間も痛さに苦しみ生死の境をさ迷って戦死していったことを知らなかった自分を恥じるばかりです。

考えてみると、母と戦争のことや父の戦死について深く話すことはありませんでした。そのため父の苦しみを知ってあげられなく、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

また、母にも父のことを聞いてあげなかったことは、つらい思いをさせてしまったんだろうと後悔の日々です。

今私にできることは、多くの英霊の方々が父と同じように何日も苦しみ戦死していったことを思うとき、英霊の御霊が安らかに、そして心静かにお休みいただけるよう、護国神社の清掃活動と慰霊の気持ちをいつまでも持ち続け、各種の慰霊行事に参加していくことだと自分に言い聞かせ、実行しています。

清掃活動は、静岡遺族会有志の方々と、偶数月に行っています。慰霊のお気持ちがある方は、ぜひ一緒にやりましょう。

(令和 2 年静岡市静岡遺族会会報たちあおいより)

支部長として思うこと

静岡市静岡遺族会 野田成子

遺族会の支部長をさせていただいてから 15 年目となります。勤めているときは遺族会とはほとんど関わっていませんでしたが、入会のきっかけとなった

戦死した父についてお話させていただきます。

実は、私は父の顔を知りません。父も私の顔を知りません。私が母のお腹にいたとき沖縄の戦地に行き戦死しました。残っている戦地からの父の手紙では女の子が生まれたことを喜んでいました。

戦後の母の苦労は並大抵ではなかったと思いますが、私は母に守られ父親がいないという寂しさを感じたことはありませんでした。母は我が子に会えずに亡くなった父の為に私の成長を生きがいとして、一生懸命育ててくれました。そんな母の望みは、一人娘の私を私立の学校に行かせることでした。しかしその当時は片親では私立の学校に行かせることも、銀行に就職することもできませんでした。母がどれだけ悲しく、悔しかったのか、その想いがわかり今でも私の心に残っています。戦争により父母そして私の人生も変わってしまいましたが、父や母が私に残していったくれた想いを大切にしていきたいと思っています。

人は二度死ぬと言われています。一回目は肉体が亡くなること。二回目は人から忘れ去られることだそうです。私が支部長を受けた時よりどんどん会員が減りさみしい限りです。でも戦死された方々とつながっているのであれば戦後の平和の為に犠牲になられた人達を忘れないでほしいと願うばかりです。

遺族会で持てる繋がりをこれからも大切にしていきたいと思っています。

(令和元年静岡市静岡遺族会会報たちあおいより)

平成28年フィリピン墓参二回め追悼文より

お父さんへ

静岡市清水遺族会 深澤きぬ子

この度の慰霊訪問も遺族会のお陰です。何よりも天皇陛下皇后陛下がフィリピンをご訪問なさる行程の中で、両陛下をお出迎えしての慰霊祭に参加できた事に感謝しています。お父さんたち英霊もきっと有難く感謝していると思います。

さて、終戦後70年が過ぎました。メディアで戦争当時の事が多く報道されています。防空壕の中で赤ん坊だった私も71歳になりました。三人の子供も家庭を持ち孫が7人となりました。母はひ孫を5人見る事が出来ました。平成14年におくりました。

戦争の悲惨さは遺族でなければわかりません。今も世界中のどこかで起きています。多くの英霊や未亡人となった母達の事を思うと、「不戦の誓い」を願わずにはいられません。次の世代へ語り継ぐ事が私達の使命だと思います。世

の中の誰もが中流意識を持つようになりました。平和があるのも英霊の尊い犠牲があった事決して忘れません。かけがえのない命を誰もが全う出来る事を心から願います。高齢社会となり問題も様々あります。地域の為に受けたご恩をお返し出来るように頑張りたいと思います。思いは尽きませんが「お父さん、どうぞ安らかに眠りください」

それでは、「戦没者追弔御和賛」をお唱え致します。

- 一 幾山川を隔てつつ み国安かれ世の幸と
いくさの庭に散りゆきし あわれ^{あまた}数多の若桜
- 二 されど棒げし真心に 生死^{まあい}はあらし^{あめつち}雨土の
いのちと共に いさおしは とわに此の世に輝かん
恨み憎しみのりこえて 覚^{さと}りに登るみたまなり
ただ安かれと ひたすらに仰ぎまういて祈らなん
戦没者追弔御詠歌 み仏の 教えかざして高らかに
ともにつかばや平和の鐘を

平成 28 年 1 月 28 日 ルソン島バギオ南西の山慰霊祭場にて

平成 11 年 8 月 15 日 追悼のことば

静岡市清水遺族会 鈴木喜代枝

改めて振り返ってみますと、私の父の召集は昭和 19 年 9 月 20 日、その時の父の年齢は 37 歳、母が 35 歳でありました。長女の私は小学校五年生、更に妹 4 人が居て、5 人姉妹ですが一番下の妹はまだ 1 歳でした。

出征する際、父は私を呼んで申しました。「戦争はもう長くないだろう。すぐ終わると思うが、あなたがお姉さんだから、母の言うことを聞いて妹たちの面倒を見て欲しい、頼んだよ」と。これが父の最後のことばになろうとは、当時の私には考えられないことでした。しかし、この“父のことば”が長い間私の心の支えとなりました。とうとう終戦になり、近所でもあちらこちらの家で復員して帰ってきます。私たちも父の帰りを今日か明日かと一日千秋の思いで待ち続けておりましたのに、終戦の日から 2 年も経ったある日、それは「父の戦死」の知らせでありました。

フィリピン・レイテ島・カンギポット山

昭和 20 年 3 月 17 日 戦死

空しい 1 枚の紙にしばし呆然となるばかりでした。母は私達に涙は見せませんでした。夜私達が寝静まると佛様の前で何か語らいながら泣いているので

した。母が一番辛かったと思います。

それから片親だけの就職、進学問題など何かにつけて、こんな時に父が居てくれたらと私がひとりで泣いた夜もありました。苦しくて長いながい歳月。しかし私たちは互いに励まし助け合いながら懸命に努力してきました。それに地域の暖かいご支援もあって私達は困難な時代を乗り越えることができたと考えております。

戦後の日本は民主国家として再生し、経済の発展に力を尽くして、今日の平和と繁栄を築き上げました。しかし、その陰には過ぎし大戦において祖国の安泰を願い、家族を案じながら戦場で散り、戦火にたおれ、異郷の地で亡くなられた尊い生命の犠牲がありました。更に国内でも多くの方々が戦争の被災者として生命をなくしています。その数は幾百万人という尊い人柱があったことを忘れてはならないと思うのです。

少し前になりますが、静岡県遺族会主催で海外の戦跡地慰霊巡拝のお話がありまして、父の終焉地フィリピン・レイテ島での慰霊祭でしたから、私はとびつくように申し込みました。第1回の平成元年と第四回の平成4年との2度参加させていただき、レイテ島での慰霊祭に深い感激を味わいました。

国旗日の丸の掲揚と君が代斉唱、海ゆかばと靖国の歌そして般若心経を唱えているうちに、胸がこみあげ涙が頬に止めどなく流れる。涙、涙の慰霊祭でした。

遺族の皆様、異国で多くの英霊が待っております。できたら一人でも多く巡拝に参加して供養して欲しいと思います。

また、レイテ島は激戦の跡地で復興ができていないこと、住民が貧しい生活ぶりであったこと等、悲惨な戦争の傷あとに驚きを禁じ得ませんでした。

靖国神社について、先日の新聞報道によりますと、政府は公式参拝の復活のためと、更には宗教を問わず国民全体が慰霊できるように神社の在り方を見直し環境整備を図る考えとのこと。今世紀中に解決したいという政府の熱意に期待したいと思います。

最後に、日本が戦争のない平和な国として栄え、美しい日の丸の旗が平和の象徴となって世界の空に翻ることを心から念願するものでございます。

ここに私のつたない述懐を、わが父の御霊と併せて清水市戦没者の御霊に捧げ、謹んで御霊の平安をお祈りいたします。 合 掌

父の温もり

静岡市清水遺族会 小野塚通子

サイパンの 砂を握りて 父偲ぶ
ほのかな温み 伝えん母に

平成 24 年に日本遺族会からマリアナ諸島慰霊友好親善使節団員としてサイパン島を訪れた時の想いです。

父は昭和 18 年に出征し、浜松の連隊にいたわずかな期間に面会に行ったことです。祖父母と母、弟と私が浜松駅に降りたつと、人ごみをかき分けて父が現れ私を抱き上げました。まだ三歳に満たなかったのに何か月ぶりにあった父の笑顔とその大きな手の温かさをかすかに覚えています。間もなく中国に、そしてサイパン島に行ったのでした。

あれから 70 年近くたったこの日、私の記憶に残っているかすかな温もりを求め、サイパン島の海岸に立ち、砂を握りしめました。

思い起こせば平成になってから母にサイパン行きを勧めたことがありましたが、「お父さんが散ってしまった地の上を歩くことはできない」と頑なに拒否され、以来サイパンのことは話題にしないよう気遣ってきました。

私が六歳ころだったでしょうか。外遊びから家に帰ると、見知らぬ男の方がいて、そばにはうなだれ涙を流している祖父母と母がいました。事情を知らない私は母の顔を覗き込み「どうして泣くの」と聞いたことを鮮明に覚えています。後に祖母が話してくれました。父の戦死の公報が入り、合同葬儀が済んでも家族は父の死を信じられずにいたところ、同じ部隊で帰還された方が富山にいと知り、母が手紙を書いたそうです。あの頃交通事情は悪く食料も乏しいなか我が家を探すのはさぞ大変なことだったろうと頭が下がります。

そして辛い経験を話してくれたのです。

昭和 19 年 7 月 18 日の朝、父は海岸に残り、その方は食料を取る班で山に入ったとき艦砲射撃を受けたが奇跡的に助かり、海岸に戻ってみると、そこには草一本も無くすべて洗い流されていたこと。我家の餅つき用臼を指さし、この位大きな爆弾が雨霰あられの如く振ってきたとの話に、家族は父の生還を諦めたそうです。父の悲惨な最後を知った母は、サイパンの土を踏むことができなかったのです。

埼玉県遺族会長杉山さんが団長、深津さんも参加された使節団に私は埼玉県から参加しました。それがご縁で今回護国神社での再会となり、同じ世代を生きの方々と、心休まる時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

戦争の悲惨さを後世に伝えたい！

藤枝市遺族会 神谷陽子

私の父は、昭和19年10月に出征し静岡の三十四連隊に入隊、その翌日満州に渡ったそうです。満3歳の長女と1歳の次女を残し、そして、母は私を身ごもり臨月の身でした。その時の父を見送る母の気持ちは、いかばかりかと思うと胸が熱くなります。また、父も私の誕生をどんなにか心配してくれたかと思えます。

それから数日後、私はへその緒をふたまわり半も巻いて誕生しました。お産婆さん（助産婦）が、この子はよく命があった、すごい生命力だと喜んで下さったそうです。母は父の元、戦地に「陽子」と名付けたことを手紙で知らせました。当時、戦地からの手紙が届くことは容易な事ではなく、内容によってはそのままになってしまう様ですが、無事に手紙が届き、父からは「陽子はいいい名前だ。元気で育ってほしい、そして太陽の様に明るく人の為に役立つ人になってほしい…」と、手紙の内容を理解できる年頃、中学生になってから母がその手紙を見せてくれました。親の思い、願いが今になってより深く理解でき、父の顔も写真でしか見ることはできませんが、私にとってはその手紙が一番の宝物であり、心の支えでもあります。

母は私達三人の子供をかかえ苦しい時代、昼夜とわず一生懸命働き続けて育ててくれました。子供の頃、夜中に目が覚めると母は仕立物の縫い物をしていました。いつお母さんは寝るんだろうと不思議に思った事もありました。また、今でも思い出すことは、月夜の晩、裏口の戸口がガタガタはずす音が聞こえてきました。母は3人の子供にだまって！と指示を出し、泥棒が戸口に手をかける瞬間を見はからって、大きな声で「誰だ!!」と怒鳴りました。その声にあわてた二人組の泥棒、一目散に逃げよう

としたが、家の横にある小さな池に足をすべらせながら逃げて行った事をよく覚えています。必死で子供を守る母の姿…。一心に働いた母の支えは、やはり父への思いだったと思います。その母も96歳で父の元へと旅立ちました。

母は何かある度に「お父さんに会ったら三人の子供達の事を報告するから…」とよく言っていました。今頃母は、父と沢山の話をしていることでしょう。

戦後77年経ちました。戦争は生き地獄です。戦争の悲惨さ、恐ろしさを後世に伝え、二度と繰り返さない為にも、その記憶を風化させることなく、次の世代に継承していくことが、私達遺児に課せられた使命だと思います。これからも私達藤枝市遺族会女性部は自分の体験を、そして平和への願いを込めて語

り部として活動していかなければ消滅してしまう。今だからこそ、私達が直接何かできる訳ではありませんが、戦争を知る人が減り、多くの人があるの本当の悲惨さ怖さを知らないでいれば、武力で問題解決すればよいという考えを持つ人が増えてしまいます。私達遺児は、子や孫、ひ孫まで尊い生命を祖国の為に捧げたかけがいのない父親を失った悲惨さを後世に伝えていかなければ、と切に思います。

戦後70余年過ぎて、亡き父と母を知る 藤枝市遺族会 塚本真人

昭和20年6月9日、名古屋上空を襲ったB29は、僅か8分間、一瞬にして街全体を灰燼と化し、一万数千の死傷者を出したとされています。

私の父塚本峯雄は愛知時計という軍需工場に勤めていましたが、ここも、紅蓮の炎に包まれ巨大な建物は敗戦の日本を象徴するかのよう崩れ落ち、自らも悲惨な戦争の犠牲となり31歳の若さで命を落としました。

間もなく迎えた灼熱の太陽のもとでの終戦、そして、瓦礫と化した街を容赦なく北風が吹き抜ける厳しい冬もあっという間に訪れ、昭和20年も暮れようとする時、母は4歳の姉を抱え生活難にあえぎながら郷里静岡に戻りました。

私は母つゆの実家の部屋の片隅で、かすかな産声をあげました。二年生を頭に5人の甥姪のいる中での居候生活、長期にわたってお世話になることは、肉親であればあるほど、日増しに精神的な悩みも加わったようでした。

しかし、姉幸江も私もこうした母の心労を理解するにはあまりにも幼過ぎ、栄養失調で生まれた私は、母にとってお荷物だったようで、野良仕事から帰ったら死んでいてくれるかしらと思ったこともあったそうです。そんな私を背負い、姉の手を引いて瀬戸川の土手に佇んだことも、夕焼けの空にねぐらへ帰る鴉でさえ親子連れなのにと、涙した日もあったと聞きました。

7年後、実家を出ました。農家の日雇い、籠を背負っての行商を始め、やがて小さな店を始めました。生活保護を受けながらの暮らし、経済的には苦しかったはずですが。しかし学校へ持って行くお弁当だけは一日も欠かすことなく持たせてくれました。軍属の妻子に対する特別給付金が支給され始めたのは昭和38年。母の口癖は「一日も早く 納税義務者になりたい」という言葉でした。

以来、多くの人に支えられ、母は平成24年、92歳で逝きました。晩年は5年間の車椅子生活でしたが、介護施設のデイサービスから帰ってくるたびに、何かにつけて「今が一番幸せだよ、ありがとう」とよく言ってくれていました。

平成30年、父の命日の日、偶然にも『紺碧の空が 裂けた日（愛知時計・

愛知航空機爆撃体験手記)』という本の中に、父を親友だという5歳年上の中村久夫さんの「夫婦の絆」と題した手記を見つけました。

そこには、「6月9日の朝礼の時、みんなの姿ははっきりと見えているのに、親友の塚本峯雄君だけがボウと見えて、いくら目を擦ってもよく見えない、これが俗にいう影が薄いということかと思い、塚本君向かって、『おい、塚本君、今日は君の影が薄いから、もし会社が爆撃されたら君は死ぬかも知れんぞ、今から早退して帰れよ』『馬鹿野郎、この戦時下に死ぬかも知れんなんて言って早退ができると思うか、馬鹿なことをいうな』と、そんな書き出しから始まり二人のやり取り、防空壕での様子「ここは危ないから僕は他へ行く」と飛び出した父、最後に二人が名前を呼びあった瞬間まで、克明に書かれていました。私は写真の顔の父しか知りませんが、父のその瞬間を垣間見た気がしました。そして、その後の母の様子も書かれていました。

父は常々母に「愛知時計が爆撃されたと聞いて、一夜明けても帰らなかったら、リヤカーを引いて、遺体を取りに来てくれ」と言っていたそうで、9日、最終電車まで待っても帰ってきませんでした。

母は夜明けを待って、甥っ子と二人、リヤカーを引いて二里半の道のりを急いだそうです。道々夫の声で、「日比野にいる、日比野にいるよ」と何度も聞こえたので、日比野の遺体収容所に直行し何の苦労もなく夫の遺体のおいてある場所に行けたというのです。これが夫婦の絆というものでしょうかと涙ぐんでおられ、そして、「塚本の形見です」と言って、亡くなった時刻の記入された戸籍抄本と写真を私にくださり、淋しそうな姿で田舎に帰って行かれたと…これを読み返すたびに、父を偲び、悲しみのどん底の中、必死に耐え乗り越えてきた母を想い胸が熱くなります。

実はこの本、18年ほど前、中村さんのご子息（博史さん）が、「父が生前ずっと気にかけて大切にしていたものです」と、当時、母が中村久夫さんに託した戸籍抄本と写真と一緒に本籍地をたよりにはるばる届けに来てくれていたものでした。

終戦から70余年を過ぎた今、母と中村さんが再会できていたら、どんな話をしていただろう。積もる話も山ほどあつたらうに。

遠い異国で死闘を繰り広げ家族を想いつつ散った人たち、残された多くの遺族、それぞれの辿ってきた道、悲惨な戦争の修羅場をくぐり抜けてきた多くの貴重な体験があることを、時の流れの中で風化させてはならないと改めて感じます。

恒久平和を願って

藤枝市遺族会 服部之子

母は2人の女兒そして間もなく生まれる予定の3人目をお腹に身ごもり、貧しくとも幸せな私達親子を、突然絶望と不安に落とし入れたのは、一枚の「赤紙」召集令状でした。

僧侶であり、私立高校の教員でもあった父は、戦争が益々厳烈を極めた昭和19年10月、母と姉妹を残して出征しました。出征後間もなく三女、妹が産まれました。当時の教育を受けた人達は「名誉な応召」と言われ、母は涙を見せることも出来ず、父を笑顔で送り出したそうです。

そして3日程経って「満州のハイラルの方に出発 返信無用」のたった一枚の葉書が届いたそうです。その手紙で満州方面へ行ったことが分かりましたが、その後の消息については全く分かりませんでした。母は毎日毎日心配ばかりしていました。

そして、ここから母の苦労が始まりました。母はいつも私達に、『父親がいないのだから人様に後ろ指をさされるような事はけっしてしないように！「女手一つで育ててきたけど皆ない子に育ったね」と言われるように頑張ってもらいたい！』といつも口ぐせのように言うておりました。そして自分はなりふりかまわずに、只々、何としてもこの三人の娘達を育てていかなければならないと、大変なこと、いやなこと歯を食いしばって頑張ってくれました。その後ろ姿を子供の私達はずっと見てきました。

幸いな事に、母は若い頃習い覚えた事、洋裁、和裁、編物等の腕を生かして、人様の着物を縫ったりしながら、一枚縫えば今夜の夕食代にと、夜となく昼となく必死で頑張ってくれました。そんな中で、私達三姉妹も常に母に心配をかけないように、仲良く、出来ることは助け合ってやってきました。

そして終戦を迎え、1年経ち、2年経ち、何の消息もなく、母は毎日のようにお父さんは今どこにいるのかなあ！きっと遠い海の向こうから三人の子供達のこと見守ってくれているんだよ！と耳にタコが出来るくらいに、いつもいつも私達に言い聞かせてくれていました。

お父さんはいつかきっと帰ってきてくれると、母も私達も信じて待ちましたが、いつまで待っても帰ってこないし、もし戦死していたならば、お父様も成仏出来ずにいるのではないかと近所の人達から言われ、それならば早くにお葬式を出してやった方がいいのではないかと勧められても、父は必ず帰ってくることを信じて待ちました。戦死の知らせもなく、つらく、悲しく、悔

しい想いのやり場もなく、只々納得できないまま、皆様にお願ひし、私が高校二年生の時にやっと気持ちを納めてお葬式を上げさせて頂きました。

尊い多くの人々の生命を奪った戦争…

人々の幸せを奪った戦争…

そして多くの人々を苦しめ不幸のどん底へ追い込んだ戦争…

もう二度と戦争は起こさない、戦争は絶対にしないようにして下さい、と願わずにはられません。

日本はじめ世界の人々が平和でありますように心から願ひます。

母への感謝

藤枝市遺族会 小柳八州子

私の父は満鉄に勤めていました。昭和19年6月現地召集でフィリピンのロン島に出征、私が1歳半の時でした。昭和20年4月マラリアによる戦死。

母と私は翌年の昭和21年10月に帰国しました。着る物、写真も全て持って来れず、貯金通帳も使えず、全てを失ってしまいました。コロ島の収容所では、あわ、ひえの御飯を1日2杯だったそうです。

日本に帰る為、トロッコのような列車に乗り、船で舞鶴まで来ました。船に乗って来る途中、エキリになって死んだ子供達は、そのまま海に投げてその周りを一周して手を合わせて帰って来たそうです。

その2年後、昭和22年5月2日、戦死の知らせが届き、母は私をかかえてどうして食べていこうかと考え、私を祖母に預けて住み込みで就業し、言葉では言えない程の苦勞をしました。

母と一緒に生活出来たのは、私が中学一年生の時でした。

あの戦争がなかったら、家族団らんの時があったのに！と思うと悔しい気持ちでいっぱいです。

父も私達を見守ってくれ、母は今年99歳です。

私は戦争遺児として、戦争の悲惨さを後世に伝え、世界中が平和で安心して暮らせと一緒に頑張っていきたいと思います。

戦争を二度と繰り返させないために

藤枝市遺族会 深見和子

私の父は海軍でした。昭和19年10月レイテ湾にて戦死。遺骨が来たのは昭和21年頃と母から聞きました。

親子3人で生きていくために、母は編物の資格を取得し、教室を10年の余続け、私達姉妹を育てて下さいました。

母の苦勞を見て来た私は、母だけには心配かけないようにと、いつも思っていました。

主人から、静浜の飛行場を飛び立つ若い特攻隊員、静岡の空襲で大勢の生命が一瞬にして消えていく様子を、目の当たりで見たという話を聞きました。

こんなに^{むご}惨くて悲惨な戦争を2度と起こさないように、私達が伝えていかなければならない使命があると思います。

桜散る 護国の御^{みたま}霊 永遠^{とわ}に生き

戦争の傷跡

藤枝市遺族会 秋元ゆき江

私の義父は、6歳を頭に3歳、0歳と3人の幼な子を残し、ボルネオ島で戦死しました。台湾の高雄から届いた最後のハガキには、検閲で黒く塗りつぶされながらも…「炎天下で暑い、気分が悪い、上等兵さんや戦友の人達に世話になり、やっと元気になりました。」と書いてありました。

他にも、主人から何通かの手紙やハガキを見せてもらいました。その時の主人は、うなずきながら、手紙やハガキに託された父親の思いを深くかみしめていた様でした。親子の血のつながりの深さに、私も思わず涙を流した事もありました。

一家の大黒柱を戦地に送り出し、残された家族は、父の無事をただただ祈りながら、歯を食いしばり、今日を明日へとつなげていくのに必死な生活を送っていました。

このような悲惨な戦争があった事を、私達は決して忘れません。

もう二度と戦争はしてはいけない……戦争を知らない若者たちへ、そう語り継いでいかなければならないと思います。

父と母への想い

藤枝市遺族会 増田久代

私の父は、昭和19年4月に出征し、その年の7月にサイパン島で戦死しました。戦地から帰って来た父の友人がたずねて来てくださり、母は当時の事を色々と聞いたそうです。

父達の乗った船は襲撃されて、必死の思いで泳ぎ、戦友と一緒に島に上ったそうですが、父は帰って来なかった。本当に残念だったと幼い頃よく母から聞かされていた事、今でもよく覚えています。

父はきっと家族の事、子供の事を思いながら必死だったと思うと、私も胸があつく、こみあげてくるものがあります。父は体格もよく力持ちで、子供達に

相撲の指導をしたり、また、町内で行う相撲大会に毎回出場していたそうです。優勝旗は、今でも宝物として大事にしてあります。

母は、生後8か月の私と祖父母をかかえての生活で、農作業で昼も夜も働き続けたいへん苦勞しました。私は幼い頃、母はいつ寝るのかなあと思った事もあります。そんな母も祖父母を見送り、やっと自分と向き合える時が来た頃、51歳の若さで父の元へと旅立ちました。もっとも母から父との思い出話を聞きたかったです。悔しかったし残念でたまりませんでした。

力強く生き抜き、一生懸命頑張ってお育て頂いたお陰で、私は今かわいい孫達に囲まれて幸せな毎日を過ごせている事を父・母に感謝しています。

二度と悲慘な戦争を繰り返さない為に、恒久平和を願っています。

フィリピン慰霊巡拝の旅

藤枝市遺族会 川久保光代

父は、私が2歳の時出征、そして終戦直前の昭和20年7月22日にフィリピン・ミンダナオ島で戦死、33歳でした。遺骨も形見の品もありませんでした。ただ残された父からの葉書や遺書には、家族に対する愛があふれており、読む度に胸がいっぱいになります。

私はせめて父が眠る地へと、平成31年3月「慰霊の旅」へ参加させて頂きました。最後の数カ月は食糧も絶たれ、飢えと酷暑、武器も不十分で、移動は真夜中と、とても過酷な状況だったそうです。それでも英霊の皆様は国を信じ、家族を案じながら散華されたのです。

3月のフィリピンは初夏でした。父がきっと目にしたであろう同じ景色を見た時、涙があふれ出し、止まりませんでした。父はどんなに生きて帰りたいと願っていたことでしょう。

父の戦死後は、母の実家での肩身のせまい居候生活が10数年続きました。その後、母は二人だけの暮らしを求めて、住み込みで市の職員として老人ホームの職を得て、30年近く勤務し、国から永年の福祉功勞に対し表彰されました。そして93歳で父の元へと旅立ちました。父は母を見つけてくれたのでしょうか。

私は、逆境に立ち向かい頑張り抜いた両親を尊く誇りに思います。

そして、私達は多くの英霊の想いを無駄にせず、将来の世界の安泰を強く強く願います。

母の苦勞に感謝

藤枝市遺族会 西谷芳子

昭和16年3月、私の誕生に両親の喜びも束の間、これも運命とは申せ、我が家にとって青天の霹靂^{へきれき}、一枚の召集令状が届きます。俗に言われる赤紙でした。当時はどうする事も出来ず従うしかない事で、母は生後百日目の私を抱いて、大阪駅に父を見送りに行きました。心中母はどんな気持ちで見送った事か、そして父の心中はいかばかりであったか。今思うと胸が締め付けられる思いになります。

幼い頃良く母から聞かされた事は、父は私をだっこしながら、元気でやさしい子になれよと、いつも口ぐせの様に言っていたそうです。

3歳の時、B29が来る、山に逃げろと言われた直後、上空に来たので草原に身を伏せた事覚えています。また空襲警報が鳴ると、隣の防空壕に避難した事もありました。又、母は夜中に靴の足音がすると、父が帰ってきたのではないかと、いつもそう思い信じて待っていたようです。

時過ぎて3年後、突然父の戦死の知らせが届きました。母にとって親子で見送った大阪駅は忘れようも有りません。父は父で子供の成長をどんなに夢見た事か。当時軍の機密保持等の事情で戦没場所を明らかにされなかったのですが、母にとっては白木の空箱一つでは納得出来ず、せめて戦没地点をどうしても知りたいと何度も申し上げたところ、何とか返答を頂く事が出来、東部ニューギニア・ソナム、昭和19年12月19日と知らされました。

いつかはきっと帰ると、心の隅にはお互いにあった筈、父はどんな思いで亡くなったのか。母は現実を目の当たりにして、親子の苦労が始まりました。

昼は農作業、季節には茶摘みの手伝いに遠く家山まで出掛け、帰宅すれば夜遅くまで編物をして生活の足しにし、生きていくのがやっとの働きづめの毎日を送って、頑張り続けてくれました。

何とか成長した私、21歳の時、東京女子医大で心臓の手術を受けました。当時は我が家にとって莫大な医療費であり、母は父の恩給を前借して何とか支払ってくれたようでした。一大事の時ほど、父親の存在を欲しかったに違いありません。子をもって親の恩を知る私でした。

やがて母はきっと私の事を聞かされる事でしょう。その母は97歳で父の元に旅立ちました。

父と叔父の戦争に思う、命の尊さ

島田市遺族会 栗原利行

戦後生まれの私にとって、あの第二次世界大戦自体は遠い存在であるものの、その後もずっと尾を引く家族の悲嘆や苦労をふり返ると、我が家の重大な出来

事だったと痛感します。

私の父・栗原仁一は大正 11 年（1922 年）1 月 5 日生まれ、叔父・栗原政二は大正 12 年（1923 年）6 月 1 日生まれで、仲のよい年子の二人兄弟でした。学徒出陣が始まる昭和 18 年頃は兵士不足がいよいよ深刻化したらしく、彼らが 20 歳を迎えるとすぐ、立て続けに召集令状が届きました。

1 年前の 18 年 2 月に出征した兄のあとを追って弟の政二が入隊したのは昭和 19 年 6 月で、2 か月後の 8 月 10 日にはもう、陸軍特殊貨物船「玉津（たまつ）丸」に乗船。ヒ七一船団として僚船 19 隻、護衛航空母艦「大鷹（たいよう）」を含む 8 隻と共に、午前 5 時に伊万里湾を出発、マニラに向けて航行中の 18 日夜、ルソン島北西沖で出し抜けに敵潜群の猛攻を受けたということです。同航船が次々と撃沈される中で、必死懸命の避航を繰り返した「玉津丸」だったが、ついに 19 日の 4 時 30 分頃、米潜水艦（SS-411・Spadefish）からの魚雷 2 発を右舷中央部に受けて約 10 分後に沈没した。北緯 18 度 49 分、東経 119 度 47 分、ルソン島北部・ボヘアドール岬西北西 90km 付近の惨事で、当夜の海上は暴風のために大波が逆巻き、脱出した者も大半が海没した。この時の乗船部隊は、第 26 師団独立歩兵第 13 連隊の主力 4,000 名で、船員 135 名、部隊 4,620 名が戦死したという（日本海運組合戦没資料館より）。台湾とフィリピン間に位置するバシー海峡は、戦争末期、南方に向かう船舶が、米軍潜水艦の魚雷により撃沈され“魔の海峡”、“輸送船の墓場”と恐れられ、少なくとも 10 万人、最大で 26 万人の犠牲者が眠っていると言われます。私の叔父・栗原政二もまたその一人で、入隊してわずか 2 か月半、齢も 20 歳 2 ヶ月という若さでした。

一方の父は、弟が南の海で戦死したことなど全く知らずに旧満州・大連の港湾守備の役務に就いていましたが、やがて千島列島のどこかの島の守備隊として転戦。その地で昭和 20 年 8 月 15 日の終戦を迎えるはずでした。ところが、ここでの戦闘は続き、後に“知られざる激戦”と呼ばれる“占守（しゅむしゅ）島の戦い”に巻き込まれることとなります。それは、8 月 18 日～21 日に行われたソ連労農赤軍と大日本帝国陸軍との戦闘のことで、日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連が、8 月 18 日未明に占守島を奇襲攻撃。日本軍優勢だったものの、21 日に軍命により日本側が降伏して停戦が成立。日本軍の武装解除は 23 日と記録されているが、父の記憶では事実上の武装解除は 9 月に入ってからだったようです。そして捕虜となった日本兵は法的根拠もなく拉致されてシベリアへ抑留されました。

停戦でやっと日本に帰れると喜んだがそれは大きな勘違いで、シベリア抑留生活4年間の過酷な強制労働が待っていたのです。乗った船は沿海州のどこかの港に着き、列車で運ばれて大陸の奥地へ。沿線の風景がだんだん見慣れぬものになったが、到着したのがどこの収容所かもわからなかったようです。課せられた使役は森林の伐採や鉄道の敷設。言葉では言い尽くせないほどの過酷さに加えて、粗末な食事と厳しい寒さが捕虜の身を蝕みました。長い冬は極寒の連続で、零下30～35度にならないければ作業の中止はなく、その重労働と栄養失調のために多くの戦友が次々と死んでいったが、その遺体はすぐ凍りつき、永久凍土の地面は深い穴が掘れず、ただ雪をかぶせるだけの埋葬だったそうです。その体験事実があまりに酷かったせい、帰国後の父も戦友の方も、一様に固く口を閉ざしてあまり話したがりませんでした。

抑留を終えた父は舞鶴に帰国して、まっすぐふるさと島田へ。親戚や地域の人達が大勢島田駅まで迎えに出ましたが、その時の感激は忘れられないと、95歳の天寿を全うするまで、事あるごとに話していました。しかし、父の苦労は帰郷したこの時に終わったわけではありません。その原因が、目まぐるしく変貌した戦後4年間の日本の世相との戸惑いや、収容所でたたき込まれた異国の思想とのギャップにあったのかもしれませんが、自分の確かな居場所を定められず、どことなく肩身を狭くして孤立していたように思えてなりません。極寒に耐えて死に直面した経験から決して弱音を吐かない人でしたから、かえってそれが気の毒でした。

20歳そこそこで2人の息子たちが相次いで召集された祖父は、男手のない家族と、名古屋からの疎開家族（従弟と小学生・中学生の二人の子供）を抱えることになってしまいました。戦中の家を守り祖母と伯母とで行う農業は作業が追いつかず、地元青年団の奉仕や地域の援助のおかげでなんとか生業を維持していましたが、弟はすぐに戦死し、兄の方も出征後6年以上経っても生死不明の状態が続いたわけで、その空白は戦後もなかなか埋まらず、歪みがつつと残る結果となりました。

たいした護衛もない輸送船・玉津丸の船底で多くの仲間たちと沈んでいった叔父・栗原政二。戦争末期、同じように戦わずして死んだ若い命がどれほど多かったかを想像すると、彼らの死が犬死ではなかったかと思えてなりません。父・栗原仁一の過酷極まる4年間の抑留や、そこで息絶えた無数の戦友の死もまた無駄死ではなかったか。私の生まれる前の出来事ですが、あまりにも悲惨過ぎたと今でも痛切に思います。

80年前、満州や南方に資源を求めて侵略し、世界の制裁を受けて孤立し、打開策として真珠湾への奇襲を行ったことで、第二次世界大戦を引き起こした日本。その結果が広島・長崎の原爆投下につながり、戦争の悲劇を生み出しました。戦争は必ず「人の死」の上に展開されます。2022年、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、その攻防が連日のように伝えられる中、これが第三次世界大戦にならないことを願うばかりです。

戦中・戦後の我が家

島田市遺族会 鈴木政亮

私は昭和16年6月生まれ。12月8日、日本軍が真珠湾を攻撃した時を戦争が始まった日とすれば、戦前生まれと言うことになるが、なにせ終戦の時やっとなにせ4歳と2か月ということで、戦争中の記憶は何もないと言っても過言ではない。ただ一つある記憶は、昭和20年7月26日の空襲で、B29から投下された爆弾が破裂した時のことだ。昭和18年の7月ごろ父「弘」の戦死公報を受け取っていた母は、実家の百姓の手伝いをして自分と私の生活を何とかやりくりしていた。その日は朝からいい天気です暑い日だったが、私の祖父母・母と母の姉妹総出で田の草取りをしていた。

私は、田んぼの畔でイナゴを捕まえて遊んでいたと思う。当時艦載機は別として、B29は島田の超上空を素通りするのが普通だったので、B29が飛来しても、防空壕に飛び込む等それほど神経質に反応していなかったような気がする。

草取りの手を休めて、上空を眺めていた祖父が「B29が風呂桶位の大きさの何かを落としました。爆弾だ、家に帰って防空壕に入るぞ」と言って家に向かって走り出した。私は、祖父の背中で、爆弾の落とされた東の方を見ていたが、大きな花火が地上で破裂したような景色だった。（不謹慎だと思うが、すごく綺麗だと思った。）市役所に勤務するようになって知ったことだが、島田に落とされた爆弾は、長崎市に落とされた原子爆弾の模擬爆弾だったそうだ。北陸の某市で実験をする予定だったが、天候の都合で実験が出来なかったので、帰りの機体を軽くするため適当に落とされたのが島田だったと言う事らしい。

爆弾を落としたり、大砲を撃ったりする戦争はその年の8月15日に終わったが、自分たちの戦争は、その時から始まったと言っても過言ではない。世間一般では、食べるものも着るものもなく、住むところもない人であふれていた。それでも私の所は、住むところは父が出征する前に確保してくれてあった家が空襲にも合わなかったし、食べ物は母親の実家が農家だったので、全面的な援

助を受けることが出来て、それほどひどい思いをしたことはなかった。しかし、何にしても現金収入が無かったので、それまで専業主婦だった母親には厳しいものであったように思う。特別な資格（例えば、看護婦とか教師とか言うような…）を持たなかったので、安い賃金で力仕事に携わるしかなかったようだ。（15年程度勤めた給料が、私が高校を卒業して貰った初任給より少し多いだけだった）

ある時、夕飯を食べながら、母親がこんなことを言った、『〇〇のばあさんが、「あんたんちうちはいいネ。旦那さんが戦争で死んだもんで国からお金が貰えるで…」だと。頭にきたので私は言ってやっただよ。「ほんとにそうだよね。お宅のお父さんも戦争で死んでくれりゃよかったのにねえ…」と』、本当に悔しそうだった。〇〇のお婆さんは、私も知っている人で、普段はそんなことを口に出すような人とは思えなかったが、旦那さんはそれ程稼ぎもなく、子供が4人もいる状況では、本当にそう思ったのだろう。

私たちが小学校に通い始めたころ、1クラスは55人か56人くらいだった。その1クラスに、少なくとも6～7人は戦争で父親を失った子供がいた。そうした子供の中の一人に、給食の時間になるといつも教室を出ていってしまう子供がいた。「給食はそれ程美味しくはないので、家に帰って自分の好きなものを食べてくるのだな。」と単純に思い込んでいたが、実際はそうではなくて、給食費が払えないので、給食の時間は教室から出ていくのだと知った。自分よりも厳しい生活をしている人がいることを実感した瞬間だった。ヒガミ根性が絡んでの事かも知れないが、小学校の教室の中にも貧乏人の子供であるが故の差別があったような気がする。（喧嘩をしても先生に叱られるのはいつも貧乏人の子供と相場が決まっていた。…「△△のお父さんは先生の所へ付け届けをしているので、少しくらい悪いことしても叱られないんだ」というようなことを言う貧乏人の子供がいた。）

一部の特別な人を除けば、学校の先生のお宅も含め、各家庭が本当に貧しかったと思う、特に大黒柱である父親を戦争で亡くした家庭には厳しいものがあったように思う。

「父親が居てくれたら…」と思ったことも何度も何度もあって、原稿用紙が何枚あっても足りはしないが、今この年になって、平穏でそれ程みすぼらしくない生活が出来ていることに感謝したい。でも、私の戦後は私の呼吸が止まるまで終わったとは言えないと思う。

戦争の記憶

島田市金谷遺族会 大久保昌彦

私は昭和12年11月18日生まれ、今年85歳、島田市金谷に生まれました。

父との一番の思い出は、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃、夜、町いっぱいの提灯行列に父と参加したことです。

父は靴の修理、販売を商いとする大井海軍航空隊の御用商人でした。昭和17年4月に開港し、現在の牧之原東名インターチェンジの近くにあった大井航空隊へ、毎日3人の職人と靴の修理に出掛けていましたが、昭和19年赤紙一枚で召集され、静岡連隊に入隊、中国へ派遣されました。終戦を無事迎えたのですが、10月14日、中国から引き揚げ途中マラリアに罹り29歳で亡くなりました。

戦争中、昭和20年に入ると東京の大空襲で一晩に10万人以上が犠牲となり、県内でも浜松の艦砲射撃、静岡の空爆等で多くの犠牲者が出ましたが、母も昭和20年7月30日、金谷町医王寺に落ちた爆弾の破片が腹部に当たり、私の目の前で倒れ、そのまま3年6ヶ月寝たきりになった後、死亡してしまいました。

私は小学五年、妹は二年生でした。家族をなくし、終戦後で食べ物もなく、毎日近くの小川でセリ、魚をとってなんとか生き延びました。当時は、国や町の助けもなく、父の遺品の衣類を持って農家へ食糧の交換にお願いに行きましたが、ほとんどの農家で門前払い、帰りにあぜ道でイナゴを獲って食糧にし、今思うと妹とよく生き延びたと思います。

私は、昭和28年3月に中学校を卒業し、愛知県吉良に靴の修理見習いとして5年間無給で働き、20歳で年期明けとなり故郷の金谷に戻りました。戦争で両親を亡くし、家もなくなってしまった中で、どうしても元の姿に戻りたいと決意し、勤めに出るとともに、靴やアクセサリーのお店も2軒持ち、東海パルプ、東海フォレストに30年勤務して、三足のわらじ計画を立てて無我夢中で頑張り、今では私も妹も家族を持ち、子や孫に囲まれ幸せにいらしているが、当時は戦争で240万人が戦死し、都市への無差別攻撃もあり、両親を亡くした戦争孤児は12万人にも及んだと聞いている。

戦争のない平和な時代を。

文化の違いを知らなかった子供の頃の思い出

島田市川根町遺族会 遠藤良一郎

昭和22～23年(1947～1948)小学校二～三年生だったと思う。家の前が砂利道で石がごつごつとして、少し坂になっていた。明石屋(雑貨店)の均君が倉庫から自転車を出してきた(当時は明石屋の家にしか自転車はなかった)。

乗り方は三角乗りで「ハンドルとサドルをつないでいる三角形のフレームの中に足を通し反対側のペダルを廻して走る」、ハンドルにぶら下がって明石屋の前から現在のたばこや食堂まで下り、次の人が明石屋の所まで押し上げて行き乗ってくる、ここで交替を繰り返して遊んでいたら、金谷方面から車が砂ぼこりを上げながら来るのが見えたので自転車に乗るのを止め、だんだん近づく車をワクワクしながら目を丸くして見ていると、目の前で止まった。可愛楼に入るのかな？

外国の軍人（進駐軍）が3人降りて可愛楼に入っていた。中でおかみさんと話をしていたが、軍人は軍靴を履いたまま2階に上がっていった（この軍人の内1人が通訳らしい）。土足のまま上がったのでびっくりした。

車（ジープ）の中をおそろおそろ覗いたら拳銃とライフル銃がケースに入っていない、むき出し状態でシートの上に置きっぱなし。銃の弾も箱を開けた状態で半分ほど出してある。何か異変があった時すぐ撃てる用意をしていたのかと勘繰った？それにしても大事な武器を置いて車から離れている。この油断は「この下川根村は安全と思ったのかな？」

可愛楼の調理人、もんちゃん（本当の名前は知らない）もびっくりして飛び出てきて隣の魚宗さんに入っていたが、治吉さんと出てきて魚宗さんの店の前でジープの方を見ていた。近所の人でも大勢集まって珍しそうに、遠巻きにして見ている。

いっぷくが終わったようでドスン、ドスン、靴音がした。降りてきた兵士の一人が入口の所で僕ら子供にチューインガムを配り出したので僕も手を出したらもらえた。食べたものすごく美味しい、うまいのもう一枚ほしいと手を出したがくれなかった。

一人の兵士がジープに乗ったので見ていると、池の方に行くように曲がったのでジープを追って走った。池の道は昔のままで道幅が狭く、リヤカーより少し広いくらい、ジープではいっばいの道幅でゆっくり走ったので子供でもついていけた。いけずみさんの所で止まった。

車から降りた兵士は空に飛んでいる小鳥を見て、ライフル銃で撃ち落とした。凄いなあ、あんな小さなものも命中させることが出来る腕を持っているアメリカの兵隊と日本は戦ったのだから負けるわけだ。

次に狙ったのは、「いっちょもぐり」、（カイツブリ）。銃弾は水面をバウンドして「はつもと」貸しボート屋の家に当たりターンと大きな音がした。はつもとのおじいちゃんが「誰だ」と大きな声で叫ぶのが聞こえた。今撃った音と

家に当たった音が、同時に聞こえた。それにしてもライフル銃の大きな音と弾の速さには驚いた。

今日は外人を初めて見たことと、自動車（ジープ）、拳銃、ライフル銃、チューインガム、銃の音、弾の速さには、生まれて初めての経験でびっくりする事の連続。戦後になって180度の世の中の急な変化に初めは戸惑ってなじめなかった。

私が中学三年の昭和29年（1954）2月、家業を継ぐため静岡市にある理容美容学校を受験しに静岡へ、駅前から路面電車に乗り、県庁前を通過して次の中町で下車、浅間神社の赤鳥居の商店街「馬場町」を通過して石鳥居のある西草深町の理容美容学校で受験し、終わったのがお昼を少し過ぎたころだったと思う。昼食を食べに呉服町まで歩き、七間町通りと呉服町通りの交差点より少し駅よりの蕎麦屋に入り、ざるそばを注文し、待つ間に、前にある新聞を取って見たらアメリカがビキニ環礁で水爆実験をしたことが載っていた。その近くで焼津の第五福竜丸が漁をしていて水爆実験の灰をかぶってしまった。乗組員全員放射能に汚染され日本に帰ってきた。船長の久保山愛吉さんは死亡、他の乗組員は頭の毛が抜けたり、体の調子が悪く入院、の記事が載っていた。家では新聞もラジオもなく、このような大きなことが起きていたのを知らずにいて恥ずかしい。情報の大切さを知った。いつか余裕ができれば新聞を取りたいと思った。

ちなみに、この年は安倍晋三氏「元内閣総理大臣」が生まれた年、何月に生まれたかは忘れた。

大人になって分かった事、アメリカ映画、特に「西部劇」が好きで小遣いをもらった時は島田の映画館（文化）にはよく通いました。初めて見た西部劇は『平原児』（ランドルフ・スコット主演）カウボーイハットのよく似合う俳優でカッコよかった。映画の中で日本とアメリカ文化の違いが分かった。アメリカの人は家に入る時にも靴を脱がず履いたまま、食事の時にも椅子に座るので靴を脱がずそのまま、寝る時初めて脱ぐ。可愛楼で靴を脱がなかったことが分かって納得した。

祖母の涙

島田市川根町遺族会 小沢康宏

神や仏の御加護があったなら、祖母は泣かずにすんだかもしれない。盆の休みふとそんな事が頭に浮かんだ。私の家では父の兄弟が4人も戦争の犠牲になった。長兄は中国で、父はマリアナ島で、弟はバシー海峡で、姉は満州で、それぞれ遠い異国の地で戦死したのだ。戦争がいかに怖いものとはいえ、なんで

自分の家だけこんなに戦死するのかと祖母が泣いていたのを思い出す。祖母は戦地におもむいた子供達の帰りを一日千秋の思いで待ったに違いない。「論語」の中にも「倚門の望」という言葉があります。戦いに駆り出された息子の帰りを毎日門の所で待ちわびる親の情の事であります。子を思う親の気持ちに心がうたれるが、こんな話はもう沢山、何とも切ない話だ。

川根町では 343 柱の方が亡くなられているが、その人の数だけ涙がこぼれたと思うと、つくづく戦争というものはやってはいけないものだと思う。

戦後 76 年の年月が過ぎて、世の中は平和になり、平和になりすぎて天王山にあった招魂社もなくなってしまった。これではいかんと、遺族会の皆さんが立ち上がり、それもどんな言葉や文字で語り継ぐよりも「目に見える形」で後世に残そうと、手造りで立派な慰霊碑を建てた事は良かったと思う。

慰霊碑建立にあたっては、元内閣総理大臣小泉純一郎氏に揮毫をいただき、石は四国の三好石材さんに日本一の庵治石あじいしをお願いする事が出来ました。これはひとえに前会長河野敏郎氏の人脈のおかげです。他人に出来ない事も心と心の結びつきで出来てしまうすごい人でした。今は河野敏郎前会長の御冥福をお祈りすると同時に、川根町 343 柱の諸霊に対し追悼と慰霊の言葉を申し上げる次第です。

祖母も草葉の陰で満足し、泣いた涙もかわいたことと思う。

戦時中の子供達の情景

島田市川根町遺族会 久保田文雄

先の大戦から 77 年が経過し、戦争の記憶は風化の一途をたどっております。

戦時中、当時の子供達が学校でどんなことを感じ、どんな生活を送っていたのか、川根町での小学校統合の記念誌、中川根村（現在の本川根町）の徳山国民学校六年生の作文集の中から、いくつか抜粋してご紹介いたします。

[川根町での小学校統合の記念誌]

「やはり桜吹雪の下を…あまりに劇的な時代を背景に」から

入学の年に支那事変、五年生の時に大東亜戦争に突入、昭和 20 年卒業、その年の 8 月終戦、遂に神風は吹かなかったのである。

非常時体制—国家総動員—米英撃滅にぬりつぶされた学校時代であった。先生たちとの日々は師弟のそれより親兄弟の感じすらあった。天真らんまんの少年の日々は実に楽しく、ペッタンが 200 枚、300 枚とたまり、カッチン玉がポケットをふくらませ、ゴムケシが渋柿をねらった。A B C D 包囲陣は、真綿の

ように日本を締め付けて来た。くそつと言う気持ちは子供ごろにもじりじりと燃えたものだった。男の先生たちは次々と召集され、満州から又支那からこの子らに便りはひきもきらなかつた。大東亜戦争が始まった。どれほど大きな犠牲があつたかも知らずに軍艦マーチに心を躍らしたものであつた。三色遊戯、騎馬戦など服のボタンがまともについていたことはなかつた。

男も女も勤労奉仕をやつた。薪しょい、炭焼き、それが当然のこととして泣き言はない。授業の中でワラ草履をつくり、そして農場の実習、落葉ひろい、40歳になった今でもありありとよみがえる。

家山小学校が、家山国民学校と改称され、学徒動員令が下り、教科に教練が加わつた。校庭に防空壕をつくる作業が始まり、昼夜を問わず避難訓練が行われた。昭和20年3月、在学中に陸海軍少年兵として合格通知をもらい^{まなびや}学舎を校歌に送られて巣立つた私達である。同年8月終戦、混乱の時代をのりきり、人の子の親となつた今日、自分の少年時代を振り返り、よくぞの感じが湧いて来ると共に恩師や同級生をなつかしく感じるのである。

「思い出の学校生活」から

私達が入学したのは、ちょうど日本が軍国調華やかな時代で、満州や支那へと進出し多数の人材と資力を投入し国威を大いに海外に示している昭和11年でありました。

翌12年7月に支那事変の勃発となり、子供心にも軍服姿が憧れの的であり、青年学校の教練など始業の鐘の鳴るのも忘れて見とれたものでした。当時、尋常高等小学校の名が国民学校と改められたのが確か大東亜戦争の始まつた16年と記憶しています。

特殊潜航艇がハワイ真珠湾に集結中のアメリカ主力艦隊に奇襲攻撃を敢行し、大打撃を与えた特攻隊の戦果など、授業前の先生のお話^{まきぎやはん}に胸を躍らせたものでした。高等学校に入った頃は巻脚絆^{まきぎやはん}を巻き、木銃をかついでの軍隊教練が週二時間程度あり、物資不足の折自分でワラ草履^{くわ}を作つてはき、農場に^{くわ}鋤をふり、霜の朝素足で駆け足など忘れられない思い出であります。

〔徳山国民学校六年生の作文集〕

「あゝ壮烈なる体当たり」

5月29日、私たちはお茶摘みをしていました。9時頃空襲警報が発令されました。でも私たちは茶摘みを続けていると、頭上をあのにくい敵機が編隊を

なして何機も何機も東へ通ってゆきました。私たちは近くの柿の木の下に待避しました。敵機はあとから後から、ついて来ます。岩崎先生が「こちらの柿の木の下へいらっしゃい。」といわれたので、先生のいらっしゃる少し大きな柿の木の下へ移りました。突然「バリバリ」という音がしました。男子が「体当たりだ早く逃げろ」と叫んだので、みんなはあわてて逃げ出しました。逃げる途中、ちょっと見たら真赤な火が落ちて来るではありませんか。敵機が空中分解したのです。赤い火はクルクル廻りながら私たちの頭上へ落ちてくるようです。また、一目散に逃げました。夢中になってばらの木をかきわけて、やっと草原の中へゆきました。胸がドキドキして脚がぶるぶるふるえます。胸をなでおろしながら敵機を見たら、火は山の向こうへ落ちてゆく所でした。友軍機は、これと反対の山の向こうへ姿を消していました。

あゝ勇ましかったあの勇士……。あゝりっぱな体当たり……。

この見事な体当たりのできる兵隊さんは、日本の兵隊さん一人だけだ。

皇国のためにはすべてを捧げる、自分の身は粉みじんに砕けるとも、皇国護持のために笑って散って行く……この心、この精神があるから、日本は強いのだ、勝つのだ。彼のハワイ真珠湾で花と散った特攻隊勇士、古野少佐の歌

君のため 何か惜しまん 若櫻

散ってかひある 命なりせば

の意味が、私には、今日のこの体当たりを見てはっきりとわかりました。今は静かになった大空を、いつまでもいつまでも私は眺めていました。あの勇士、あの神に感謝の念を込めながら。

戦時中の様子が窺える三編です。戦争一色のあの時代が手に取るようにわかります。

これからの時代に、このようなことが起こらないようにすることが、今を生きる私たち大人の責任です。

私の戦争体験、後世へ伝えたい思い

島田市川根町遺族会 鈴木彦吉

私は大正7年11月生まれ、現在102歳です。4年前のお盆、二人の娘が九州旅行に誘ってくれました。孫の嫁が早速ツアーに申し込んでくれました。9月には4人で参加、静岡空港から鹿児島へと飛びました。知覧を訪れてみたいという私の思いが叶いました。知覧は陸軍の特攻隊の基地でした。資料館に残

る遺品や手紙には、同胞として万感胸に迫るものが有り、一つ一つ読み進む時分には2時間はあっという間でした。身を呈して戦った若者、あるいは若い父親だった人もいる。彼らの思いを忘れてはならない、日本国中の人に見てもらいたい、と強く思いました。

私は昭和14年1月、豊橋歩兵第18聯隊軽機関銃中隊に入隊、3か月の猛特訓の後、射手としての評価を頂き、4月中国は大沽（現在の天津）へ上陸、北京・和順（現在の山西省内）を経て第13大隊第1中隊に編入されました。荒涼不毛の山肌が延々と続く太原（現在の山西省内）の各地を機関銃MGと共に進軍、転戦。郷里では秋祭りかと雪の降る空を眺めた事。夜の歩哨に立つと鼻水も凍る程だった事、前線での応戦の激烈さもさる事ながら旭日の軍旗を先頭に嶮山難路や激流を越しての行軍も筆舌に尽くし難い体験でありました。

その後臨県（現在の山西省内）で戦闘中負傷し新郷（現在の河南省内）の陸軍病院に収容され、回復後太原の本隊を経て18年2月に内地へ帰還、満期除隊を迎えました。帰還の船上、内地の山々が目に入った時、あゝ祖国に帰ることができたのだと、

その心に染み入る日本の緑にただただ感無量でした。

その後結婚、19年長女を授かりましたが、戦況は厳しく20年4月、再び静岡中部第3部隊中隊に応召。本土決戦に備えて静岡陣地構築に勤しむ日々。その後憲兵大隊へ転属、治安維持等に携わるも8月に終戦となりました。

戦いが済んでも、荒廃した祖国を嘆いている暇は無く、母、妻、幼い我が子、我が弟妹達の糊口を凌ぐべく粉骨砕身働く毎日が始まりました。それは全国民皆同じ事でした。

お陰様で自分は大正、昭和、平成、令和と生き抜いてくることができました。戦争で犠牲となった多くの同胞を思う時、親から貰った丈夫な身体と、幸運に恵まれた事に、ただただ感謝あるのみです。

九州旅行の最後の夜、4人でビールやお酒を酌み交わし存分にカラオケを楽しめた思い出は、平和な日本であればこそその事と、今更のように思いを強く致しております。

（父は昨年末に脳梗塞で倒れましたが、弟夫婦の迅速な対応と病院の先生方、看護師の皆様方の献身的なご尽力で普通に動けるまでに回復いたしました。しかしながら、記憶、言葉等に少し不自由が残りましたので、今回の文は、父の所有していた記録をもとに、二女が父より聞き取り書きをしたものであります。朝比奈久代代筆）

(令和3年発行の川根町広報誌「戦争が川根に残したもの」より)

兵 役

島田市川根町遺族会 前川吉夫

日本が太平洋戦争で負けた年の昭和20年2月12日、両親兄弟、村中の人達に見送られて、海軍志願兵として17歳の若さで神奈川県三浦半島にあった武山海兵団に入隊した。

今考えてみると教育とは恐ろしいもので、死とか負けるとか思った事も無く、女の人達も国防婦人会として、竹を尖らせた槍で敵に立ち向かう訓練をしていた。自分もそうした時代に育った一人として必ず勝って帰る事を信じ切っていた。

旧下川根から5名家山駅に集まり、森下盛三郎村長の激励の挨拶を受けて、大勢の人達に見送られて出発した。

その時同時に入隊した若者は10,000余名もいた。2月と言えば一番寒い時期で、手袋もなく、早選手は霜やけでふくれ上がってしまった。吹き上げる潮風は、山での温かい土地で育った自分には本当に厳しいものがあった。

海兵団での生活は、毎日が5分前の合図で始まった。寝るにも起きるにもすべてが当番兵が吹いて廻る5分前の合図で終始した。風呂に入るにも上官の持つ指揮棒のもとで行われ、風呂場は兵舎よりかなり離れた所にあったが、寒風の下パンツ一つで隊列を組んで行き、5分程沈んで出る程度だった。兵舎内での勉強も1班15名程だったが、教班毎に評価されて成績が悪いと「飯上げ」と言って、その時は全員食事抜きにされた。3か月の教育の中で一番大変だったのが、毎日行われる吊床訓練だった。吊るにも片付けるにも5分の時間内で行う事だった。力のない自分には本当に大変だったが、教育期間の半ばで教員室係を命ぜられ、教班長の世話をする事になり、吊床をしたり着替えの面倒、外出時の靴磨きをしたり、みんなが吊床教練で絞られているとき、自分は班長の世話をしていたので、思いがけない楽をした。

3か月の教育期間も終わり、しばらく海兵団に残り外での訓練を受ける。2か月ほどして6月、寒さも遠のいた頃、突然北海道行きの命令が出て、北海道に向かうことになり、人数などは忘れたがかなりの人数だった。途中上野駅で少し下車を許されて外に出たら、本当にびっくりした。東京が一面焼け野原と化してしまっていた。子供達がホームに集まって来て物乞いをするので、ポケットにあった小銭を与えてやった覚えがある。

青森駅まで汽車に乗り、相変わらず窓は閉じたままなので外を見ることは出

来ないままで下車し、青森駅を出て、青森港から大きな貨物船に乗り替え津軽海峡を渡り、函館港に無事に着くことが出来た。

いよいよ北海道での生活の始まりで、一路女満別に向って汽車に乗る。そこでも汽車の窓は幕を下ろしたままだった。女満別に着いて女満別湖の近くの畑の中に建てられていた兵舎に到着。即、厳しい生活の始まりだった。なんでそのような所に派遣されたかと言うと、そこに海軍航空隊女満別基地が有って、その守備の為だった。25 ミリ機関砲が据えられていてその扱いや打ち方、弾丸込の訓練が始まった。弾倉には直径 25 ミリの弾丸が 20 発程入っていて 10kg 位は有ったと思う。弾倉の脱着訓練で 15 歳の少年には口には表せないきつい訓練だった。その他には防空壕を掘ったり規律訓練を毎日行った。飛行機はほとんど無かったが、一度特攻機を見送る機会があったが、その兵士は本当の犬死だったと思われる。日本の軍隊の無謀と無知、野蛮な教育の仕方は今では考えられない。口では教えず暴力で教え、階級だけが物を言った教え方だった。たるんでいるとか、娑婆っ気を出しているとか、真剣がないとか何とかかんとか言って、精神棒と言って野球のバットと同じ木の棒で一人一人列の前に出して、思いきり力一杯で尻を 2 回から 3 回打ちつけたり、顔を殴ったりしたので、尻に「アザ」ができたり頬が腫れ上がったたりした。

それでも、自分は幸運にも海兵団に居た時、教員室係をした経験からか「従兵」と言って上官の世話をする役付けを命ぜられ、上官の食事などの世話をすることになって、そのような暴力を受けることは少なかった。

何といっても忘れる事の出来ないのは、丁度自分が事務室の当直をしていた時電話が鳴って「今から重大放送があるので全員を集合させるように」との連絡を受けた事である。天皇陛下が国民に敗戦を知らせるラジオ放送だった。この放送を聞いて、中には軍刀を抜いて兵舎の横に切りつける若い尉官もいた。

こうして永い戦争が終わった。

10 月まで残務整理に残る事になったが、雪の降る前に家に帰る事が出来た。すでに多くの人が帰還していたが、一人淋しく地名の駅に降りた。その時は何の意気も気力もなかったような気がした。

家に着いた時の思い出として、自分が帰るまでとって置いてくれた家の裏にある柿を食べた時の美味しかった味が忘れられない。おそらく最終の兵歴の一人だと思う。

国民だけを犠牲にする戦争は 2 度と起こしてはならない。平和であってこそ人生があり国が栄えることを次世代に語り、教えを引き継いでいく責任の有ることを、戦争の時代に生きて来た 1 人として深く感じている。

戦争末期の思い出

島田市川根町遺族会 又平りつ子

第二次世界大戦の終末期になると、こんな山の中の小さな村（家山）でも、生活は戦争のことのみに中心になって、悲しい思い出がたくさん残っています。

楽しい一年生入学のはずが、授業中に空襲警報（敵の飛行機B29が近付いてくるから気をつけろ）のサイレンが鳴る日が多くなりました。授業中も、お弁当の時間でも、一年生には素早く帰り支度ができないので、いつも半ベそをかきながら、大急ぎで中庭に集合し、待ち構えていた六年生を先頭に、全速力で家に帰りました。

家に着くと、母と一緒に、天王山に登る道の横に掘った防空壕へ入り、真暗がりの中で、大勢の人と息をひそめながら、空襲警報解除のサイレン（B29が遠くに行ったから安心して、普通の生活をしていいよ）をじっと待ったものです。そんな訳で小学校低学年の時は、広い運動場で自由に遊んだという記憶がありません。

ある夜のこと、突然ドーンと家の戸を叩かれて、びっくりして目を覚ましました。母も私も眠りこんでいたので、サイレンが鳴ったことに気づかずに、電気をつけてしまったのです。勿論、電気は黒い布で被ってあったのですが、わずかな光が漏れたのでしょう。あわてて電気を消して、母が真っ暗な中を謝りに外に出ていきました。

父が出征し、母と子だけの生活をしていた中で、この時ほど心細く悲しいと思ったことはありませんでした。

二年生になると、傷痕軍人が学校の講堂に大勢入ってきました。町の病院から避難して来たのだそうです。病気の人、怪我をした人が、みんな白い着物を着ているようでした。

学校からは「講堂に近づいてはいけません。中庭でやかましく遊んではいけない。」と注意され、中庭にあったブランコも、すべり台もシーソーも使わなくなり、出来るだけ校舎の中で静かな遊びをするという、我慢の毎日が多くなりました。

そんなある日、当番の仕事で帰りが少し遅れた私が、中庭の校舎側を一人で歩いていた時、講堂の方から白衣の軍人さんが「あんた何年生？」と声をかけてきました。驚いた私は、「二年生!!」と答えるなり、昇降口に飛び入り、そのまま走って家に帰ってきました。

母にその話をすると、「その人はきっと、あんたのことを見て、自分の子供

と同じ位だと思って何年生か聞いたんだと思うよ。」と言いました。その言葉に私はハッと、軍人さんに悪いことをしてしまったと、とても後悔しました。

私の父も、どこかで私と同じ位の子供に会ったなら、私を思い出して声を掛けずにはいられなくなるだろう。そんな父の前から一目散に逃げる子供の姿を、悲しい目で見送る父の姿が想像できました。

その晩は、どうかあの軍人さんの怪我が治って、無事に家に帰り、子供に会えますようにと神様にお祈りして眠りました。

この時代は、食糧も物資もなくなり、みんな苦しい生活に耐えていました。たまに町から製品が入ると、くじ引きで当たった人が買ったようです。そんなある日、母がくじに当たったと、茹で小豆の缶詰を一缶持って来ました。私は、すぐに食べたがりましたが、母は「お父さんが帰って来たら、お汁粉にして食べよう。」と言い、戸棚に大切にしまいました。私もそれには大賛成で、家族三人でお汁粉を食べる日が早く来ることを夢見ていました。

しかし、間もなく父の戦死の知らせが入り、しばらくはお汁粉どころではなくなってしまうました。

だいぶ経った頃、私が「小豆の缶詰は食べちゃってもいいね。」と言うと、「戦死の知らせが来た後に、生きて帰った人が何人かいるとニュースで言ったから、もう少し待ってみよう。」と言われ、お汁粉の夢はまた引き延ばしになりました。

それから、ずっとずっと待ちましたが、父が帰って来るはずもなく、私も母も缶詰を開ける気力もなく、もうどうでもいいような気分になっている頃になって、やっとお汁粉を食べました。こんなおいしくないものだったのかと思いつつながら食べました。

戦時中の歌ごよみ

島田市川根町遺族会 松島恵美子

【軍艦マーチ】

軽快な軍艦マーチにのって青春時代の思い出の歌の旅の始まりです。皆様方のおつむ（頭）ケースの中にしまい込まれているあんな事、こんな歌がどのような路線へ繰り広げられて行くのでしょうか、お楽しみに。

でも、その途中語り手の不手際でお聞き苦しい故障の多発が予想されますが、その節はよろしくご判断を。出発は12月8日。

【臨時ニュース】

当時我が国は日独伊、三国同盟が締結されており軍事政権の東条英機内閣の

下に、国民は大政翼賛会の組織に組み込まれ、戦争への参加協力を余儀なくされていきました。真珠湾の朗報に歓喜興奮の1億総国民。これに呼応するかのよ
うに大東亜決戦の歌が溢れ、戦意は一層盛り上がって参りました。

【大東亜決戦の歌】 2番 征くや激しき皇軍の……大東亜

明けて17年又もや嬉しいニュースです。イギリス東洋艦隊の旗艦プリンス
オブウェールズ号の撃沈。シンガポールの陥落。イギリスの最高司令官バー
バルをして無条件降伏をせしめました。この戦勝ムードも何時迄もさめやらず、
早速英国海軍壊滅の歌が登場してきました。

【英国海軍壊滅の歌】 2番 戦えり戦えり

その後の戦闘においても皇軍の向う所敵なしで僅か一年足らずの中に、赤道
直下の島々の大部分を征圧してしまいました。中でも落下傘部隊はセレベス島、
スマトラ島の天空に純白の花を咲かせ、降下隊員は現地女性の憧れの的となり、
時代の花形、空の神兵として歌われるようになりました。(大東亜共栄圏だど
か八紘一宇だとか国のビジョンはこのような形で作られていくのか)。今日も
銀翼を連ねて飛び立って行く勇姿

に、日本強しの思いを子供心にも強く焼き付けられました。

【空の神兵】 2番 世紀の華よ 落下傘 落下傘

当時のはやり唄に愛国行進曲がありました。この曲は運動会やいろいろなイ
ベントには必ずといってよい程利用され、演奏されたそうです。「見よ東海の
空明けて」に始まる、勇壮な言葉と快適なメロディーは戦意を高揚し、戦果を
ピーアールするのにぴったりの歌だったのですね。のみならずそのよいリズム
は「みよ父さんのハゲ頭」と替え唄まで流行らせました。戦時中の閉塞された
暮らしの中、ささやかな癒しを求めた庶民の知恵をものせてしまったのですね。

【愛国行進曲】 2番 正しき平和うち建てん理想は花と咲き薫る

緒戦以来勝利の美酒に酔いしれていたのも束の間、米軍機16機により、東
京市民は初空襲の恐怖におののきました。17年4月18日の事です。この時以
来各都市にも空襲の波は押し寄せ、国内の軍事色は一段と強化されました。家
庭内の金属回収令、14歳以上女子学生の動員、小学生への軍事教練等々国力増
強につとめましたが、米軍の物量に物いわせた戦力は、17年6月のミッドウェ
ー海戦で日本海軍を惨敗させ、
南方前線の制空権、制海権を完全に奪還してしまいました。その後のソロモ
ン沖海戦も我が軍に利あらず、南の島々の日本軍は孤立、いよいよ戦況不利の
情勢がひたひたと押し寄せて参りました。

敗戦の色が濃くなるにつれ国内の男性のほとんどが戦場へ狩り出されていきます。銃後の守りは隣組からとその組織は強化され、隣組の歌の台頭で近隣の連携意識が高められました。

【隣組の歌】 5番途中 地震かみなり かじどろぼう

18年の庶民生活は、物資不足に追いつめられ、中でも食料品不足は深刻で、量を増やす為の大根めし、芋めし、それでも三度の食事を戴ける事大へん有難いことでした。(欲しがりません勝つまでは)の標語に戒められ、我慢、忍耐の日々でした。2月ガダルカナル島から日本兵撤退、4月山本五十六司令長官戦死。5月アッツ島玉砕。一年前のあの戦果に輝いたラバウル基地も衰退の一途を辿ります。では往時の勝ち戦を偲んでラバウル航空隊の歌をききましょう。

【ラバウル航空隊】 2番 とどろくその名ラバウル航空隊

19年夏、雨期、インパールはジャングルの中、日本兵の撤退が続いていました。

一生存者の手記

雨に湿った密林は吐き気を催させる臭気が漂っている。風船のようにふくらんだ体、ぶざまに投げ出された手足、極端に曲がった首、腐敗変色した友軍の死体が各所に横たわり恐怖。絶望に呼吸の困難さを覚える。ふと目を下に落とすとぼろぼろの軍服をまとい倒れている兵を見た。近寄って体を動かしてみた。反応はなく既に息絶えている。飯ごうの中に筍がゆでてあった。おそらく数分前迄はいきていただろう。筍を食べる力は既になく息途絶えたものと思われる。このさまを見て自分はジーンと胸が熱くなってきた。しかしあすは我が身、この友軍を葬ってやるだけの力はなかった。

死の街道、白骨街道といわれ3万人もの犠牲者を出したインパール撤退作戦。唯一の頼みは空からの加藤隼戦闘隊の不眠不休の援護、出陣も空しいものに終わってしまいました。

【加藤隼戦闘隊】 4番 ああ今はなき 武士の 笑って散った その心

この頃の服装は勿論戦時色一辺倒、防空頭巾、救急袋は常時携帯、ハデな衣装は非国民扱いにされました。7月サイパン島玉砕、マリアナ沖海戦も無残な大敗戦、本土防衛の砦は総崩れ。そこで政府は空襲の激化を予想し、学童の集団疎開を開始しました。親元を離れ、未知の農山村での暮らしさぞや淋しくつらかった事でしょう。中でも沖縄から鹿児島への疎開船対馬丸の沈没は悲劇中の悲劇。港での親子の別れの涙も乾ききらぬ中、米潜水艦の魚雷に触れ、800人もの学童がまたたく間に太平洋の藻屑と消え去ってしまったのです。こんな

つらいニュースを聞き、不自由な暮らしの中で子供達の愛唱歌だったのがお山の杉の子です。

【お山の杉の子】 2番 アッハハの アッハハ 大笑い 大笑い

9月三国同盟の一角イタリアが無条件降伏、10月レイテ沖海戦で殆どの戦艦を失うという決定的敗北。そこで青春を死に賭けた特別攻撃隊が最後の手段として出撃を致します。その火蓋を切ったのが“人間魚雷 回転、です。当時日本男子は14歳になるのを待ちかねて予科練や少年飛行兵を志願し、その身をきびしい訓練に投じたのです。訓練に訓練を重ねやっとな操縦を覚えた暁、必殺必中の特攻兵器で体当たりをしたのです。この攻撃は米軍をして“神風、との異名で恐れさせたといわれます。この頃の標語“撃ちてし止まん、を率先遂行されたのですね。この様な若鷺を育て特攻精神を培った海軍予科練学校とは、若鷺の歌から訓練内容をさぐる事と致しましょう。

【若鷺の歌】 2番 さっと巣立てば荒海こえて……

次は、紅の血はもえる を用意致しました。

時、19年10月1日、所、東京明治神宮外苑競技場において、雨の中出陣学徒35,000人の壮行会が行われました。ペンを捨て書物を捨てたその両腕に、銃を握り操縦桿を握って南の島へ突進して行きました。そば降る雨の中、親族同窓生などで場内は埋め尽くされたとか。目の中に浮かんでくるような光景と共に私は彼らをうたった次の様な詩がうかんで来ましたが、さだかではありませんが、聞いてください。

云う勿れ君よ別れを、世の常を又人の生き死にを、南海の遥けき果に、今やはや何をか云わん、熱き血を捧ぐる者の大なる胸をたたけよ。君は行くバタビアの町、我はよくバンドンを突く、この夕相さかるとも輝かし南十字をいつの世か共に見ん、云う勿れ君よ別れを世の常を又人の行き死を

【紅の血燃ゆる】 2番 いさみたちたる強者ぞ……燃ゆる

12月7日東海地方に、あけて1月13日三河地方に、大地震がありました。双方共に被害甚大だったのですが、統制下故詳しい情報は伝えられませんでした。当時の人々は地震を空襲だと思い、防空壕に飛び込んだとか、竹藪は避難の人で一杯だったとか、笑えない事々が語り草になっています。3月10日またまた東京は最大悲劇の舞台になってしまいました。B29 334機が2時間半にわたり大爆撃を敢行したのです。隅から隅まで焼き尽くすというじゅうたん攻撃で、首都東京は一瞬にして火の海と化し、巷は阿鼻叫喚12万人もの死者を出してしまったのです。

続いて4月に遂に米軍沖縄上陸、戦況は悪化の一途を辿りますが、なお勝利の日を信じて、若鷺は知覧基地から沖縄へ発進その434機は再び帰ることはありませんでした。でも国民は勝利の日を信じていました、いつかきっと神風が吹くだろうと。

【勝利の日迄】 湧いて来る 来る 撃ちて止まん… 勝利の日迄 勝利の日迄

いよいよ終りに近づいて参りました。物語の最後が特攻勇士が出撃前に交わした歌、誓った歌、同期の桜です。二人の名優によって演じられるエンドラン、ラストシーン

の感動をじっくり味わって戴きたいと思います。

【同期の桜】 1番、2番、ナレーション せりふ 3番 同じ特攻の庭に咲く
6日広島市原子爆弾投下、7日豊川海軍工廠爆撃 8日ソ連軍我が国に宣戦
布告、9日長崎市原子爆弾投下

遂に神風は吹きませんでした。そして迎えた8月15日

【終戦の詔勅】 開始と同時、海ゆかば

これは万葉集防人の歌の中の一首

大君のへにこそ死なめ

の忠誠心は遠い昔から日本人の心の奥そこに脈打っていたのです。今でこそこの道徳観は変わって参りましたが、生き長らえた私達は、戦争の犠牲者の鎮魂と戦争忌避への序曲として受け止めたいと思います。

【終了】 思い出の旅 終着駅に着きました。

戦争と母と私

島田市川根町遺族会 守谷庄平

大正8年3月31日に母は生まれ、両親と兄弟5人で暮らしていましたが、父親が亡くなり、五和の親戚の志田さんにお世話になっていました。その志田さんが米屋と木炭の商売の関係で家山の八木さんと話を進め、母を子供がいなくて困っていた守谷家の養女として育てることになり、母も生活が変わり淋しかったと思います。守屋家の両親が大事に育ててくれたお陰で母も成人となり、昭和16年5月に縁あって結婚しました。

結婚生活も72日で、父は7月15日三島の部隊に入り満州で18年3月まで務めました。私は、この間の17年3月17日に生まれましたが、父は今度は西ニューギニアハルマレラ島に渡り、昭和19年9月21日戦死しました。

それから3年後には祖父が亡くなり、祖母と母と私の3人で暮らすこととな

り、男の働く人がいなくなり、母は2年お茶もみをしたのですが身体を壊してしまい、それからはお茶師さんにお世話になっていました。10年後、私が中学を卒業と同時に就農することになり、母を助け一人前の農家になりたいと一生懸命頑張ってきました。

戦争がなかったらこんな苦労はしなくても良かったと思う日々でした。母は、毎晩のように夜なべをしていました。麦ごはん、みそ汁、梅干し、たくあん漬け、粗末な食事でした。

私が成人となり、妻を迎え、それからは母も楽になり、自分の時間ができ、塩本と家山の人達とゲートボールの練習に通う毎日でした。

84歳の時右側の腰の骨を骨折、楽しみにしていたゲートボールもできなくなり、手押し車で整骨院と商店に行くのが楽しみでしたが、94歳の時今度は左側の腰の骨を骨折、今度は車いす生活となり、島田のアポロンさんに5年間、それから大和田のここは特養ホームにお世話になっていましたが、令和2年5月に101歳で亡くなりました。大正から令和まで生き延びたのもホームのお陰だと思っております。

「大陸の空 南方の空」より抜粋

島田市川根町遺族会 諸田平八

「一空の悲話」

同じ比島方面の攻撃に当たる高雄空、鹿屋空、一空の陸攻隊は、開戦から順調な作戦行動を続けていたが、12月12日台南基地を発進した一空の九六陸攻36機は比島イバ飛行場を攻撃目標に、指揮官宮松少佐（この人は支那事変当時、南昌飛行場へ強行着陸し敵機を焼き払って帰還した豪傑）は、当日の目標付近の天候が悪く2隊に分け、福岡大尉の指揮する18機は雲の下400mで敵飛行場の爆撃に移った。

飛行場に進入するにつれ、高射砲、機銃陣地から猛烈な射撃を受け、爆撃の終わった時には多数機が被弾し、2小隊3番機と同僚である首藤機は左エンジンから火を吹き、編隊から離れ遂に西海岸の砂地に不時着した。

「不時着しても決して死ぬな、必ず助けに行く何処かに隠れている」

8名は参謀長の口達通り行動した。

基地に帰還した指揮官から不時着機は自爆と判断され、搭乗員は同日付けで戦死と報告されたが、しかし彼らは生きており、燃え盛る不時着機から脱出した8名は直ぐ原住民に捕らえられ近くの米軍キャンプに連行された。そのキャ

ンプには二世らしい日本語の上手な米軍人がいて、其の通訳から尋問を受けた後、高い鉄柵のある建物へ収容されたが、数日後に陸軍部隊に救出され、艦隊司令部を経て台南の基地へ帰ってきたが、この時から彼等に思わざる悲劇が始まる。

艦隊司令部に呼ばれた際の詳細な報告で、例え短時間でも敵の捕虜となった事が明白になった為、原隊に帰った喜びも束の間で、8名は別棟に隔離され、特技章も階級章も剥奪され、罪人としての待遇しか与えられなかった。

最善を尽くし、命令通り行動し戦って生還した搭乗員に対する適切な処置なのか、開戦前の参謀長の口達通り行動した結果が軍規に触れるのか、快活だった彼等も一変し殆ど物を言わぬ人間になってしまった。一空の幹部として、首藤機のペア以上に天候不良から低空飛行で爆撃針路に入った自分の責任をどう処理するのか、福岡分隊長の苦悩はいたたまれないものであったと思う。2月20日チモール島クーバンに落下傘部隊の降下作戦が実施され、其の協力に九六陸攻2個中隊17機が参加する事になった。一空攻撃隊に首藤機のペアも一切を復活させ死場所を得るべく敵弾の命中を待っていたものの、オランダ領は米軍の様な対空砲火も弱く、止む無く福岡中隊長は各機一列縦隊になって射撃を行い、それが終わって無事上昇したところで列機を纏め帰投を命じ自機のみ反転し、急降下で敵陣地へ突入自爆を遂げ自らの責任の最後としたものと思われる。3ヶ月の間を囚人同様の生活を送って来た彼等に、最後の死場所を与える目的でポートモレスビー攻撃のため、ラバウルからラエに移駐させられ、3月30日零戦3機に守られ単機写真撮影に出発させられ、敵基地上空に零戦3機を残し、1機で猛烈な対空弾幕の中で悠々旋回し、連続写真を撮った。

ところがこの日は何故か敵戦闘機は一機も出現せず、入念に飛行場や港湾を偵察して、又も無事に帰り撮影フィルムは直ぐ現像され、その後の爆撃に大いに役立ったのであるが、翌3月31日遂に司令より「自爆せよ」との暗黙の命令が出たのである。

敵は反撃すべくポートモレスビーに多数の戦闘機群を集結させており、其のさなか戦闘機の護衛も無く、首藤機は単機爆弾を搭載して出撃させられたのである。

「我今より自爆せんとす、付近の天候晴れ、生前のご好意に深謝す、天皇陛下万歳」

これが首藤機8名の最後であった。

モレスビーへ飛ぶことが危険と考えるより、毎日苦悩の明け暮れから一刻も

早く離脱したい心境で、久々の笑顔を見せた8名は喜んで愛機に搭乗、決別の爆音を残して其の俣帰らなかったのである。

「同期の絆」

岐阜県出身の彼と知り合ったのは通信学校に入隊した時からで、頼もしい体躯で同じ分隊の隣り合わせの教班でもあり、温厚で気の合う仲間だった。通信学校から横須賀航空隊へと、烈しい練習生過程を卒業し、それぞれ実施部隊へ転属となった。支那事変以来、大型機搭乗配置のため作戦行動も同一方面だったので、不時着した首藤達8名の情報もすぐ判った。生還してほんたによかったと高雄空のペア達も喜び合ったが、日が経つにつれ^{びっくり}吃驚するニュースが耳に入った。みんな同情はしても誰も絶対に逆らえない軍律の「捕虜」と呼ぶ言葉に拘り過ぎた憶測から、噂話も飛躍して軍法会議へ回され、内地へ送られたなどと尤もらしく伝わって来た。もし自分が首藤機だったら、どうしただろう。精神的な苦悩と海軍入籍以来期待されている実家の両親や親族の悲嘆を思うと、全く動転するばかりだった。戦後程なく経ってから「首藤達の名誉回復運動を起こそう」と言う話も出たが、各地に点在する同期関係者の連絡も円滑を欠き、終戦から歳月を経て両親達の存在も不明で、世代も代わり忘れかけていた古傷を痛ませる結果も危惧し立ち消えとなった。

幸いにも厚生省の記録には順調な叙勲が行われていた模様で、せめてもの供養になった事かと心からご冥福を祈っている。戦争とは総てが残酷非道の四文字に言い尽くされる。繰り返してならないものは戦争である。

ハワイ真珠湾のアリゾナ記念館を訪ねて

川根本町遺族会 中野秀男

私は6年前、国主催の慰霊友好親善団に県遺族会の一人として参加し、父親の埋葬地がある旧ソ連チタを訪ね、積み積もった父への深い思いを胸に参拝する事ができました。

このたびは機会があって、ハワイオアフ島の真珠湾へ家族と息子夫婦とで行ってきました。今から75年前、昭和16年、日米開戦、真珠湾攻撃のことや現在の様子を知ることができました。

特に戦艦アリゾナ記念館では、太平洋の平和を求めるシンボルとして、撃沈された当時の姿そのまま何百人の戦死した兵士と共に海中に浮かせてありました。墓標そのものでした。係の人の説明によると、約2時間の真珠湾攻撃により、日本人の軍人60人、アメリカの軍人、民間人合わせて約3,000人が戦

死されたとのこと。毎年、170万人以上の人々がこの記念館をおとずれ、戦争の残酷で悲惨な情景を目にして平和の尊さをかみしめています。私たちも記念館の海の中に眠る兵士のことなどを思い生涯忘れる事の出来ない感動をおぼえました。

この記念館には海の中に眠る戦死者の名が一人ひとり書かれていました。その遺族の一人は語っています。「大事な主人、大黒柱が戦死した悲惨な戦争をどうしてもやらなければならなかったのか。中止することはできなかったのか。」と私達遺族と同じ思いです。

勝っても負けても戦争は悲惨なことです。今後、このような戦争は二度とやらないこと私達遺族は共に同じ気持ちであることを体験し、平和の尊さを願ったハワイへの旅でした。

(平成 29 年 4 月発行の静岡県遺族会報より)

父

焼津市遺族会 鈴木一子

父の事を書こうとしても私は何も知らない、どんな声、どんな体格をしていたのか全然分からない、写真で見ただけだから…。とても話し好きな元気な人のようでした。

父は大正元年 11 月 15 日生まれ、昭和 19 年 12 月 13 日ニューギニアにて戦死、33 歳の短い生涯でした。家業は漁業で、小さいながら船持で幸せな幼児期を過ごすも、13 歳で父が死亡、母とも離別、家の倒産にて叔母の家に居候していたようです。母との結婚は昭和七年、これを期に独立、私が生まれたのが昭和 16 年 5 月。結婚して 9 年目の初子、喜ぶ間もなく私の生後 60 日目に出征。どんな気持ちで出征したのだろうか？母や親類の人達にもっと聞いておけば良かった、ほとんどの人が故人になってしまいました。

母、本人、戦友からの手紙から推測するに、昭和 16 年 7 月頃に出征する時は、まだまだ気持ちに余裕があったのではないか。私が生後 4 カ月頃、大阪より外地へ出征するから面会にと周囲が騒いでも、母が乗り物に酔うからと連絡がなく、母が聞きつけて私を連れ大阪まで面会に行ったそうです。これが最後の別れとなり、母はあの時行って良かったと言っていました。その後月 1 回程度の手紙が来るも、すべて横須賀郵便局経由検閲済、どこで何をしているのか。ただ、元気だから安心してくれ、一子は大きくなったか、歩くようになったか、親類が私の初節句を祝ってくれ有難かった、子供を他人に笑われぬよう愛し育ててくれ等、在り来たりの文面ばかり。

戦後、パラオまで行動を共にした戦友からの手紙にて、昭和18年7月20日頃数十名ニューギニア天野小隊に編入。この頃になると戦局が思わしくないと感じ、パラオに仕事でいた従兄弟にアルバムを託した、今も家に保存してあります。戦友はパラオに踏みとどまり別れてしまい、お互い音信不通。パラオも内地との連絡が昭和19年5月初めより音信不通になったそうです。ましてニューギニアの音信は皆無に等しかったと想像します。

母が食糧もなく、財布に入れようとした蛇の抜け殻を見て驚き怒る人が、南方でどう暮らしたのか、可哀想でたまらないと言った言葉を思い出します。この戦争は何だったのか、戦友の手紙も、帰国しても家族は離散しなかなか立ち上がれずにいたとか。私達親子二人家屋敷こそ残ったけど、他は何も無く、母の頑張り、苦勞、嘆き悲しむ姿を見て私は育ちました。

今、孫達が父の年齢となり、それぞれの悩みはあるだろうけど、自分の愛、希望も言えず、国の言うがままに出征し、戦死した父達を思うにつけ、戦争はどんな理由があろうとも絶対にいけないと声を大にして言いたい。

焼津と戦争と私

焼津市遺族会 松永安子

昭和16年12月8日太平洋戦争に突入した日本、次々と勝ち軍^{いくさ}を進めている頃は焼津の地も我が家も懐かしい良き時代でした。

戦いが進むにつれ私の廻りでも出征していく人、戦死の悲報が入る家など多くなり、戦地に軍需工場にと駆り出され人手が不足して来ました。

そんな19年夏、私六年生の時の事です。我が家は糶屋、だが父に当時駅前にあった^三（かくさん）精麦で手伝ってほしいと話があり、未経験な仕事に不安もあった様ですが、手伝う事になりました。そして幾日か過ぎた日父の事故を知らされました。精麦のベルトにシャツの袖が巻きつき、右の腕がねじれ肉はちぎれ骨の一部がかりうじて繋がっていたと聞きました。

松永外科に入院した父、その腕は骨もあらわに楔で止めてありました。暑さで化膿しないよう氷で冷やし続け、目をおおいたくなる様な痛ましさでした。

その頃より焼津でも警戒警報が発令される様になった時期でもありましたから、幼い子供を留守番に父の付添いをする、母の心情は大変なものであったろうと思います。

長女の私と妹二人、3歳の弟と広い蚊帳の隅に、肩よせ合い眠った心細かった日々が思い出されます。

食糧も不足して来た時でもあり、糶の注文は少なくなって来てはいましたが、

それでも金山寺味噌の大豆炒り、金山寺の具を切ったり、米とぎなど子供の私には大変でしたが、学校から帰ってくると、母の手伝いをした日々が思い出されます。

涼風の立つ頃、父が退院して来ました。節削りの達人でもあり、その腕を自慢していた父の右手は、一生曲がらない不具の手となってしまいました。

そして戦禍は、ますます激しくなり都会の母恋しい年頃の子供達が、集団や縁故で疎開してくる様になり、私のクラスにも、東京から2人転校して来ました。

そんな激動の年も改まり、20年2月静浜航空基地が機銃掃射を受け、近くの民家も大変な被害を受けたと聞きました。

又辨天に爆弾が落ちた日、初夏の昼下がり突然大音響と共に地がゆれた。駅の近くの人には列車が脱線したと思い、表に飛び出したと言います。1km先の家も振動で窓ガラスが割れ、爆弾の落ちた所はすり鉢状の大きな穴と化した。その威力のすごさにびっくりもした。

昭和20年5月19日午前10時頃、米機B29が越後島、下当間地区に爆弾18発を投下した。

その内の2発が朝比奈川左岸に着弾し、大きな穴が出来爆弾淵をつくった。被爆により、成人男女と下校中の六年生男子2名の尊い命が犠牲となった。又、家屋田畑などが大きな被害を受けた。

そんな時でも子ども心は怖さより、警戒警報で早退となる事の方がうれしくて道草をしていると、空襲警報が鳴り慌てて家に帰り防空壕にとびこんだものです。

20年6月ある大雨の日、防空壕の冠水を防ごうと、母が室の屋根に材木を取りに上がり足を踏み外し右手骨折、父と母二重苦になってしまった。

戦争という大きな禍の中で、誰もが禍に巻き込まれながら生きて来た時代です。日毎に戦争は激化して来ました。

6月19日あの静岡大空襲があり、両親は子供だけでも安全な所で眠れる様にと、私と妹近所の子供10人程を、石脇の山の家に避難させてくれました。防空頭巾を肩にかけ線路伝いに歩いていく途中、空襲警報となり近くの川に滑り下りた。防空頭巾を川に落として大泣きする子もあった。2時間かけてやっと山の家に着き、五右衛門風呂に入れて、涼しくゆっくり眠れた事が最高にうれしかった。

そんな数日後、焼津の町に焼夷弾が落とされ、多くの家が焼けました。

今回その時焼夷弾で被災した方から、当時を思い出しながら話を聞かせていただく事が出来ました。

「忘れもしない、7月28日の夜の事、その日は成田山の祭日でもあり土曜日であった。明日家の大事な物を疎開しようと荷物をまとめ、リヤカーも借りて来てあった。灯火管制でもあり早めに子供を寝かせた。その時爆音がしてB29が低空で来た。みんな隣組の防空壕に避難したが、私は赤ん坊が水ぼうそうだったので、家で無事を祈っていた。その時は偵察機で無事だった。やれやれと子供を家に寝かせた、ぐっす

りと眠りにつきどの位たったか、バリバリと音がし外も騒がしい。

海の方から焼夷弾を落としている、何言う間もない、空から油の付いた火の筒が降ってくる、私は家を守らにゃならん、背負った児にぬらした防空頭巾をかぶせ、川の水を汲んでバケツリレーをしたが、そんな事無駄だった。火は地をなめ家の屋根にも、火の玉がはぜて飛び散った、暗黒の空をまるで仕掛け花火の様に、次々にはねて燃えた。もうこれまでと我が家を後に川を渡り避病院の方へにげた。背中の児が泣き出した。『泣かすとそこに爆弾が落ちるぞ。』と廻りの人にどなられた。

朝家に帰って見れば、吉井金物店から服部ガラス周辺、横町新地の十五軒も家が焼けてくすぶっていた。

着の身着のまま裸足の5人の子供をつれ、乞食の様な格好で石脇の在所に辿りついた。一晚泊めてもらったが、どこも苦しい時だったから歓迎されず、やっかい者だった。仕方なく近くで三晩野宿した。夜こっそり在所の畑から大根を抜いて来た。それを知った母^{かあ}さんが、ふびんに思って畑にそっと食べ物を置いてくれてあった。涙の出る程うれしかった。

それでも6人の胃袋を満たす事が出来ず、よそのごみ箱の中まであさったよ。悪い事は続くもんでの～。子供の一人が日本脳炎になってしまい、食べる物も着せる服さえない。近所の人に胴着をもらって、やっと避病院に入院させる事ができた。

夫は徴用船で戦死するし、男手のない惨めさを、とことん味わったよ。私が悪い訳じゃない、戦争が悪い、生きる力も尽き死のうと思ひ線路に座ったが子供が不憫で出来なかった。それでもやっとな、六畳位の^{とび}鳶の小屋に入られ雨だけは^{しの}凌げた。高等科だった長男に漁船に乗って働いてもらった。焼け跡に芋も植えた。生きて行かにゃならんもんね。生きる為に食糧の買い出しにもいった。高洲の知り合いへ行った時の事、その家でお米を二升もらい、尊いお米だから

乳母車の底にかくし、野菜をのせ帰る途中、大富の駐在前まで来たら駐在に大事な米が見つかってしまった。『おいてけ』と言う。駐在が鬼に見えたっけ事情を話し泣いて頼みやっと許してもらった。

数かぎりないどん底生活と苦しみは死ぬまで忘れないよ、あれから 50 年、父を知らない子も 51 になった。だかの～子供等も、戦争中の苦しかった話をしても聞こうともしてくれないよ、あんたに聞いてもらって少しはすっきりした。」と寂しそうに言われました。私も話を聞くまではあの辺に焼夷弾が落ちた位の事しか知りませんでした、大変な苦勞をなされた人がいる事を今回知りました。

又焼津神社の西側、鰯ヶ島にも落とされた。鰯ヶ島でも火熱で焼けたじゃがいもを、皆で食べたと言いました。

「ほしがりません勝つまでは」と少年も少女も学徒動員や軍需工場で働かされた。プロペラ作りや防毒マスク作りをしたと言います。

家族の元を離れ県外まで行った少年少女達、国を挙げて軍の仕事に従事しました。

運命の 8 月 15 日暑い日でした。親から母の在所に行く様言われ、私達姉妹は照りつけるほこりの道を一里半も歩いて北新田の家に着きました。小田原の従兄も疎開して来ており、大はしゃぎとなった。そんな時叔父がきびしい声で、「皆ラジオの前に座れ。」と言う。私達子供は何かわからなかったが、大人にならって神妙に座った。ラジオから初めて聞く天皇の声、

「たえがたきをたえ。」の玉音放送でした。子供心に何となくではあるが、日本が負けて戦争が終わったんだ、と感じましたが悲しみはありませんでした。

戦争は終わりましたが、食糧や物不足は続き焼津でも大半の家が、豆かす、こうりゃん、芋の粉など食べられる物は工夫して食べたと言いました。我が家は商売上、その様な思いをしませんでしたが、醤油や味噌など調味料も何一つ無い時代です。

海水を汲んで来て、主食となるすいとんの味付けにしたが、にがくてまずかったとききました。

私の家にも近所のおばさん達が、大豆の茹で汁をもらいに来ていたのを思い出します。海水にまぜて使うと、少しは醤油らしくなった様です。

日本は急速な高度成長時代となり、何でも手に入る生活、飽食の時代と言われる今、戦争を知らない親と子の世代となり、物の尊さ、親子の絆、思いやりなど希薄になって来ています。

戦争で夫や父を亡くした人、家を焼かれた人、当時は福祉もボランティアもなかったと思う。でも一生懸命生きた人々、自分達の力で生きるしかなかった。焼津でも戦争体験者が高齢化し、当時の焼津を語ってくれる人も少なくなりました。

平和の尊さを忘れてはならない、二度と繰り返してはいけない戦争を、語り継ぐ事の大切さ、私の中でも薄れゆく記憶をたぐりながら記しました。

そして戦後 77 年の今思う事。世界中の人々がコロナと言う目に見えない敵と戦っている、命をおびやかされ、生活が破壊され不安な日々を過ごしている、世の中が安心安全になってゆく為には、それぞれの体験を語り伝えて行かなければと思います。

私の戦時期体験

牧之原市遺族会 久保みつ

戦後 65 年、平成 22 年元旦に 80 歳を迎えました。昭和の激動の時代をなんとか乗り越え、殆ど不自由なく平和に暮らしておりますことは、あの戦争の犠牲となられた多くの方々のお陰で今があると毎日感謝の気持ちを持ち続けております。

年を重ねる毎、戦争時代を体験した人が少なくなり、戦争を知らない人が大部分となりました。二度と再びあんな悲惨な戦争の無い平和が続く事を願いながら、私の記憶をたどり綴ってみました。思い出すと涙が出て思うように筆が進みません。

「兄の入営」

日本男子は、20 歳になると漏れなく受ける適齢徴兵検査に、兄は甲種合格、私が小学校一年生の時でした。農業の合間に、父と兄は小舟を出し漁業もしておりましたが、入営が決まると父一人では船が出せず、親戚の家に船を譲り「この船とも暫く別れるだな」と記念写真を撮り別れを惜しみました。父母、新妻（兄の嫁）、4 人の妹、4 ヶ月の末っ子の弟を残して昭和 12 年 1 月 10 日、現役兵として、豊橋歩兵十八連隊に入隊することになりました。

当日早朝、入営の昇り旗を立て、区長さん始め大勢の方々のお見送りで相良駅まで行列して歩いて行きました。お見送りの皆様に挨拶「日本男子として誇りを持って軍務に励んで来ます。」と、あの凛々しい敬礼の姿、今でも脳裏に焼き付いています。長男である兄は、私たち姉妹の頭をなでながら、「勉強しっかりやれよ。家の手伝いも頼むな」と言って汽車に乗りました。私たちは皆、軍の任務を終えて 2 年か 3 年で除隊する事と思っていたので、これが最後の別

れになるとは夢にも思っていませんでした。

「支那事変勃発」

兄は、4月10日第一期教育終了の時、上等兵候補を命ぜられ抜群の成績をもって一等兵に進級するという頑張りでした。

昭和12年7月7日北京郊外において盧溝橋爆破事件。支那事変（日中戦争）が始まったのです。8月14日、十八連隊に動員令が下り、兄は石井部隊飯田隊中村小隊に編入。27日に豊橋を出発するので、家族との面会が許されたとの連絡が入り、母は急いで千人針と白い綿布を酢で煮て乾かしたものを用意して豊橋の連隊に、父母は、新妻と長女の姉を連れて面会に行きました。隊長の「此の部隊で生きて帰れるのは数10名あればよいが」との話を目にした母は、思った以上の激戦だと改めて知らされ、いてもたってもいられない気持ちで、その日から「お明神様」にお百度参りを始めました。次女の姉も母について行きました。

いよいよ豊橋出発の日「今、米原を通過中」と私達姉妹に宛てた葉書が届きました。やっぱり相良駅出発の時と同じ「なかもみつもしっかり勉強やれよ。家の手伝いも頼むな」の走り書きでした。父は胃弱だったし、幼い姉妹、弟、家族の事が余程心配だったのでしょう。9月3日「上海に着いた」と家にも最後の手紙が届きました。勿論、新妻の姉さんにも届いたと聞いています。「此の手紙の着く頃は俺の命もないだろう」と…お国のため命を捧げる事を御奉公としていたのです。

「兄戦死、階級」

9月3日、上海 虬江馬頭きゅうかうばとうに敵前上陸、小隊長の伝令となり、軍工路大奪取戦中、不幸敵弾の為、胸部貫通、9月6日午前8時7分、虬江馬頭西方軍工路東方地区に於いて戦死。享年22歳、と平田寺墓地の石碑にあります。

時代が時代だったので仕方ないことですが、「お国のために名誉の戦死おめでとうございます」と挨拶されました。私たち家族は死んだのにおめでとうと言われて、何とも言いようのない思いをしました。

「漢口陥落」「南京陥落」の度に万歳、万歳の提灯行列がありました。本来なら行列に参加するのですが、私たち家族は外にも出ず木戸を閉じ、仏壇の前で母が泣いている姿を見て、子供心にどうしてよいかわからず一緒に泣きました。

靖国神社にも合祀され、金鷄勲章もいただき、「二階級特進」でしたが、現役兵で上等兵候補を寸前にして戦死、二階級上がっても上等兵です。上等兵候

補になるには、よほど優秀でなければいけないことを知った母は、良く頑張ったのにと母の嘆きでした。ある時、「御上からお金が下るのでいいね」と言う人もいました。この時ばかりは「お金なんかいらぬ息子を帰して欲しい」と号泣しました。私達も母と同じ気持ちでした。お国のために散ったのに、人の命よりお金の方がいいのかと憤りを感じました。

「軍国の母」

家では涙も出し、嘆きも何度か聞きましたが、人前ではめそめそしない気丈さを見せ、軍国の母そのものでした。私は、長男が、孫が、20歳になった時、何時も思いました。頼みの我が子を死を覚悟の戦場に出す母の気持ち、私には到底出来ないと思いました。今でも友人が話の端々に「貴女のお母さんは軍国の母でしたね」と言ってくれます。

「大東亜戦争」

昭和16年12月8日大東亜戦争が始まり、現役兵は勿論、軍隊を除隊した者、一家の柱である妻子のある者、召集令状が来ると容赦なく戦場に行きました。家族、妻子、老いた両親は泣きの涙で無事を祈りながら送り出しました。青年達は義勇軍に満蒙開拓団、女子は花嫁開拓団として、一途にお国のため国策にそって大陸に送り込まれました。内地に残った女子は、挺身隊といって軍需工場に行き、私達学生は戦地の兵隊さんに慰問の手紙や慰問袋を送ったり、男手のない留守宅に勤労奉仕に行き農作業も手伝いました。戦争が激しくなり、勉強どころではありません。

体操の時間は、分列行進、消火訓練のバケツリレー、竹槍訓練でした。物資の不足で帳面もなく、書き方の時間は新聞紙に『米英撃滅』『一億一身火の玉だ』などを書きました。靴もなく藁草履をつくって通学です。「欲しがりません勝つまでは」の合い言葉で、不平不満を言う人はいませんでした。

女学校に進んだ人達も学徒動員で軍需工場に派遣され銃後の守りに一心でした。

「町役場に勤務」

昭和19年4月より町役場に勤務しました。最初は給仕、電話受付でした。友人は軍事工場で働いているのに、もっとお国のために働きたい、お国のためになりたいという思いの私でした。

食糧難とはいえ、相良はまだまだ都会と違って良い方だったし、安全な所でした。

東京より各お寺に分散して疎開児童が来ました。平田寺には渋谷の富ヶ谷小

学校から三年生以上の生徒が 100 名来ました。毎週日曜日になると私在家に居ることを知っている疎開児童は「お姉さん」と言っでは遊びに来ました。食べ盛りの子供達、親に甘えたい時期なのに、安全な場所へ避難させた親心でしょうが、今では考えられません。

昭和 19 年 12 月 8 日、東南海地震がありました。学校の窓ガラスは全部破れて土煙が立ちました。子供を迎えに行く父兄で校庭はごった返して居ました。私は疎開児童が心配でしたが無事で居たので安心しました。しばらくして疎開児童は安全な青森の弘前に移動しました。

B29 が富士山を目標に御前崎上空を通過して、相良が都会に向かう通り道となっていました。何時爆弾を落とされるかわからない状況でした。

牧之原に大井航空隊が出来、予科練習生の手旗信号や飛行体操を小学校校庭で見学しました。海岸では猛訓練もしていたのですが、軍の事は絶対秘密でした。所々の家に民泊した練習生もありました。

「警報を知らせる重大な役目」

当時の私の仕事は、警察より「何時何分警戒警報発令」の電話を受け、職員に言っしてから急いで小学校へ知らせる、小使い室より警戒警報のサイレンを鳴らすのです。数分経ってまた「何時何分空襲警報発令」の電話を受け、小学校に知らせると空襲警報のサイレンが鳴るのです。私は、電話をしてから戸籍係の人と戸籍簿を防空壕に運ぶのです。暫くして「警報解除」の知らせを受け小学校に連絡、警報解除のサイレンが鳴るのです。ほっとして戸籍簿を戻すという有様でした。

ある時こんな事がありました。一日に何回となく警戒警報、空襲警報の繰り返し、私もパニックになり警戒警報を間違えて空襲警報と連絡してしまったのです。「わあーいきなり空襲警報だ」と皆を慌てさせてしまったのです。戸籍簿を防空壕に運びながら空を見上げると B29 が飛行機雲を出しながら通っているではありませんか、間違えたのが幸運にも良かったのです。

「本土空襲」

東京大空襲で逃げ場を失った人が隅田川に飛び込み、大勢の犠牲者が出た事。静岡も焼けている。浜松も…艦砲射撃があっで焼けている。しかし、どうすることも出来ません。只々無事を祈るばかりです。明日は我が身かも知れません。毎日が恐怖でした。命が助かった人は家を失い、田舎の実家や親戚に身を寄せて居たのです。大家族になった家では何でも分け合っで、すいとん、ぞうすい、芋パンなどはありがたい食べ物でした。

戦災者、引揚者、子供の転校届などで役場は大忙し。当時はスパイに知られたら困ると何事も秘密でした。出征兵士も役場で一人付き添って入隊するという静かな出征でした。尊い命を捧げた兵士の遺骨の帰還も淋しいものでした。夜になると燈火管制と言って灯りが外に漏れないように黒い布を電灯の周りにつけました。何時でも警報発令されると、防空壕に入る用意をしていました。軒先には、消火のために大きい桶に水を溜め、バケツ、竹槍などが備えてありました。この頃です。敵機より宣伝ビラがまかれ「早く降伏しろ」というものでした。私達は勝つことだけを信じて頑張っているのです、そんな宣伝ビラには目もくれませんでした。

「近所にも犠牲者が」

終戦間近の7月24日、大江の矢部仙太郎さんのお宅に爆弾が落ち、爆風の破片で当時12歳の千恵ちゃん、10歳の節ちゃんの幼い姉妹が犠牲になり、長男の茂さんは負傷という大惨事に巻き込まれました。近所の人や母親が付き添い、急いで高田医院に駆けつけ医師の手当てを受けたのですが、不幸にも姉妹は帰らぬ人となりました。このお宅は父仙太郎さんも戦地で、母のきよさんは6人の子供を育てながら農作業をして留守宅を守っていました。千恵ちゃん、節ちゃんは、母を助け弟達のお守りや食事の支度も行っていた仲の良い姉妹でした。二人の子供を亡くされたきよさんの心中を思うと、身の裂ける思いをしました。あと20日早く終戦だったら、この子達は犠牲にならなかったのにと悔やまずにはられません。

平田寺にある大江区戦死者の碑に二人の名前も刻まれています。私はお墓に行く度にこの碑に立ち寄って、兄をも偲びながら、戦死者の方々の名前に目を通し、千恵ちゃん、節ちゃんの名前を撫でながら、手を合わせご冥福をお祈りしています。

数々の体験、ここに書きつくせません。私の戦時期の一コマです。

戦争を繰り返してはならないことを語り継いで行くことが、生きている者の使命です。後世に少しでもこの思いが伝われば幸いです。

(平成22年8月牧之原市教育委員会発行の「後世に伝えたい牧之原市のはなし」より)

遺児の想い

菊川市遺族会 山田いち

私は父と言う人を全く知りません。私が生後1歳2ヶ月の時、戦死したからです。母は24歳、結婚生活3年、伴に過ごしたのはわずか1年足らずと聞いていました。何とも短い女の幸せでした。面会が許され、6ヶ月の私をおんぶ

して名古屋まで会いに行き、その時写したというたった1枚の親子三人の写真が、私と父との唯一の証です。

一家の大黒柱を失い、戦中・戦後の厳しい中、どの様に過ごしてきたのでしょうか。生きる為、私を育てる為、言葉では言い尽くせない苦勞の毎日だったと思います。幸いにも我が家では祖父が健在でしたので、家業の農業を続け、私も小学生の頃より、お茶摘み、田植え、稲刈りと、田んぼや畑に出てお手伝いしたものでした。その当時、地域の中では「遺族」と言うと優遇されていた様で、青年団の人達が勤勞奉仕との事で農作業の手伝いに来て下さったり、お盆やお彼岸にはお墓参りに来て下さったりしたものでした。祖父のおかげか、又、私が父親と言う人の存在を知らない為か、父親のいない寂しさ、という事は余り感ずることもなく成長しました。

けれども、こんな事がありました。それは中学三年生の時、高校への入学願書を提出した日の事でした。学校から帰った私は、思わずお仏壇の前で泣き伏してしまいました。「お父さん、どうして死んじゃったの…。お父さんさえ生きていてくれたら…お父さん…」私には中学になり、続けていた好きな事があり、どうしても行きたい志望校があったのです。けれども祖父は、「農業高校へ行け」と言うのです。父の死と共に、私の将来は決まった様なものでした。「お前は家とりだから、農業をやらなければ…」と事あるごとに言われ、期待をかけられてきました。私も、そうしなければならぬのかなあ、という気持ちはありましたが、それだけに、高校までは自分の好きな道を行きたい、卒業したら必ず家に入ります、農業をやります、と、どんなにお願いしても許してもらえませんでした。「親がないと思い一生懸命育ててきたのに、わがままにも程がある。そんな学校なら家では高校へはやれない!!」と言うのです。祖父と私の間に入って母は戸惑うばかり…。そのあげく、涙ながらに「ごめんね、おじいさんの言う事をきいておくれ…」と言う母の言葉に私が折れたのでした。祖父にしてみれば、息子亡き後この孫を育て、この家を守っていかなければ、という大きな責任を感じていたのかもしれませんが、その時の私は、まるで悲劇の主人公にでもなった様な気持ちで嘆き悲しんだものでした。そして私は祖父の言う通りの道を歩み、家を守り、現在、息子に引き継いでいるのです。戦争さえなかったら、お父さんが生きていたら、私の人生は…と思った事もありましたが、祖父と母の旅立つ時の、本当に安らかな寝顔を見た時、与えられた道を精一杯生きて来た自分を納得することが出来ました。

戦後77年を迎え、私達の国はこんなにも平和な国となりました。これは、

英霊となられた皆様の犠牲と、御加護、そして国民の皆様の必死の努力の賜と
思います。戦争は絶対に反対です。戦争遺児は私達限りでとっておりました
のに、毎日報道されているロシアとウクライナの戦争、断腸の思いです。武力
ではなく、言葉の力では解決できないのでしょうか。世界中の人々が平和を願
っているのです。遺児である私達は、心の底から、強く、強く願っているの
です。

戦争のない平和な世の中であります事を…それが亡き父への親孝行であり、
御供養と思うのです。

父、母、そして私

菊川市遺族会 室屋近子

私は、戦争を知らない子供達と同様、戦争の記憶がありません。

昭和19年4月12日（西暦1944年）菊川市（旧堀之内）に生まれ、現在に
至っております。

父の名は森下静三（もりした しずぞう）。父が戦死したのは昭和20年5月
28日（西暦1945年）33歳（大正元年11月15日生）。昭和19年11月に静岡
三四連隊に入隊、満州第二〇四一部隊に編入、シベリアのジヤジヨール、ナヤ、
陸軍兵長。このことは、菊川市遺族会（旧菊川町）の平和の礎の中に記録され
ています。

もう少し長く生きていれば終戦を迎えることが出来たのに、残念でなりませ
ん。

父は抑留され、食べるものもなく、隣に寝ていた方が声を掛けた時にはもう
息をしていなかったそうです。骨と皮、栄養状態は極めて悪く戦病死とのこと、
この話は母からではなく、私の従姉妹から聞いた話です。私には父の記憶はあ
りません。

母は、私の為に再婚という道を選んだのだと思います。父が戦死した時に一
番苦勞したのは母なのです。母は嫁ぎ先から出され、行くあてもなく母の実家
に身を寄せることとなり、私の記憶では、昔の物置小屋にむしろが二枚板の上
に敷いてあったのを覚えています。

母が近くの工場へ行く姿には、母が何処かへ行ってしまわないかと大き
きな声で泣き、夕方近くになると、母が帰って来る夕陽のさす道に座って薄暗
くなるまで待ち続けていた事、「カラスなぜ泣くの、カラスは山にかわいい七
つの子があるからよ」という歌が流れると、その風景が、今もって思い出し私
の心から離れた事はありません。

小学校に入る少し前に、「お父さんだよ」と母に言われた時には、私にもお父さんと呼ぶ人が出来たと喜び、嬉しくもありました。

小学校一年の時、妹が生まれ、母があまり丈夫な方ではなかったので、ご飯の支度、義父と妹と自分のお弁当を出来る範囲で作った事は、今では良き思い出です。

中学三年の時、義父から「中学出たら働くんだよ」と言われ、お世話になったから、ここまで育ててくれたから、恩を返さなければならないという気持ちがありました。素直に受け止められず、とても悲しく、母には言えませんでした。

数日後、母が「上の学校へ行けるよ」と言って、「公立はだめだけど、私立で、試験日は公立と同じ日になるけど、話を決めて、担当の先生にお願いしたよ」と話してくれたと聞いた時は嬉しかった。本当に嬉しかった。

後日、母が義父に「お願いだから妹と同じ様にしてね」と言う話を聞いてしまい、やはり私は早くこの家から出なければならない、という気持ちと、私のために自分をさておき母はいつも見守り続けてくれた事、感謝すると共にそれを受け入れた義父にも感謝しています。

義父は平成元年 11 月 16 日享年 77 歳にて永眠いたしました。

母は大正 4 年 4 月 4 日生れ（西暦 1915 年）、母も義父の死後 10 カ月後の平成 2 年（西暦 1990 年）9 月 26 日永眠いたしました、享年 75 歳。

「母の心の中では、戦争は終わっていなかったのではないか、と思われてなりません」

母は、陰ながら遺族会の会員名簿に私の名前を挙げてくれた。お陰で、今現在このようにして遺族会のお手伝いのできた事、皆様のご協力が無ければ出来ない事に感謝の気持ちで一杯です。

そして戦争は、決して、決してあってはならないと切に感じます。

戦死した父への想いと戦後の生活

菊川市遺族会 鈴木好雄

私は昭和 17 年 3 月 31 日生まれなので、今年 80 歳になりました。

昭和 19 年 10 月父（鈴木福次）は召集令状（赤紙）により出征することになりました。その時、家族は年齢順に曾祖母（73 歳）、祖父（58 歳）、母（28 歳）、叔母（23 歳）、私（2 歳）、弟（0 歳）でした。家族を残して出兵する父の想いは如何ばかりであったかと思えます。その頃既に米軍は 6 月サイパン島に上陸、7 月にはグアム島に上陸し守備隊は全滅し、敗戦は濃厚でした。

父は岐阜連隊に入隊し、その後送られたのは満州（中国東北部）の最果ての地ハイラル（現在の中国内モンゴル自治区フルンボイル市）でした。ハイラルはソ連との国境の近く、大興安嶺の西側にあります。戦地から送られた父からの軍事郵便がいくつか残っています。

昭和20年8月8日、突如ソ連は日ソ中立条約を破棄し、多数の戦車を先頭にして満州へなだれこんできたのです。当時満州の日本軍は兵力も装備（小銃と手榴弾くらい）も貧弱でしたから、ソ連軍の機甲化部隊を前にして為す術もなかったと思います。

父は昭和20年8月13日満州のハイラル（海拉爾）で戦死したと祖父から聞いています。戦後になって父の葬儀は行われましたが、遺骨もない空箱でした。父の遺骨は現在でも満州かシベリアのどこかに眠っています。父は大正2年6月16日生まれですから、32歳で戦死したことになります。母が29歳の時です。今から考えても残念無念であったと思います。

満州やシベリアの冬はマイナス50度にもなり、まさに極寒です。まともな防寒具もなく、兵器も少なく特に弾薬がなかったようです。南方戦線が重点であり、満州は日ソ中立条約で安心と思われたようです。また、当時の戦争指導者たちは、まったく無能で米英との交渉をソ連に依頼するなど、スターリンの残忍さも国際情勢も分かっていなかったのです。それ故、無謀な戦争をしたのです。

いずれにしても、父は結婚3年で妻と幼子2人、家族を残して最果ての地満州のハイラルで命を落としました。このことは残念であったと思います。

鈴木家の家業は農業でありました。茶、米、麦、それと野菜を栽培していました。それ以上にたいへんだったのは、養鶏業でした。主たる働き手であった父が出征したので養蚕業はやめましたが、残された家族はととてもたいへんでした。畑や田んぼの仕事だけでもたいへんなのに、さらに養鶏は100羽以上も飼い、六郷地区で一番多かったと思います。しかも受精卵をとるための養鶏業でしたので保健所が検査に来ました。雄鶏が一羽と十数羽の雌鶏が一部屋にいて、それが数部屋ありました。生き物の世話は想像以上にたいへんでしたが、鶏たちは祖父や母にととても懐いていました。

戦後の主たる働き手は祖父と母でしたから、子供から見てもたいへんそうですし、私達も小学生低学年の時から手伝いは当然のことでした。茶畑や田んぼの仕事にしても現在の様に機械化していませんでした。お茶は茶ばさみでした。田んぼは鍬と鎌だけでした。特に、お茶摘み時はたいへんでしたので同じ地区

の中学卒業したばかりの娘さん二人に頼んで朝5時半から夕方7時半くらいまで働きました。牧之原にも茶園があり、共同の茶工場は神尾にあり、リヤカーによる往復だけでもたいへんでした。

現在神尾から牧之原までは舗装道路ですが、昔は旧道の石ころだらけの急坂（通称、はん坂）でした。母は、その急な坂道を一人で角籠にお茶を詰めてリヤカーで往復したのです。祖父は80歳になるまでお茶工場の仕事をしましたから、お茶刈りは母が主でした。

6月の二番茶のとき、梅雨であり本降りの中でも茶刈もしました。雨水で茶葉が重くなり28%も割引かれました。私は高校生の頃より、夏休みは茶工場で蒸しの助手として働きました。当時の燃料は石炭と木炭でした。工場の機械はすべて1台のモーターで動いていました。

その後、私は高校を卒業し祖父が引退し、養鶏はやめて専業農家になりました。茶畑を拡大するために原野を購入しブルドーザーで開墾、茶樹は藪北品種へ改植をしました。平成四年から平成14年頃のお茶産業は好況でした。現在からすると好い時代であったと思います。

現在、夫婦で少しばかりのお米を作り野菜作りも出来、子供3人、孫5人、みんな元気で過ごすことが出来るのは、先祖、祖父、母そして亡き父のお陰と感謝しています。

しかし、最近のロシアによる一方的なウクライナ侵攻で数多くの民間人が命を落としています。戦争が今の時代に起こることは、戦後80年もたつ日本では考えられません。戦争が一国のトップの考えで始められます。終戦後も何年も、領国と世界に多大な損失と犠牲を残します。一刻も早く終戦を迎え、世界平和が迎えられるように願うばかりです。

戦没者家族の思い

菊川市遺族会 中山猛

私の父親は昭和19年8月フィリピンのミンダナオ島で亡くなりました。25歳でした。

そしてその年の12月東南海地震で我家が潰れ、翌年何度目かの余震で揺れる中、仮設の小屋の中で、私は生まれました。

私を育ててくれた父も既に亡くなり、母も昨年100歳で他界しました。二人とも戦後の混乱期から、私たち兄弟を育ててくれました。

一昨年父親の軍歴を知りたくて調べたところ、詳しい情報はありませんでした。でも、それまでずっと戦死と思っていたのですが、実際はマラリアによる

戦病死でした。陸軍工兵でジャングルの中など、大変な苦勞をされたと思います。

一度もあったことのない父親ですが、一つだけ、私に残してくれた宝物があります。それはジャバラ式のカメラです。今では全然使えませんが、私の写真好きの原点となっています。

私は父親の三倍以上を生きて、平和に過ごしてきましたが、現在ロシアのウクライナへの攻撃を思うと、心配でなりません。

戦争は肉親を亡くし、また離れ離れにし、人々の日常を一瞬に奪ってしまいます。

一刻も早いロシアの停戦撤退を、強く思います。

父と母の一端の面影

菊川市遺族会 落合判俊

～父の面影～

私の父、吉松（輝光院真忠吉玄居士）は昭和19年旧満州に出征後、シベリアに強制抑留され、昭和22年6月に舞鶴港を経て復員し、間を置くことなく腸チフスを患い、小出（現六郷小学校の南近辺）の隔離病舎に収容され、1ヶ月後の7月18日、33歳で死別しました。私が5歳の時でした。

極寒地の抑留先で森林の木の伐採、重労働で食料も十分に与えられず、時にはネズミやカエルなども食し、栄養失調で体力も衰え、急激に食べ物や環境が変わり、体がついていかず疾患したようです。隔離中は家族も一切面会できず、私も父の顔を見ることも、話をすることもできませんでした。

父親の姿が記憶に淡く残っているのは、父に左手を引かれ、当時の堀之内駅（現菊川駅）から徒歩で10分足らずの自宅に帰る途上、潮海寺の人から「吉松っあ、帰ってこれてよかったなあ」と声をかけられたことと、国防色の兵服と足元をゲートルで巻いた父の後ろ姿だけがおぼろげに残っている程度です。私自身、今回の投稿を機に一つでも多く父の抑留生活の様相を知りたく、昭和56年発刊の「シベリア抑留体験記（シベリア抑留の体験を語り継ごう会・刊行）」を読み返しました。第二次世界大戦後、シベリアに抑留され、厳しい寒さの中で過酷な労働を強いられた450余人の生の声（収容所・労働・酷寒・死・食・衛生のこと等）が生々と語り継がれています。父もこの「シベリア抑留体験記」350ページの中に重ね合わせることが数多くあり、戦争での悲惨さをまざまざと感じさせられます。

父との会話もなかった私にはこの「体験記」のお陰で、父が味わった、辛く、

厳しかった状況を代弁してくれている、貴重な手引きとなっています。

～私の僅かな記憶～

- ◆頭の上をB29爆撃機が「グォーグォー」と凄まじい音をたて、通り過ぎていく時の恐怖感。
- ◆近所の人と何人かで固まって、近くの防空壕へ急いで避難したこと。
- ◆牧之原飛行場が空襲で、東の空が真っ赤に燃えている光景。
- ◆ジープに乗った2人の進駐軍兵士から貰った、チョコとガムの味、うっすらと記憶があります。

～母の面影～

母は私が中学校の頃まで、近所の同じ境遇の戦争未亡人の仲間2～3人と、ほぼ毎日、朝夕、20kg余のお米を担いで、静岡や熱海の旅館・寿司屋へ行商に行き、帰ってくると「今日は闇米摘発の鉄道公安官がいなくてよかったやあ」とほっとつぶやいたことを度々覚えています。長い間、骨身を削り父親代わりとなって、女手ひとつで姉たつ子（79歳で他界）と私を育ててくれました。母さき（真苑妙陽尼上座）は平成5年3月、74歳で他界しましたが、生きているうちにもっと「父のことを聞いたり」「孝行しておけばよかったのになあ」と悔やみます。通夜付添いの夜、枕元の赤い表紙の日記帳の中に、遺族会の人達で東北の旅に行った時に母が詠んだ一句がありました。

旅にいで この松島の景色をば 我だけ見ゆぬ ^{あなた} 亡夫にすまぬ

この句を読んで、若くして死別した夫への妻としての凝縮した一途な思いが感じられ、つい私も目頭が熱くなり、おふくろの冷たくなった手を握りしめ、涙を流したものでした。また、十三回忌供養の前年、平成16年4月の墓地修復の入魂供養の際、母の遺骨を夫の墓石内に合祀することが叶い、ひと区切りのついた供養となりました。

今日、世界中で人種や宗教的な争いで紛争が絶えません。無謀で非人間的なウクライナ軍事侵攻も一日も早く終結して、戦争による犠牲者や私達のような戦争遺児をこれ以上出さないことを願うばかりです。

戦後77年が過ぎて、この度、菊川市遺族会により「次世代へ伝えたい、戦没者家族の想い」の発刊の機会を得て、父と母の一端を投稿できることを、心から感謝を申し上げます。有難うございました。

小学生の兄が白木の箱を胸に

菊川市遺族会 平松とみ

今年も5月の母の日、^{やそじ}八十路に入った私は、3人の子供夫婦に感謝で祝いももらいました。

そんな時いつも思い出しますが、私が小学生の頃、母の日によせて学校で作文を書かされました。そして何人か校内放送されるのですが、いつも私はその中に入っていたのです。

大人になり母となって初めて気付いたのです。私の書いた文章が良かったとかではありません。母の生き方が小学生の私がどう見ても大変な毎日であった事を、先生方が感じて下さったのでしょう。

父の出征時、家には5人の子供と母のお腹は6ヶ月の^{みおも}身重でした。

その後、父は33歳で昭和19年8月19日バシー海峡で戦死。母と子供達だけが残されたのです。

その時、4歳であった私は写真で見る父の顔に「そうこの人が私のお父さん」と思う気持ちと、一つだけの思い出は、兄弟に置いてけぼりになって泣いている私を見つけてくれた父が、着物姿でおぶってその場につれて行ってくれました。

その時の父の背中と帯の黒さだけははっきりと覚えているのですが、その時の父の声も顔もどうしても思い出せないのです。

小学生になって間もない兄が、小さな学生帽と学生服の胸に白木の箱をかかえて、オート三輪の荷台から降り立った姿は今も忘れられません。

私は高校卒業後、近くの農協に勤めたのですが、その上司が、お母さんはお月夜にこの県道で自転車を練習していたんだよと、永い間覚えていて下さっていました。

鮮魚商をしていた父の仕事は母がやらなければならず、戦後、魚は配給制となり母は自転車に乗って魚の着く時間、夜中でも明日の配給の準備に出かけました。

順番に小笠、横地、内田と出掛け、子供達の夜は、近所の方が交代で朝まで泊まってくれました。

大雨の中、夜中にカッパを着て出かける母を、たまたま家に来ていた父の祖母が雨の中出かける母を見送った後、いつまでもガラス窓に立っていたのを私もいつまでも見ていました。

大きくなった姉はよく学校を休み家の仕事を、兄は中学校から帰るのを待たれて、母の片うでとなって店の仕事をしてくれました。

29歳で夫を失い、女手一つで子供達を育て、店を守り抜き、94歳で父の元

に逝ったその母が私達子供にいつも言っていた言葉は「みんなに助けられて生きて来られた」でした。

復員を待っていた家族と日章旗

菊川市遺族会 藤本春江

私の兄が出征し、終戦を迎えました。しばらくしたら出征した近所の皆さんが復員してくるようになりました。

私は、河城地区牧之原の六本松の通りに住んでいますが、ある日の夏、金谷駅方面から「コツコツ、コツコツ」という軍靴の音が近づいてきました。段々大きくなって家の前まで来たので、私は、飛び起きようとしたところ、そのまま靴の音は通り過ぎていきました。「フウ～」とため息をすると、同じ部屋に寝ていた家族みんなが深い息を吐きました。みんな私と同じように気にして目を覚ましていたのです。

毎日、そうした日々が続きました。そして、遂に帰って来ませんでした。

戦後、70年程経った平成10年代中頃、アメリカで「近所の人たちが寄せ書きした兄の日章旗」が見つかったと政府援護局から写真が送られてきました。日章旗の帰りを待ち望んでいたのですが、持ち主は、所持していた兵士の孫に当たる方で、「競売に掛けたい」との事でした。政府援護局の方は「金銭的な取引は望まない」という事でしたので、あきらめています。

代筆者一鈴木 榮

この文章は、日章旗が見つかった時、妹さんの自宅で私が伺った話を思い出して書き留めたものです。藤本春江さんは、平成の終わり頃亡くなり、娘さんは嫁ぎ、生家と土地は他人に渡っています。

死ぬまで帰ってくると信じていた戦没者の母 菊川市遺族会 鈴木榮

私は、昭和13年生まれですが、父の弟が海軍にいました。

私の記憶にはありませんが、家族全員で神奈川県横須賀基地に面会に行った時の写真があります。幼児の私が水兵服を着て、水兵服の叔父さんにダッコされている写真です。それを見ているとなぜか記憶にあるような気がして来ます。

公報によると昭和19年9月、西カロリン諸島ペリリュー島で玉砕したと、戦後白木の箱が送られて来ました。当時、27歳 独身でした。

その叔父が使っていたと言う座卓が畳の部屋にあり、子どもの頃、引き出しを開けて中の物で遊んでいると、普段は優しい祖母（戦没者の母）が、「英司（戦没者）が帰ってきて悲しむから触ってはだめ」と厳しい表情で怒られまし

た。

もう、立派な墓も建っているのに、まだ、帰ってくると信じているその母親の姿に子供心にも感じるものがありました。

私も、子も、孫も、機会ある毎に墓参りをして、戦没者の墓から順に拝んでいます。

語り継ぐ戦争の記憶

菊川市遺族会 寺本達良

その日、昭和20年8月15日、青いというよりはすべてが白く見えるほどの快晴、だから8月15日の景色は、光り輝く白、まぶしさとにじみでる涙と頭の芯まで痛くなるような白。阿久悠さんの小説「瀬戸内少年野球団」で主人公の少年が書いた詩の一節にそうあります。

亡き人の面影と苦楽の涙とほろにがい忘れ物と戦後77年。水に映った空の青より淡い記憶からあの白を紡ぐ夏であります。

私の父は昭和20年8月28日シベリアに抑留中に栄養失調で亡くなりました。当時34歳でした。父の遺骨や遺品は何もありませんでした。

父との最後の思い出は、出征の日のこと、出征を見送ろうと家族で岐阜駅まで行くと遠くのホームに父の姿がありました。そして、私達を見た同僚兵士が手前の方に出してくれました。その時に目に入ったのは、父が提げていた竹筒の水筒でした。はっきりと覚えています。これでは戦争には勝てないと思いました。

そして終戦後、父のいない生活は母と共に大変でした。私が高校生になると、一家の長として地域の会合などに参加することになりましたが、周りは大人ばかりで相手にしてもらえませんでした。中には、遺族年金を沢山もらえていいね、という人までいて、父のいない悔しさを覚えました。この時、父の存在は貴重だと思いました。

この様に戦争は、本人はもちろん家族も皆辛い思いをするし、残る人は惨めな思いをする。絶対にやってはなりません。

しかし今、露軍とウクライナが長期戦に入りました。早い終結を願う一人です。

戦争は絶対にやってはなりません。

77年前の出来事を私は悲劇と呼びます。二度と同じ失敗を繰り返してはなりません。あの戦争に至った日本の誤りを正しく後々の世代に伝えていくことこそが残された私たちの努めなんです。

77年前に終わった戦争。時の流れの中で、色あせる戦禍の記憶を語り終わりといたします。

戦争はダメだ誰もが明るい家庭を

菊川市遺族会 海野昌久

今年も戦争が終結し76回目の終戦記念日8月15日がやってくる。

女手一つで私を育ててくれた母の苦労話、戦地の父からの軍事検閲を受けた手紙3通、21通のハガキ、軍隊写真、死亡認定理由書等、残された文書から戦争の残酷さと母の苦労が改めて見てとれます。

「結婚と召集令状」

母未代は呉服商橋本屋の第一番頭海野俊司とお見合いで昭和16年10月8日結婚、父は結婚して1年にもならない17年7月16日徴用され名古屋の大同製鋼に入社。私は昭和18年4月16日に生まれる。

母が心配していた召集令状赤紙が8月16日にくる。静岡中部第三部隊に入隊する。

第三部隊は9月1日華北に出発。戦士として9月19日北支派遣泉第五三一六部隊鈴木（教）に配属される。この召集令状により、母一人子一人の父のいない厳しい生活が始まりました。

昭和19年、私が生まれて1年8カ月目の12月東南海地震があり、母は怖くてとても歩く事が出来ず、私を抱いて這って表に出たという怖い体験もしている。

空襲も何回もあり、昌久を抱いて防空壕に逃げた、怖くて、震えて家の中にいたという話を聞いている。母一人で子供を育てる、父のいない生活は大変であったと思います。

「父と母の連絡」

戦地の父と母は、北支にいた父が昭和18年9月から戦地フィリピンへ出航した19年7月の間は、軍事検閲を受けた郵便ハガキ、手紙により、お互いの近況を連絡しあっていたようです。戦時中の夫婦生活がほんのわずかの間しか一緒に生活が出来なかった事は不幸であったと思う。

北支へ派遣後、北支派遣泉第五三一六部隊鈴木（教）として11通、北支派遣泉第五三〇九部隊永井隊として5通、北支派遣泉第五三一六部隊齊藤隊として3通、北支派遣泉第五三二〇部隊小野隊として2通の21通軍事ハガキがきている。父と母は軍事検閲を受けたハガキと手紙のやり取りで、私の成長を生きがいに厳しい兵役を務めたことが分かる。

北支も広く地区により所属部隊が違い、短い期間に前記4部隊を回って一人前の軍人になったと思われます。

父は、極寒の北支で兵役と兵隊になる為の大変厳しい特訓を受けたと思われます。

北支は10月頃になると氷点下30度と寒く、大変苦勞した父の苦しさが手紙から分かる。

軍事郵便を読むと私の成長をいつも心配し、順調に育っているかとか写真を送ってくれと。

「父より昭和18年末に一人前の兵隊になり戦場に派遣かと手紙」

昭和18年もあと4、5日となり正月の準備をしていると思うが北支の軍隊でも餅つきをしている。自分は検閲もようやく終わりやっと一人前の兵隊になったが、今戦地も戦時下でなかなか多忙にて新しい正月もこの北支で迎える事ができるかわからない。年があけると何処かへ行くかもしれないと承知しておいて欲しい。上官より煙草を賜ったが、自分は吸わないから親父、近所の人に一本ずつでも良いからやってくれ、自分は久しくお菓子を食べていないからあったら送ってくれ、そのまま菓子では送れないから用品とでも書いて送ってといじらしい言葉である。

戦争体験者から一人前の兵士になる為にケツバット等で殴られ鍛えられたと言う話を聞くと、親父も大変な苦しみを味わったと思う。今から戦場に向かうと思う父の本当の気持ちはどんな思いだったのだろうと戦争の恐ろしさを想う。

昭和18年は厳しい兵役と訓練を受け一人前の軍人になったが戦地への移動はなかった。

「昭和19年新春」

19年新春は北支で迎える。氷点下30度と非常に寒い、誰も日本では経験の無い寒さに防寒服で班内の戦友と記念撮影、今年は戦地への移動を誰もが覚悟していた事と思います。

父は写真の裏面に戦友の名前を書いて家に送って来ました。

「昭和19年7月戦闘に死を覚悟し参加、昌久を頼むと最後の手紙がくる。」

蒙古にきて3か月元気一杯警備に奮闘、今が一番暑い時、北支はこれから日増しに涼しくなると、戦地は今討伐作戦に忙しい日が続いている。戦況は厳しく今や勝つか負けるかの重大危機、小生も日本男子と生まれこの聖戦に参加できる事は軍人本懐とする所であると書いている。軍人になった気持ちを言い、

留守中は家の事は全部お前に頼む。昌久は丈夫に大きく育ててくれ、最後にお前たちの幸福を異郷の地より祈る。当分の間便りをされても今までの隊名では着かないから出さないでくれ、又俺も任地へ着いて手紙を出せるようなら度々出す故それからお前たちもどんどん送ってくれ。でも任地へ着いても出せないと思う。お前もくれぐれ身体に注意して心配せず元気に暮らしてくれと書かれている。

この手紙は死を覚悟した手紙と思われます。

「手紙発出後激戦地フィリピンに向け軍艦玉津丸で出航」

昭和 19 年 8 月 泉第五三一六部隊鈴木(教)はフィリピンに向け軍艦玉津丸で出航、

8 月 19 日午前 4 時 20 分バシー海峡で米軍の魚雷攻撃で撃沈死亡する。

父より 19 年 7 月 11 日付の小荷物風呂敷包みが来ていることから着いた時は既に船の中か。その戦死を母は何も知らされず、手紙が途絶えても何処かで生きていたものと思っていました。

翌 20 年 8 月 15 日に終戦を迎えても、何の連絡も無くその気持ちは変わりませんでした。

昭和 22 年 4 月 2 日に戦死公報が来て、その死亡を初めて知り 24 日に遺骨を掛川の天然寺に私昌久を連れ受け取りに行っている。魚雷による死亡の為、遺骨は無く白紙一枚と金 285 円(現在の消費者物価指数換算で約 4,332 円位)で、その時の母の悔しかったとのメモに、無念さが伝わってくる。

当時葬式は学校、お寺、自宅等で実施していましたが、4 月 25 日自宅葬として行いました。

「苦勞した母の子育て」

母は当時父の実家近くの南山で生活していましたが、メモに親子家無し主人無しで苦勞すると書いている。肩身が狭い思い昌久にも気の毒なため親子二人生家(菊川)の脇屋に住まわせてもらう事にして実家に戻る。仕事も無く食料も無い、その為静岡に闇米を肌着の中に入れて売りに行くも警察の取り締まりが厳しく、見つかり米を捨て逃げたとかして長く出来ず、土方仕事でトロッコ運びを男の人と同じようになって働くも身体がもたず大変な苦勞をした。小間物の行商をし、その後、父が呉服販売橋本屋の第一番頭をしていたため雇ってもらい、呉服の行商をして生計を立てた。

昭和 24 年母の姉、中村りきの主人が病死、姉も長男一人の母子家庭になり、姉の家に同居させてもらう事にした。小さなお菓子と雑貨を商う坂上屋を開店。

地区で商店は一軒の為繁盛した。また姉も橋本屋に使ってもらい二人で行商を始め自転車で菊川地内を回った。一日自転車で回るとは大変な仕事であった。姉妹で苦勞して商店と行商により2人の子供を育てた。私が昭和33年中学卒業時、息子達二人が大きくなり、いつまでも一緒に同居する事も出来ないという事で別居することにした。姉は坂上屋を止め、母は現在地に家を新築しお菓子や雑貨を商う“えびすや”を開店し生活を始めた。家の前に旭テック南工場が出来、高度成長時代に向かう中、昼食時母がつくるインスタントラーメン、おでんが工員皆様の食堂がわりにもなり昼食時は大変繁盛し、母はおばちゃん、おばちゃんと呼ばれ可愛がられた。地域の人にもお世話になり繁盛した。82歳の生涯を終えた時、工員の一人が母の死を悼み寄せ文を書いてくださるなど、母は女手一つで私を育て、苦勞の中孫にも恵まれ、晩年は幸せな人生を送ったと思います。母の苦勞に心から感謝をしたい。

「父が生きていたら」

戦争が憎らしい。絶対戦争はダメ

自分が生まれた時には、父は徴用され名古屋の大同製鋼に入社していて何も知らない。父も自分を何日見たのだろうかと思う。戦争がなければ兄弟もあったかもしれない。残された父の写真を見ると父と母は結婚後東京の親戚の家に遊びに行っている。又粋な帽子を被って、軍鶏を手に持った写真等多くの写真が保存されている。

この様な事を思うと、戦争が無ければ父、母、私も違った人生を歩いていたと思います。

戦争が憎らしい。絶対戦争はダメ

今後この様な誰も不幸にする戦争の無い明るい日々が送れる国にして頂きたいと思います。

父のこと 故戸塚昇（昭和62年記す） 菊川市遺族会 戸塚宏一
故 戸塚昇

| | | |
|-------|--------|-------------------------------------|
| 大正10年 | 6月21日 | 小笠原郡笠原村山崎（現袋井市）に生まれる |
| 昭和16年 | 3月 | 浜松師範学校を卒業 |
| 昭和17年 | 4月まで | 榛原郡萩間村西萩間小学校に勤務 |
| 昭和17年 | 4月 | 静岡聯隊（中部第三部隊）に入隊 |
| 昭和17年 | 11月26日 | 中部支那湖北省信陽に到着警備・演習・ 作戦参加・補充兵教育に従事 |

昭和 19 年 5 月 湘桂作戦に参加

昭和 19 年 8 月 11 日 午前 10 時 30 分 湖南省来陽県太平墟北方一キロ
高地に於いて戦死 享年 22 歳

私は父を知らない。母の腹の中にいる時に出征してしまっていて、私が 1 歳 2 ヶ月の時に戦死してしまっているからである。父も自分も、写真でしかお互いを知らない。あと 4 年で、父の生きた年数の倍の年月を生きることになる。果たして、22 年しか生きられなかった父の過ごした人生の倍の内容の人生を、自分が持っているだろうか。父の写真を見る度に反問している。父というものの存在が、どのようなものか実感が無い。自分の子供達に、父親としてどのように接して良いのだろうか、疑問が常に付きまとう。

自分が 30 歳代の中頃、父の遺した歌が、靖国神社の発行した戦没者の遺稿集に採用された。

- ・初めての父となりたる喜びはその面ざしを想ひてやまず
- ・吾子の泣く声に目覚むれば戦友の寝息かすかに暗に流るる
- ・初めての吾子の笑顔を我知らず千里の涯に今日も銃とる

この歌が、自分に父の存在を実感させてくれた。ただ、この歌を詠む度に、涙が止まらなくて困る。

昨年 5 月、天理教から曹洞宗に改宗した時に、父の五十回忌を行い、父の遺稿集を母が発行した。その中から

- ・海隔つ二つの国で父となり母となりたる喜び思ふ
- ・額際我に似たりと言はるれば鏡い出して眺見るのみ
- ・日に月に我に似てくる便りある吾子の面ざしあれこれ想う
- ・今頃は吾子と添寝の夢なるか夜半過ぎし戦野虫の声みつ
- ・いとけなき吾子も明くれば二つなる父と呼ばれむ日を待ちつつ
- ・如何ならむ見目形する吾子なると気負ひてあくる手はおののきつ
- ・我を見て笑むにあらねど我を見て笑む心地して時ぞ忘るる
- ・うつつなに夢路に吾子と逢ひぬれば片言ひて我にすがりぬ
- ・吾を見れば背中に隠れ顔のみをい出してはにかむ時ぞ待ちみる
- ・吾を見て父と知るまじ吾を見て父と言ふまじ我は知れども

父の夢を見ることはなかった自分だが、初めて父の夢を見た。それは父が帰ってきた夢であった。

父の辞世

- ・我一人の感情のみにこだはれず国を賭しての戦なりせば

(平成 25 年 3 月発行の「文苑きくがわ」より)

父の記憶

菊川市遺族会 赤堀三千男

父との記憶は、自転車に乗せてもらい、あちこち連れて行ってもらったこと。数少ない思い出です。私が 6 歳の時に、赤紙を持った人が家に来ました。父は当時 35 歳でした。過去に兵役に従事して除隊した身でしたので、「自分はもう年だから」と言っていました。結局、静岡の陸軍歩兵第一一八連隊へ行くことになりました。

ある日、静岡の父の所へ面会に行きましたが、子どもだった私は騒いでいたので会うことができませんでした。父とはそれが最後でした。父は昭和 19 年 7 月 18 日にマリアナ諸島で亡くなりました。父が亡くなったと聞いて、当時の川上村を挙げてお葬式をしてくれました。同じように村でお葬式をした近所の方は、葬式をした後に戻ってきて、「お父さんに世話になった」と家まで報告に来てくれました。「もしかしたら父も戻ってきてくれるのでは」と思いましたが、父は戻っては来ませんでした。

母はその後、一人で私たち兄妹を育ててくれました。結婚してから 11 年しか夫婦で過ごしていません。気の毒だと思います。村の人たちが助けてくれましたが、食べるものに困らない人を見て、悔しい思いもしました。

戦後は靖国神社や静岡の護国神社へお参りに行きました。サイパン島への慰問に行く機会もあり、私は何度か現地へ向かいましたが、母は都合が合わず、行くことは叶いませんでした。

現地の人のお話では、グアムは血の海だったと言います。今では観光地になっていますが、洞窟の中に野戦病院が築かれていたり、コンクリートに大きな穴が開いているのを見て、戦地だったことを実感しました。

(令和 4 年 7 月発行の「広報菊川」より)

三島の陸軍基地で面会

菊川市遺族会 樽林努

小さい頃に、家族みんなで菊川駅まで行って、そこから父が居た三島の陸軍基地に行ったのを覚えています。訓練している父に向かって手を振りましたが、父は訓練中なので反応がありませんでした。その後父は、満州に配属され、昭和 18 年 8 月 23 日にフィリピンへと送られ、昭和 20 年 1 月 16 日に戦死したと聞きました。

終戦から 50 年以上経って、生還した戦友会の方から現地の戦闘の様子を聞

くことができました。当時を知る人から聞いた惨状は、50年以上が過ぎてもお、昨日のこのように生々しいものでした。こうした話を聞き、改めて、戦争は二度と起こらないようにしてもらいたいと思います。

(令和4年7月発行の「広報菊川」より)

死んだとも思えない父

菊川市遺族会 内田昌義

私の父は、昭和20年にビルマで戦死しました。家族の元に訃報と一緒に箱が送られてきましたが、遺骨ではなく、切った写真が入っただけでした。遺骨も何もないので、まだ死んだとも思えません。

終戦の年、私は六郷小学校の四年生でした。当時は学校に兵隊が駐留したので、分散授業と言って、極楽寺で勉強をしていました。四年生の時はほとんど学校へ行けませんでした。当時は油がなかったので、茶の実を拾い、絞って油を取ったり、学校の持っている山の松の木に傷をつけて、松ヤニを取ったりして油にしていました。

学校には「奉安殿」という社やしろがあって、そこへ最敬礼してから、教室に向かいました。教室に入ると回れ右をして、御真影ごしんえいにお辞儀をして、教育勅語を読みました。子どもも戦争の教育を受けていたんだと思います。

(令和4年7月発行の「広報菊川」より)

戦地から届いた遺書

菊川市遺族会 有海辰男

[令和4年7月発行「広報菊川」の掲載記事]

西方にしかたの有海辰男さんのお宅に、一冊のメモ帳が大切に残されています。辰男さんの叔祖父にあたる有海豊さんが戦地から送ったものです。

始めの数ページには、分隊長としての心構えなどが書かれていますが、途中からは白紙のままです。めくっていくと、真ん中の1ページに鉛筆で「遺書」が書かれています。「最後の花を咲かせる時が参りました」「毛頭生還を期せず只及ぶ限り力を轟かして頑張ります」と戦地に赴く自分を鼓舞する言葉が並び、最後は「故郷の皆様 永久にサヨウナラ」と結ばれています。

豊さんは昭和20年5月18日に、沖縄で26歳の若さで戦死しています。この遺書を書いているとき、どんな気持ちだったのでしょうか。

軍人として短い一生

菊川市遺族会 堀井龍雄

生まれは満州、育ちは遠州、内田の里は皆良い衆、今年で成人式4回半となりました。人それぞれ、いろんな事を背負って生活しています。よく云われる波乱万丈の世の中を渡っていると思います。父の顔は写真でしか知りません。まして声も分かりません。

菊川市壮年部の発足当時は、80名以上の会員でした。自治会内で数人、同級生内で数人、同じ遺児の立場となった朋友がおります。

父は大正14年に豊橋の騎兵隊に入隊して昭和7年に満州へ配属となりました。

休暇で帰郷した時母との縁談が決まり、満州のハイラルに住み、そこで私は長男として誕生しました。その後、戦火も激しくなり、母は妹を身籠った身体で引揚げ船で帰国したと聞いております。この引揚げ船が半年遅れたら戦争孤児の問題にかかわったかも知れないと、帰国後に知らされたそうです。

父は各地の戦闘に参加し、昭和16年7月、小隊長として突撃し、コーリャン畑で敵弾が左胸を貫通して戦死に至りました。その時、懐中時計はコチコチと動いていたと聞いております。軍人として、38歳の短い一生でした。

祖父が、松浦石工さんを頼んで昭和17年に建立したお墓も、戦後50年を過ぎてセメントの目地も痛んだので、平成5年に青木石材店さんに改修工事をお願いして再建しました。平成6年に父の五十回忌の法要が済んで安心したのか、平成8年3月に79歳で母が他界しました。家族と相談の上、母は父のお墓に納めました。きっと天国から私達のことを見守っていてくれていると思います。

両親からもらった命を大切に、人生百年時代を、まず目標は「米寿かな」を目指して頑張りたいと思います。

人 生

掛川市遺族会 弓桁かね

父は昭和18年5月16日ニューブリテン島で戦病死、私が2歳の時でした。

父の面会には祖父、母、叔父2人と私とで行きました。父の前で私が初めて歩いて父がすごく喜んだと母から聞きました。2回面会に行きました。

そして2度目の父は、戦争から帰って来てオート三輪に乗れたので農協に勤めました。昭和28年8月死亡、妹が2歳の時でした。

母が若い二人の子供を連れて「どうすればいい？」と母の実家へ泣いて来た時は、母の両親はかける言葉もなかったと聞いています。でも嫁いだ先の両親、家族の事を考えると出て行く事も出来ず家に戻りました。そして末の弟と一緒に家を守ってくれました。3人の子供にも恵まれました。

母は自分の苦勞を私たちに話したことはありません。苦勞を苦勞とも思わずに明るく強く生きて人でした。「あんたのお母さんは苦勞した人だよ」と近所のおばさんに聞きました。百歳のお祝を大勢の人に祝ってもらって、元気にデイサービスに行っていました。1年後に亡くなりました。子供、孫、曾孫にかこまれて後には幸せな人生だったと思います。主人と私も何度かお花見や温泉に連れて行ってあげました。車に乗るのが大好きな母でしたからとても喜んでいました。

現在の父は兄の子供だから粗末にできないと言っていたと母から聞きました。母にはもっと二人の父の事、母の人生を聞いておけばよかったと思います。

何もない時代、現在の父は大変だったと思いますが、私達を学校へ出し、お正月には新しい服を買ってくれました。父には感謝感謝です。

初めての父の私、2度目の父の妹、今の父に3人の子供と、時々父の所へ行っては食事をして恩返しをしている所です。 終

平和を祈る

掛川市遺族会 山崎和子

私は昭和19年2月生まれ。ちょうど沖繩戦の真っ最中。はじめての子を父辰平は抱いてくれ、名前を「和子」とつけた。あの頃は平和を祈って「和子」の名前が多く、私の小学校のクラスにも3人はいたからだ。

父は、沖繩群島座間味島へ出陣。昭和20年3月26日戦死。

留守を守る母だけは産まれたばかりの私を育て食べていかねばならず、神明町の借家に住み近くの病人の世話をしたとか。その病人が結核だったため母も結核になり、天竜荘に入院、昭和22年12月7日死去。現在ならツ反（ツベルクリン反応）、BCGとかあって結核で死ぬ人は少ないが。そのため私も小学校時代はツ反で二重発赤になり保健所へ呼ばれた。今は医学が進みありがたい世となった。

両親を亡くした私は母の実家で育てられた。叔父、叔母は新婚早々。祖母が早く亡くなり後妻に来たばあちゃんが怖い人で、言うことを聞かないと裏の松の木へしばるとか、おきゅうをすえるとか、顔もきつく、祖父も早く亡くなり後妻の婆さんの天下だった。

それで小学校入学時、今度は父の実家へやられた。父の実家は叔父が大工で一人で働いているだけ。祖母以下子供六人。そこへ私が加わり暮らしが大変。

私の両親の葬儀が父の実家で行われ、ちょうど近所の助産婦のおばちゃんが来ていて、私を見てこんなに小さいのに両親がいないなんてと思って「わしら

ん家へ来るかね」と言ってくれた。

次の日「おしん」みたいに小さい風呂敷包み一つを持ち一人っきりでおばちゃんの家に来たとか。

おばちゃんは東京で若い頃看護婦をしていて富士のお寺へお嫁に行き、息子さんが二人出来た時、住職が亡くなってしまい、掛川の田舎へ子供を連れて帰り助産婦を開業。ちょうど戦争が終わってあちこちでお産する人が増えて大繁盛。

私も女性でもおばちゃんみたいに職業を持ちたいと思い、高校卒業後県立保育専門学校へ通わせて頂く。以後ずっと保育士をやり、園長までやらせて頂くが、おばちゃんが弱くなり、仕事をやめおばちゃんの介護、99歳の長寿を全うされた。

私も人生最初は大変な暮らしだったが、後半は良い方々に巡り合い本当に感謝している。

今もウクライナの人達の悲惨な暮らしが起きている、どうか戦争はやめて!! 平和を祈っています!!

戦争の悲惨さを知り平和を願う

掛川市遺族会 平出芳枝

父は昭和20年6月17日沖縄で戦死しました。「近衛兵だで東京に居るとばっかり思っていたに」と祖母からよく聞かされました。白木の箱には遺骨は無く、白い紙に名前が書いてあり小石が一つ入っていました。3歳の私の記憶です。遺骨、遺品のない父の死を母、祖父母、妹弟はどんな気持ちで受け止めたのでしょうか。当時は名誉の戦死と言われましたが、名誉の死ではありません。父のいない寂しさからぬけだす努力を、祖父母に支えられ、母、妹と3人でした。

6月23日沖縄玉砕の日、日本遺族会の主催で慰霊祭と平和行進が挙行されます。死を覚悟した父の気持ちを知りたくて、35歳から毎年参加しています(40回)。沖縄で父を亡くした遺児が全国から集まります。総理大臣も出席されて、毎年沖縄の事は常に思い考えていると述べて下さいますが、基地、辺野古問題など、沖縄県民を早く安心させて下さいと祈ります。

戦争当時女学生だった友人にどんな生活をしたのか教えて頂きました。

教科書を持たずに防災頭巾をかぶり、学校へ行っていろいろな作業し勉強はしません。食糧がなく、お弁当が無い人は外で過ごしていました。

ある方は、栄養失調で体調が悪い時、お父さんの出征中にお前を死なす訳に

は出来ない、力のつくようにと玉子、おかゆを用意して看病してくれた、お陰で今生きています。本当に強く賢い母でした。

「勝つまでは」と沢山の我慢もして過ごしました。今言える事は、近所の人達と助け合い暮らしたことは忘れていませんとも、語って下さいました。

時代も令和となり、戦後生れの多くなった今、戦争を日本の歴史としか知らない人々に、戦争の悲惨さ、怖さ、恐ろしさを伝える機会があれば参加させていただきます。

掛川市では、小学六年生に平和学習に使う「掛川市の平和と未来」、静岡県女性教職員の会小学支部戦争体験を語り継ぐ会「戦争を語る」の2冊が本屋さんにあります。参考になればと思います。

「従軍記録とその思い出」より抜粋 掛川市遺族会 宇田幹男
[駐蒙軍司令部へ転属]

昭和20年2月再び駐蒙軍司令部参謀部へ通信係将校として転任する。自分には余りにも過ぎた部隊と思ったが命令に従って転任した。仕事は通信、道路、給水と防空だった。この仕事は蒙疆^{もうきょう}全域（現中国内モンゴル自治区中央部及び山西省北部の地域）に及ぶもので大変な重責だった。幸いベテランの吉野軍属が補佐役にいたので、彼に教わりながら仕事についたが、最も気をつかったのは、矢野参謀長から命令書草案の認印を貰うことで、これはなかなか容易なことではなかった。参謀長の話では一線にいる者はそれなりに鍛えられているが、参謀部ではこういう時に使命感を植えつけるのだといわれた。成る程と思った。

防空面では防空演習を一度だけやり、飛行機で包頭^{ぱおとう}まで飛んで上空から視察した。初めての飛行であり途中大きなエアポケットにあい怖かった。又20年8月に入ってからソ連軍が参戦して張家口の上空に飛来し、機銃掃射や空爆を受け露店広場の現地人に多くの犠牲者を出した。生々しい現場に側車をとばしそれなりに指示した。

終戦になってからは約20km離れた丸一陣地の警備部隊からの連絡で、佐藤参謀と兵一個分隊で現地にかけつけた。驚いたことに、ソ連軍の約50輻の機甲部隊が陣地の前面に戦車を並べて盛んに戦車砲を打ち込んでいた。山の稜線にどうにか登って見たが足許に落ちてくる砲弾が怖かった。この時は降伏のため白旗を掲げた尖兵隊を出したが銃撃されて交渉は出来なかったので、やむなく引き上げ、後に方面隊からの援護で飛行機からビラを撒いて連絡がとれた。

しかし、ソ連軍の要求は全く無茶で「直ちに張家口に突入する。部隊を集結して武装解除に応じよ」とのことで、根本軍司令官は満州の二の舞はさせられないと、直ちに約3万人の居留民を撤退させることを指示した。大振りの雨の中、張家口駅に集まって来た者の整理に当たった。まさに阿鼻叫喚の修羅場の惨状だった。無蓋貨車にはみ出しずぶ濡れ、トラックに無理矢理押し込み動き出したがバウンドで転がり落ちる者もいた。しかし鉄道の橋梁が破壊され、工兵隊の救援で列車を進め八達嶺に差しかかった時、トンネル内で窒息する者もあったり、又一方トラック隊は河床路が洪水のために車のエンジンが止まり、徒歩で北京までやっとの思いで逃げ帰った日本人も沢山いたとのことだった。八路軍にも襲われたので可成りの犠牲者が出た。

司令部は最後に張家口の街に火をつけて撤退したが、この時は街のあちこちに火の手が上がっていた。

[北京に逃避行]

ひとまず北京に逃げ帰った居留民や軍属たちは公民館などの建物に入っていたが、現地人や朝鮮兵の暴動に襲われて荷物を取られたり、中には殺される者もあった。

軍の関係者は北京の駐留部隊に収容されたが、約2ヶ月間11月末までは長かった。この間復員業務を担当した。まんじりしない不安の日々を送り内地送還に努力をつづけた。

[出港準備]

大連港に向けて移動し、粗末な収容施設の中で数日すごして乗船の日を待った。出航の前夜予想しなかった出来事が起こった。体育館に先に収容されていた軍属たちが軍の幹部たちを連れ込んで抗議をしていた。その内容は、「軍人が先に帰還することは許せない」と云うものであり凄惨な剣幕だった。中川輸送司令官（参謀長）木村副官ら上級幹部数名が話し合いに加わっていたが、解決の目途がつかないので呼び出された。恐ろしい剣幕で襲いかかった。この場へ自分を引き出した軍属側の親方が、かつての部下だった吉野軍属であった。体育館の壇上には沢山の遺骨の箱が並べられてあり軍属は今にも組みつきそうな感じであった。

席に着いた瞬間、吉野軍属にいきなり嚇かされめんくらった。とてもかつての部下ではない。何の役にも立てないと思ったが、幸い夜が更けてしらじら明るくなり出航の時間も迫り、遂に納得してくれた。あれ程抵抗していた彼が少しずつ声をやわらげて最後は見送ってくれた。結局GHQの命令のようで日本

の軍部はどうにもならないことだった。

[乗 船]

慌ただしく僅かな荷物を持って港に向かったが警備に当たっていた米兵に時計をとりあげられたり、荷物検査所で洋服等目ぼしい物をとられてしまい哀れなものだった。敗戦兵の惨めさである。

こうして乗船したが何と米軍上陸用舟艇（L S T）で炊事施設や便所が僅かしかなく、米飯は1日に1度で大変に難儀をした。船上での生活は約1週間の航海で、やがて上陸港の長崎に近づき南風岬は え み さ きに上陸した。戦争の痛手を受けて来ただけに喜びは一人ひとしおであった。生還の実感をかみしめた。敗戦のみじめさが日を追って強くなり先のことは神にまかせた。

[上 陸]

張家口を出てから約4ヶ月の脱出の旅で苦しんだが、やっとの思いで内地に着くことができた。日本は美しい。もう2度と戦場に引き出されることがないと思えば安心して気持ちがほぐれた。国破れて山河あり、心の中でつぶやいた。

上陸して早速消毒である。荷物は別室に運ばれたが身体は上半身が裸になり噴霧器で消毒液をかけられた。12月半ばの気温は冷たかったが我慢した。既に夕日が西の海にかたむいている。ここから宿舎に当てられる少年航空隊まで約4 kmの坂道を歩いた。兵営や兵舎の中は殺風景だがやはり日本の兵舎だ。疲れきった体はよく眠りについた。原爆の被害は目につかなかった。

平成 26 年 8 月 15 日 追悼のことば

掛川市遺族会 松永猛

私の父は昭和 19 年 2 月に、舞鶴海軍朝倉隊に入隊し、直ちにフィリッピンフィリッピンのネグロス島に向いました。戦争末期のフィリッピン戦は、レイテ、セブそして第 3 の激戦地としてネグロス島が挙げられています。私の父はその当時自動車の運転が出来たので、工兵隊に配属されたものと思います。ラバウル、ガダルカナル、サイパン戦で敗北し、フィリッピンまで追いつめられた日本軍は航空機、船、兵器も残り少なく食料の補給も途絶えて、戦死者よりも餓死者の方が多し所も有ったようです。最後は私の父も昭和 20 年 9 月に野戦病院で亡くなったそうです。

父は 8 人兄弟の長男で家には弟妹 4 人がおり、自分の子供も 2 人が残されました。長男 5 歳、二男の私は 2 歳でした。長男は体が弱く、不幸にもはしかに罹り、更に高熱のために髄膜炎となり、父と同じ昭和 20 年 4 月に亡くなりました。私も兄と同じ病気になりましたが、運良く助かりました。兄は来年は小

学校に入学できると楽しみにしていたそうです。母はいっぺんに夫と長男を亡くしました。どんなに悲しかった事でしょう。しかし、家の者にはつらい顔を見せたことはありませんでした。幸い祖父母が元気で私達を陰ひなたなく助けてくれたので、道もそれずに今日まで元気にやって来れたと思います。母は夫と長男の分まで長生きする事ができ、平成20年9月まで93歳と天寿を全うできました。私も父と兄の分まで、母に恩返しをしたいと精一杯頑張りました。私が今日あるのも肉親や親戚の方々や近所の皆様のお陰と感謝致しております。

今こうして幸せな生活を送られるのも、我が身を顧みず祖国の為、同胞の為に頑張ってくれた多くの御英霊のお陰であります。

皆様の気持ちを介し二度とあのような悲惨な戦争を起こしてはならないと思いを新たに、平和な世界を築くよう努力することを、お誓い申し上げ追悼のことばと致します。

どうぞ安らかに眠りください。

平成25年8月15日 遺児の言葉

掛川市遺族会 名倉武雄

今年もまた暑い夏がやって来ました。

私の母は昨年8月、95歳で生涯を終え、34歳で戦死した父の元へ旅立ちました。

私が生まれた昭和16年10月、父は太平洋を「多分何も知らされないままに」南下、蒸し暑い船底で、海軍機関兵として黙々と働いていました。

その時母は24歳で、その後、一度だけ神奈川県横須賀へ寄港するので、家族で面会に来る様に連絡があり、当時3歳の姉と、1歳の私は母や祖母に連れられ、父に会いに行った事になっていますが、全く覚えはありません。

母は95年の生涯の内、夫婦で暮らせたのはたった3～4年、70年以上をお国の為、天皇陛下の為、家族の為に戦争未亡人となり、失った事になります。

父は、終戦の時には生存していて、その後オーストラリア軍の捕虜となり、赤道直下のブーゲンビル島の野戦病院で、赤痢・マラリア等の病気にかかり、死亡した事になっていますが、「捕虜は現地の兵隊の30%のカロリー分しか食糧が与えられていなかった」との事実から、体力も弱り病死したものと思われます。

私は10年前、日本遺族会のお計らいにより、父の眠る戦地を訪ね、どんな所か確認する事が出来ました。

南方のジャングル地帯は、内陸部に病院を作るのは大変だったので、ほとんどは海岸近くに建てられ、当然衛生状態も悪かった様です。

記録によりますと、父の死亡したのは昭和 21 年 1 月、町内の戦地から帰られた浅岡さんから、父の死亡の知らせを受けたのが 2 月、横須賀町の発行した「広報」は翌年昭和 22 年 2 月、静岡県慰霊祭は 3 月に静岡市の臨濟寺で行われ、母は白木の箱を持ち帰り、町の合同葬は 3 月に執り行われました。

実に、死亡してから 1 年 2 ヶ月後の葬儀でした。

開戦間もない頃の戦死者は地元の英雄として、多くの人達にもてはやされ、これから戦地へ行く人の励ましともなっていました。敗戦後の実態は悲惨なものでした。

今回の太平洋戦争だけで、それも僅か 3 年 9 カ月の間に戦没者は 310 万人、うち南方での死者は 100 万人、特に戦争末期に死者が激増した、と云われております。

私達は太平洋戦争の遺児として生きて来ました。その中でも若い方の私が間もなく 72 歳です。日本は戦争を知らない人が殆どとなり、戦争の酷さや悲惨さも忘れられようとしています。今生きている私達は、先ず一人ひとりが、自分の考え方をしっかり持って、人を愛し、地域・国家を守る使命があると思います。

最後に、私達の為に尊い命を落とされた英霊の方々が、安らかにお眠り下さる事をお祈り申し上げると共に、永遠に戦争の無い、平和な日本を持続させる事をお誓いし、遺児の言葉と致します。

戦地慰霊参拝のときのこと

袋井市遺族会 安間幸甫

平成 15 年 3 月、私は南海のリゾート島サイパンの土を初めて踏みました。父幸夫の戦死の地に、「戦没者遺児によるサイパン諸島慰霊友好親善団」18 人の一員としての慰霊参拝でした。家族と共に平和で豊かな生活を送りながら、この時まで、父親の終焉の場所を詣でることができなかった自分を恥じながら、踏んだサイパンの地でした。

静岡一一八連隊が守備についたチャノンカノヤはサンゴ礁で囲まれ、淡いマリブルーの海が広がる溜息が出るような美しい海岸が広がっていました。ここで想像がつかない程の激しい戦闘があり、おびただしい血が流れた時があったのでした。

この場所で行った訪問団の慰霊祭で「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川、

夢は今も…」と歌うと涙が溢れ止まらなくなりました。「家族やふるさとを思い出しながら最期を迎えたのであろうか」と思うと、全く記憶のない父と気持ちが通じたと思った初めての瞬間の時でした。この歌はこれ以来童謡「ふるさと」ではなく、命の繋がりを感じる私の特別な歌になりました。以下、その時の追悼文です。

『子どもの頃、ふるさとの遠州の海で、このずっと向こうのあなたが眠っているサイパンの地があることを教えられました。

私が生まれて50日目の出征だったそうですね。今、59年ぶりの再会と言って良いのでしょうか。今、あなたの近くに來たことを感じています。「血を分けたただ一人の息子なのに遅かったな！」と言われそうですね。人生の節目であなたの声を聞きたいと思った事がありました。母には言えない苦しい時に、あなたの存在を求めた時がありました。あなたは、今まで声を聞く事の出来ない存在でした。

あなたの最後の想いが感じられることを念じて、今この地に立っています。

…

南海の星を見ながら、…新婚間もない妻のこと、生後間もない初めての子どものこと、そして、あなたの存在の全てをいつも認めてくれていたであろう母親のことなど…、何度も思いを巡らせたことでしょう。今日は、今までできなかった父と息子の話をしたいのです。

最近の家族の話を聞いて下さい。あなたには曾孫になる滉甫の「甫」は、あなたが「はじめ」の意味を以て私に付けた「甫」です。もうすぐ2歳になりますが、あなたの3代目はなかなか回転の良い賢い子です。母は82歳になりました。滉甫と一緒にいる母は、若やいで元気になります。一昨年は交通事故に遭い、その後後遺症で大変弱り心配しましたが、近頃はすっかり元気を取り戻しました。まだまだ、あなたの傍らには行けそうにありませんが、待ってやってください。積もる話が沢山あります。今日は遠州の地酒でゆっくり59年を語り合いましょう。

～平成17年3月6日 サイパン島にて～』

マリアナ諸島といわれるグアム、サイパン、テニアンの各島が米軍に墮ちることは、本土空爆が現実になることを意味しており、本土防衛のために死守すべき防衛線だと考えられていました。

昭和19年7月、兵3万島民1万を共にしたサイパン島の玉砕が発表されました。

この後、B29爆撃機による本土空爆の基地となり、日本全土が空襲の戦火に巻き込まれることになりました。

翌年3月10日の東京大空襲では10万人が、全国では50万人もの民間人が空襲などの犠牲になりました。8月には、テニアン島から出撃したB29による、広島と長崎の惨劇が生じました。

昭和20年8月15日は、心から生きている幸せを実感させた日になったと思います。

惨劇の日を、毎年「戦争の歴史」を考える日にしませんか。戦争で、幸せになった人などいないのですから。

(平成29年3月発刊の「袋井市遺族会戦争体験記」より)

天国へのことづけ

袋井市遺族会 岡本禮子

「おばあちゃん、むこうに行ったらおじいちゃんに報告してね」

お正月に写した総勢16人の家族写真と、出征する時、大切に胸にしまった親子3人のセピア色の写真を、老眼でも見えるようにと大きく伸ばしてそっとお棺に納めました。

戦争という二文字に翻弄された人生だったけど、何の苦しみも感じない安らかな顔で父の待つ天国へと旅立ちました。

晩年は、孫たちに囲まれて穏やかな日々。

少しは親孝行できたかな？

母が亡くなってからは、戦争は絶対触れたくない過去の出来事、自分の胸に封印しました。

早いもので、今年は戦後70年。

テレビ未来遺産「遠い約束 星になったこどもたち」等放映されました。テレビにかじりつき、溢れる涙に自分を重ね、見入りました。

愛する子どもたちに、この苦しみをさせてはいけない。今の平和がいつまでも続きますようにと、重い腰をあげペンを取りました。

母は、満州の保温会社勤務の父と結婚、夢と希望をもって20歳の時海を渡りました。結婚生活3年、充実した日々でした。楽しかった頃の話はよく聞きました。

満州はとても寒い国、家の窓は二重になっていて、部屋の中はオンドルという床暖房で暖かいけど、一歩外に出るとおしっこも鼻水も一瞬にして氷柱になっちゃうんだよ。

ヤンチャーという人力車みたいな乗り物でお使いに出掛けたとか。イー・アール・サン・スーって言って買い物してたのかな？

クーニャンという中国人のお手伝いさんが、あんたをととてもかわいがってくれたんだよ。

そんな幸せも、長くは続かなかった。

父が現地召集され、日毎に戦禍が激しくなり、海城に疎開し、終戦となりました。

勝てば天国、負ければ地獄
出口のない地獄を味わう事となりました。

銀行が封鎖されお金が引き出せなくなりました。生きるためマッチや生活雑貨を売る露店に立ちました。そこは極寒の地、手足はしもやけで腫れあがり、おむつを替える一瞬に仕入れた売り物を奪われた事は、一度や二度ではなかったといいます。

大男のソ連兵が盗んだ訪問着をベルトで締め、サーベルを振り回し、皮靴のまま家に押し入り大声で怒鳴り、手あたり次第物を強奪して行きました。

電気もない真っ暗い中で、飢えと寒さで泣き叫ぶ私の口をふさいで、トイレや押し入れに身を隠し、震っていた時は、生きた心地がしなかったと言います。

過労で倒れ、高熱で身動きができなくなっても医者にも行けず、周りのみんなも自分の事で精一杯、外地ゆえ頼れる親戚もなく途方に暮れました。

やがて、内地への引き揚げが始まりました。隊列を組み、何日も何日も月あかりを頼りに引き揚げ船の港に向けて歩き続けたといいます。

途中、力尽きてぼったり倒れ、身動きができなくなった人たちもいましたが、心の中で手を合わせ、明日は我が身かと不安の中、おむつを入れた風呂敷包み一つを抱え、隊列に必死でついて行きました。

栄養失調で体は衰弱、断髪に身をかえ、命からがら生まれ故郷にたどり着いたのは、21年の6月うっとうしい日でした。

田んぼで仕事をしていた村の人が「おまえ、豊ちゃんか？おーい、豊ちゃんが帰ってきたぞー」転げるように走って実家に知らせに行ってくれました。

この日より、父の生還を念願、満州の戦友を頼りに東奔西走したにも拘らず、厚生省の調査により、牡丹江翔掖河陣地死亡を納得された旨の通告により、戦死決定。私が中学一年の時でした。

戦後10年経てはいるものの、必ず帰ってくると信じて疑わなかった胸中は、やり場のない憤りを覚えました。

その後、中国との国交が回復、中国残留孤児が日本の親を探しにとの連日のテレビに、私も一つ歯車が狂えばこうなっていたであろうと…

小野田寛郎陸軍少尉が、終戦を信じず 30 年近くジャングルに潜んでいたニュースに、もしかしたら父もジャングルで生き延びているんじゃないかと…

生前母は、ポツリと言った事がありました。

「生きて日本の地を踏めた事は奇跡だと」

「あんたが支えて頑張ったこれだと」

私は、満州の事も、戦争の事も、父の顔も知りません。

母がたどった道のりは、氷山の一角。されど、母は強いです。

今日も、仏壇の若い父の写真と、3 倍も父の分を生き抜いた母の写真に、今度こそ天国での幸せを祈りつつ、手を合わせています。

(平成 29 年 3 月発刊の「袋井市遺族会戦争体験記」より)

忠魂碑を歴史的遺産として残す活動の必要性について

袋井市遺族会 兼子春治

[はじめに]

戦後 77 年が経過した。時の流れが戦争体験者の減少と戦争を風化させることはやむを得ないことである。静岡県遺族会が戦争体験記を発刊いただくことは、体験を活字として次世代に残すことで大変意義あることと思う。

さて、各地区には旧村単位で立てた忠魂碑があり戦争の遺物が少ない中で唯一戦争の記憶を今に伝えている。

しかし近年、全国でこの歴史的遺産が壊されようとしている事は誠に残念である。袋井市においても忠魂碑の取り壊しの危機が 3 件あった。平成 3 年から取り壊しの危機にあった浅羽北地区忠魂碑をどうしても残そうと活動してきた。

忠魂碑の危機は全国的・全県的な問題でもあることから、戦争を語り継ぎまた今後忠魂碑を残す運動の一助になればと投稿させていただくこととした。

特に忠魂碑を残すことが出来たのは、英霊の顕彰に加え目的を「忠魂碑を歴史的・文化的遺産として地域の宝として」また「身近な平和教育の教材として」残すこととした事が遺族や遺族会に加え郷土史家・教育関係者・地域づくり関係者・歴史愛好家等幅広く多くの皆様から賛同いただけた要因であり、今後忠魂碑を残す運動に一石を投じたものと思っている。

[忠魂碑について]

忠魂碑は明治以降、西南戦争・日清戦争・日露戦争をはじめとする戦争や事変に出征し戦死された地域出身の兵士を称える記念碑である。

忠魂碑には戦没者本人は元より、残された遺族の悲しみや戦後の大変な苦勞が詰まっている。

忠魂碑の建立者は在郷軍人会・振武会・奉賛会・青年会・村等である。奉賛会の会長は村長になっているものもあることから当時地域と行政が一体となって建立したものと思われる。

忠魂碑は当初教育的な意図をもって小学校の敷地内に建てられたが、戦後GHQは、忠魂碑は国家主義や軍国主義的な意図を有するものと捉え撤去させたり、政教分離の考えから学校敷地から寺院・神社境内へ移転させた。

今、忠魂碑の管理について遺族の高齢化と遺族会の会員減少が問題となっているが、建立者の中に遺族会の名はなく遺族会は受け身の関係で、地域や自治体が戦没者や遺族のために建てたものである事を忘れてはならない。

忠魂碑の管理主体をあいまいにし、今まで行政がこの問題に取り組まなかったことの一つに政教分離を争点に争われた箕面市忠魂碑訴訟の一審での違憲判決が大きく影響していたのではないかと懸念する。また合憲の判決後の対応の鈍さが今の忠魂碑問題に繋がっているのではないかと思われる。

遅ればせながら、終戦後70年余を経過した平成28年度に「国内民間建立慰霊碑移設等事業費補助金交付要綱」を制定され忠魂碑に行政が関与されることとなった。

[忠魂碑の危機]

袋井市においても、近年忠魂碑に関する問題が三件起きた。今回は、その内の一つで保存に関わった体験を紹介し保存活動の一助としたい。

[宇刈地区忠魂碑について]

平成27年3月16日、タジマコーポレーション袋井国際次世代自動車センター落成式に招待を受け出席した。

地元代表として宇刈地区自治会連合会長も出席していた。

「宇刈地区で忠魂碑を撤去し取り壊すという話をお聞きしましたが本当なのか、今年は戦後70年の記念すべき年に当たり戦争の歴史としても大切な記念碑である。是非残してほしい」とお願いしたところ、

「実は地域で話し合ったが、取り壊すことに決定した。明日業者が来て取り壊すことになっている。」との返事であった。

宇刈地区の忠魂碑は2基あり、1基は太平洋戦争の、またもう1基は西南戦

争・日清・日露戦争の戦没者の慰霊碑であり歴史的な観点からも重要なもので、取り壊すのではなく是非残していただきたいとお願いするも、「地域で十分論議した結果であるので取り壊すしかない」とのことであった。

私が油山寺の快光住職に経緯を話し、緊急避難として一時的に仮置きしていただくようお願いし、油山寺に運んでいただくことができないかお願いした。

そして、請負業者の了解をいただいて、取り壊し経費の中で油山寺に運んでいただいた。

宇刈地区では実質的には碑所在地自治会が管理し香華の花は老人クラブがあげていた。戦後70年が経過する中で遺族会も会員の減少や世代交代で慰霊祭出席者も少なく、また経費的にも運営は大変であったので今後について話し合った。

多くの議論があったが、今後維持管理が難しく、また事故があった時の責任の取り方等にも話が及び協議の結果取り壊すことに決定したようだ。油山寺境内の一角に仮置きし、刻字されている内容を書き写した。また、戦没者の経歴等も調査し冊子にまとめた。

宇刈地区の忠魂碑が油山寺に運んであることが分かり、遺族会や奉賛会をはじめ地元の代表者が来て、「貴重なものを残して下さりありがたかった。については村名と同じ宇刈神社に再建したい。」と話があった。

そして一年半が過ぎた平成28年10月1日、宇刈神社に移設され忠魂碑移設記念式典が行われた。当日は奉賛会・遺族会の役員等多くの皆さんが出席された。

今回は、「尊い命を地域の安寧を願い国のために殉じた戦没者の霊が忠魂碑を残すことを乞うように」取壊し前日に私と自治会連合会長を合わせたようで、運命的なものを感じた。

[終わりに]

忠魂碑の保存については「潰す・残すべき」と激しく議論をしてきたが、突き詰めれば問題は忠魂碑の管理責任は誰であるかであった。誰が忠魂碑を管理しなければならないか、忠魂碑による怪我人等が出た場合の責任は何処にあるかであった。

忠魂碑は国のために殉じた方の顕彰碑で、行政と地域で建立したものであり、行政が管理責任を持ち管理は地域（自治会連合会等）でが本来の姿であると思われる。しかし従前、国もまたどこの自治体も箕面市忠魂碑訴訟の影響か「民間で建立した忠魂碑の維持管理は民で行うのが基本」としていた。

前述したように過疎化や遺族会の高齢化等により、全国的に問題となったことから平成 28 年度に「国内民間建立慰霊碑移設等事業費補助金交付要綱」を制定し国・県・市町村がこの問題に関わっていただける事になった。しかし、この要綱も完全でなく次のようなことを改訂要望していくことが必要である。

- 一 この要綱は忠魂碑を取り壊す事にも補助金を出すことになっているため取壊しの促進にならないか危惧される。
- 二 今のところ第二次世界大戦の忠魂碑のみ補助対象としているが、西南・日清・日露・日独戦等すべての碑を対象とされたい。
- 三 忠魂碑は沢山あると思われるが、旧村単位で建立したものについては潰すことなく補助金を使い市営墓地等公有地へ移設するようにされたい。
- 四 忠魂碑の移設等だけでなく、忠魂碑の修理・整備についても補助金交付対象としていただきたい。

最後に、今回忠魂碑を残すことが出来たのは、地域の有志の皆様の熱意は勿論であったが、遺族関係者が英霊の顕彰のためにでなく、地区外の第三者が「忠魂碑は歴史的遺産として残していく」との目的の転換が要因であったと分析した。今の国の制度では予算は厚生労働省の所管であることから替えることは出来ないが。

今後忠魂碑を残していくためには、時代の流れの中で戦没者の顕彰は元よりであるが、一歩抜け出し忠魂碑を「歴史的遺産・平和教育の身近な教材・戦争を伝える地域の宝」として残すとの発想の転換が必要と思う。

かすかな父の記憶と紙一枚の遺骨箱

磐田市遺族会 伊藤行昌

私の父は終戦の約半年前、私があと 1 か月で 3 歳になる昭和 19 年 11 月に召集令状により満州に赴き、終戦の 1 か月前にロシアに近いチチハルというところで戦死してしまいました。

父が磐田駅から出征するとき、私は母の背中で眠っていました。すると私の横にいた、父の姉であるおばさんが私のほほをたたいて大きな声で「お父さんが戦争に行くんだよ。お父さんの顔をよく見ておきなさい。」と言いました。耳元で余りの大きな声に目を覚まし、父の最後の顔を見ることができました。その時の父の顔はぼんやりしていましたが覚えています。この磐田駅での情景は私の夢に何度か出てきましたが、父の顔はいつもぼんやりしていて、ピントが合うことはありませんでした。

戦争が終わって 2 年ほどたった昭和 22 年、戦没者の「遺骨返還式」という

ものがありました。母から「お父さんの骨が返ってくるから、あなたが代表でもらいに出なさい」と言われ「お父さんの名前を呼ばれたら大きな声で返事をして前に行ってもらってきなさい」と言われました。私は小学校へ入学する前の年で、みんなから「学校では名前を呼ばれたら大きな声で返事をしなさい」と言われていたので、大勢の人の前で返事をするのがうれしくて、そしていい洋服を買ってもらったのもうれしくて、にこにこしてその日の朝母と家を出たことを覚えています。100人ほどの前で大きな声で返事をして、20cm四方ぐらいの四角い木の箱をもらって家に帰りました。

家では家族全員が待っていて、最初におじいさんが木の箱を開けて中を見ました。続いておばあさんが見て次には母が中を見ました、母の次は2人の姉が見て最後に私が見ました。中には父の名前が書かれた紙が一枚あっただけで他には何もありません。

私は父の髪の毛でもないのかと箱の四隅をじっくり見ましたが何もありませんでした。私が一生懸命に箱の中を見渡すので、家の人みな苦笑いをしていました。返還式ではほとんどの人が箱の中は紙一枚だったそうです。遺骨もないのになぜ返還式をやったのでしょうか。それは「死亡通知と書かれたはがき一枚で、戦死したのだからあきらめてくださいと言われても、はがき一枚ではあきらめきれない」という遺族の要望、心情に沿ったセレモニーだったと思われます。

遺児として歩む

磐田市遺族会 増田努

父の戦死公報を受け取ってから大変で、私は母に苦労して育ててもらいました。幼少の頃は母の兄夫婦によくしていただきました。名古屋市南区に借家(共同便所・銭湯通い)住まいで、私は昭和34年中学を卒業すると町工場で工員として働き、夜は定時制高校(機械科)に4年間通いました。母も工員として働いておりました。昭和34年秋には伊勢湾台風にも遭遇しまして、1ヶ月ぐらい別々の会社の寮にお世話になりました。

私が転職、昭和40年に静岡県磐田市に転勤となり、1年半後母を呼び、磐田市に籍を置きました。結婚して、私達夫婦は共働きをしておりました。母には孫2人の子守をしてもらいました。

昭和50年に現住所(県営住宅団地内)に入居しました。敷地が南面に隣接した道路より1.5m高いので見晴らしが良く、母の部屋は南面、東面に位置しており、南面窓からは今も変わらない田園風景です。また、北面の玄関を出る

とバス道路で 50m の位置にバス停があり、便利がよかったです。

数年後、母は磐田市遺族会の地区婦人部の役員として務めておりました。

2 人の孫も結婚して出た後は、3 人での生活が続きました。その中、3 人で国技館での大相撲観戦・北海道定山溪温泉（二泊）旅行と、少し孝行できて良かったと思っております。

母は 88 歳、89 歳と 2 回足を骨折して要介護一となり、施設（デイサービス）にお世話になりながら自宅介護と一緒に生活をしてきました。その母（97 歳）を父のところへ平成 28 年に見送りました。タンスの中に保管整理されていた十枚の軍事郵便ハガキと数枚の写真がありました。一枚の文面に「努」が一人で起き上がることができるようになったことを知った喜びが書かれていました。

現在家族は、孫 2 人、ひ孫 4 人で、最初の孫に父の一字をもらい治代と命名しました。年 3 回は家族でつどい家族の絆を深めています。

最後に私、磐田市遺族会において役員を務めておりました折、日本遺族通信を何回も拝読し、私も機会が出来ましたら、父が昭和 20 年 7 月（29 歳）に眠っております、フィリピンミンダナオ島ダバオの慰霊友好親善訪問に参加したいと常々思っておりました。それが、2 回（平成 29 年度・平成 31 年度）参加させて頂きありがたいと思っております。

[参加しての記述]

- ・平成 29 年度 遺児参加者 13 名 平成 31 年度 遺児参加者 18 名
- ・フィリピン内にある島の小学校に学用品・帽子・衣類等を持参して訪問した折、縄跳び・長い縄跳びを皆さんで喜んでくれまして、すぐに私達とも遊びました…
- ・ミンダナオ島ダバオの慰霊碑に参拝するときに、私達のバス内に地元警察官（2 名）が私服で警護にあたってくださいました。
- ・平成 31 年度は、各班（全 6 班）に看護師一名が付き添って頂き安心でき良かったです。
- ・ルソン島マニラ市に連泊して、比島戦没者の碑があります「カリラヤ」に訪問団全員が移動しまして、フィリピン大使館職員出席のうえ全戦没者追悼式を行い、式終了後各班の集合写真撮影がありました。
- ・全体を通して温かく配慮された 7 泊 8 日の日程であり、同じ境遇の皆様方と一緒に参加でき、父との関係が近くなった感じを持ちました。日本政府・フィリピン政府・日本遺族会には心から感謝をいたします。

- ・今日の日本の平和と豊かさは、数多くの英霊の方々の賜物と感謝に耐えませんが、ありがとうございました。

戦中戦後を生きる

磐田市遺族会 伊藤三喜男

昭和16年、名古屋の運送会社に勤務していた長兄は、勤務先から直接豊橋の部隊に入隊し、その後「支那事変」に参入し、中国大陸各地を転戦、幸いにも昭和20年末無事帰国しました。

次兄は、浜松駅駅員でしたが徴兵され、昭和19年1月10日、現地教育ということで広島に集合、そのままフィリピンに送られ、終戦の時、ミンダナオ島で戦死したとの報せを受けました。

私は次兄を広島まで送って行きましたが、船が港を出る時の様子がかすかですが覚えています。次兄とは川遊びや魚釣りなど一緒に過ごした時が多かっただけに、その死は残念です。

私も、次兄を広島に送った9日後、昭和19年1月19日（当時17歳）陸軍士官学校に入校しました。約1年間軍人としての一般教育を受け、その後兵科が航空と決まり航空士官学校に移りました。昭和20年8月9日、飛行機の操縦訓練を満州（現中国東北）で受ける為舞鶴港を出港、5分程航行して触雷、幸い未だ外海に出ていなかったため、船首を岸にのし上げ、船尾だけの沈没で全員無事、その後次の船を待つ間、京都府福知山市に居ました。

8月15日、ラジオで天皇陛下の終戦の放送を聞きました。終戦など夢にも思わなかっただけに、ただ呆然として声もなく、その場に立ちすくむばかりでした。

翌日、福知山市から帰校、8月21日学校閉鎖で私達は復員することになり、豊浜に帰って来ました。

昭和16年12月8日に始まった太平洋戦争は、私が士官学校に入校した昭和19年1月頃には既に敗色濃厚となり、兵科が航空と決まった時には、東京や大阪などの大都市は勿論、中小都市まで戦禍が拡がり、やがて原子爆弾が広島、長崎に落され、昭和20年8月15日終戦となりました。

この間軍人は勿論、一般の人達も沢山命を失いました。航空士官学校の卒業生も敵機と戦い、最後には特攻機に乗り、殆どの人達は帰らぬ人となりました。

私達在校生も飛行機の操縦技術を身に付け次第、特攻隊員として出撃することになっていました。

死を覚悟した1年7ヶ月の生活は、19歳から95歳になる現在までも、私の

人生観に大きな影響を与え続けています。

太平洋戦争が終わり、私達日本人は多大な犠牲の上に、77年の年月、平和を願いその為の努力をして来ました。

この間、世界の各地では紛争が絶えまなく行われて来ましたが、今回のロシアとウクライナの戦争は、平和を願う私達に大きな衝撃を与えました。

宗教の違いや主義の違いがある限り、この地球上から戦争は無くならないのでしょうか。

ビルマの父

磐田市遺族会 村松初江

「孫の父親が戦地から帰ってくれば、わしはいつ死んでもいい」と日夜神仏に祈っていたという祖父のことは、これまで何度聞いたことか。

父は昭和18年に召集され、20年に終戦。戦後無事帰還する人々がいる中、何の音沙汰もない。別れたときは1歳だった孫も日増しに父親似となり、帰ってきたら抱かせてやりたいと首を長くして待っていた。知らせは2年半後に、紙切れ一枚の戦死の公報でした。祖父の痛手は深く、その夏59歳で逝きました。

戦争が奪うものは、戦った人の命だけではありません。今は2人同じ寺で眠っています。

戦後の母と子の生活は苦しく強風の連続でした。先ずは住。住む所がなく知人の長屋、母の実家を転々と。どんな小さな家でもいい、自分の家が欲しいと、私が夢に描いていたと母は後に笑って語ります。

夢の一つでもあった父の眠るビルマへの慰霊の旅が実現したのは2000年のことでした。

「お父さーん。お父さーん。お父さーん。」

右手の拳をぐっと握り、空に届けと叫んでいる。生まれてから呼んだことのない父に向かって、抱かれた思い出もない今は60歳を過ぎた子どもたちが。旧ビルマへの慰霊巡行で恒例の「お父さん三唱」。次にそれぞれの遺族が石碑や仏像に追悼の言葉を捧げる。夫が言葉に詰まれば、妻が背中に手を添えて励まし、妻が思いを語れば、夫がそっと眼鏡を外す。

私は母のこと、入院のことも話せた。次に母の好きなオカリナを聞いてほしいと吹こうとしたが、どっと出る涙と緊張で手が震え、指は宙を舞い、音を出すことができなかった。

1月末のビルマは乾期で、広大な野原は土埃が舞い、緑の大木も草木も黄土

色となり、人々はその中で静かに暮らしている。質素な家屋からは想像もつかない黄金のパゴダ（寺院）が並び、水を掛け花を替える参拝客が絶えることはない。

「永遠に生きる母の愛」より一部抜粋

磐田市遺族会 加藤なを江

昭和13年、年の瀬を迎えた12月、既に入隊している父の後を追って当時4歳の私は、26歳の母と共に満州もソ連との国境にある、密山県東安省西東安という所に行きました。見渡す限り白い雪におおわれた原野に点在する15、6軒の官舎、家族といえば私達を含めて3軒、遊び相手は“兵隊さん、”という誠に淋しい所でした。

20年8月8日のよく晴れた朝、その日はいつになく飛行機が騒がしいのです。見ると日の丸ではなくソ連の戦闘機でした。学校に行くと朝礼の時間にもかわらず、教師達は軍部の人達と職員室で会議中。まもなく校庭に現れた校長先生は、生徒に「ただちに家に帰りなさい」との指導。帰宅すると、2時間以内に駅に行くように！軍部からの避難命令、国境の地故、ひとたびソ連との戦争が始まればいちはやくそこは修羅場と化すからです。

数10人の女子供と50近い男性の団長と副団長の2人の引率で、同じ列車に乗り込んだのです。軍人軍属の人達や開拓団の男達は、無人の官舎の後始末とソ連との開戦に備え、軍隊に残ることになりました。

発車のベルが鳴った時、見送りのため急ぎよ軍隊から駆けつけてくれた父は「母さんの云うことを聞いて達者で暮らすように」との言葉を投げかけてくれましたが、これが父との永遠の別れになろうとは、神ならぬ身の誰が知り得ましょう。

汽車は、無情にも行く先決まらぬ疎開地へと旅立ったのでした。母34歳、私11歳、妹5歳、弟3歳の真夏の午後2時の出来事です。

列車の中は、誰もが不安な心持で話し声さえありません。やがて夜になり静寂な闇を貫く大音響に車外に目を移すと、ソ連機からアラレのように投下される焼夷弾と、暗黒の夜空を焦がす紅蓮の炎だったのです。

この時初めて戦争の恐ろしさを知りました。止まったり走ったりの列車に乗ること1週間。吉林省の駅に着いた時です。ラジオから流れる天皇陛下の終戦を告げるお声を、耳にしたのは…

しかし、それからが私の本当の戦争だったのです。

「ソ連兵が進入して来て殺されるかも知れない」「特に若い女性は気を付けた方がいい」など噂が乱れ飛び、私達の団体は山奥へ山奥へと避難しました。

母が寝袋を背負い、炊飯道具を持ちながら妹の手を引き、私は弟を背に毎日何10kmの道を歩く。食事時は川の水でお米をとぎ、石ころを並べてカマドを作り、飯盒で炊くのです。おかずは野草を摘むか、開拓団の人達が作った今は主のない畑の作物を頂戴する。味付けは塩、夜は作業小屋に泊まったり、野宿をしたり、8月も半ば過ぎとなると夜は冷えます。木の葉で寝床を作り、木の枝を取って掛布団代りで休みましたが意外と暖かいものです。

こうして4、5日の旅を続け、山の中の部落の小学校に落ち着きましたが、夜になると、暴行するように現れるソ連兵の銃声に若い女性達は怯え、娘であろうが人妻であろうが、頭を丸め顔にスミを塗って男装をするが、若い女としての匂いは隠す方法もなく連れて行かれます。

「ここにもソ連兵に驚かされるならば、いっその事、街へ出よう」「日本へ帰る時、取り残されてもいけない」とふたたび吉林市へと戻るのです。

私達は吉林で一番大きい陽明中学校の講堂に落ち着くことになりました。

大きな講堂は避難してきた人達であふれ、私共親子4人には2m四方の場所があたえられました。が、トイレに立つ以外は火鉢を囲んで寝るだけの生活です。共同の勝手場は校舎の軒先。冬は火鉢の炭火の上に飯盒を載せ炊いたり煮たりです。

しかし若い女達にとって、ここも安住の地ではありません。夜ごと、銃を持ったソ連兵が女を求めに来るからです。逃げ惑う女の人を大声でどなりつけては否応なしに連れて行く。

その人を救おうと自ら身を投げ出す売春婦の人達を見るのも日常茶飯事でした。

身代わりになって連れて行かれる後姿に、どれほど多くの人々が感謝の目で見送ったことでしょう。

又こんな光景にも出会いました。私達親子は講堂の広間にいましたが、なにやら舞台の上の方でうめき声が出たかと思うと「オギャア」という泣き声。赤ちゃんが生まれたのです。皆の注目の中で…しかし、この赤ちゃんも母親の栄養失調にお乳が出ず、生後5、6日で亡くなってしまいました。

乳児ばかりではありません。2、3歳以下の子供の多くは毎日のように1人2人と亡くなっていきます。2月で3歳になった弟が生きているのが不思議でした。

家を出て半年にもなると持参金も乏しくなり、お風呂へ入らないのでシラミが湧き、皆、骨と皮ばかりの姿です。母は自分は少しの食事でも過ごし、私達子供に多くを与えてくれました。そして、とうとうお金が底をついてしまいました。2人は大福餅を仕入れ中国民家に行商に行くことにしました。

こうして売り歩くうちに「子守に来てくれ」という中国人に出会いました。中国語は片言しか話せない私を他家に出すのに母は反対でしたが、「私が食べる分を、お母さんに食べてもらいたい」との願いで自分から進んで子守に中国人の家に住み込んだのです。2月も終わりの頃です。

母は3日置き位に行商をしながら尋ねて来てくれました。けれども、3日置きに来てくれた母が4日過ぎても来てくれません。そして5日目の朝ものすごく胸騒ぎがしたのです。もしかして母が…と思うと居ても立ってもいられず御主人にお願いして母の所に送ってもらいました。

思ったとおり母は横になっていましたが、その容姿はいたいたい程やつれています。妹と弟は相変わらず火鉢を囲んでいましたが、しばらくぶりを見る姉をうれしそうに迎えてくれます。その日の夜中、何気なく目が覚め、私は薄暗い中で母の姿を求めたのですが、南向きで寝ていたはずの母が1人北向きになっているのです。不審に思い声をかけたのですが、返事はなく「おかしなお母さん」と思いつつ南向きに変え朝を迎えましたが、驚いたことに母は目を大きく見開いたまま、一言も云えぬ植物人間になっていたのです。今にして思えば恐らく銃弾に傷つき動けなく一人取り残された父の身を案じ、ショックの余りそのような状態になったのでしょう。

「物を云わなくてもいい、死なないで、死んではいや！生きていて欲しい」と何も云わぬ母への切なる願いも空しく、3日目の4月28日午後9時頃から、母の胸が大きく波打ち始めました。9時15分、私達姉弟の見守るなか、母は静かに息を引き取りました。享年35歳。

母にすがって泣く私の姿に、それまで茫然と眺めていた妹や弟も事の重大さに気がつき泣き出しました。周囲の人達も気が付いたように声を掛けてくれます。

呼べど応えぬ冷たい母の胸に泣きじゃくる妹や弟の姿を見て思いました。「私が泣いてはいけない。今泣いている場合ではないのだ。私達には明日がある。明日を生きることを考えねば…」と。

死んでも尚大きく見開いた母の目はなかなか閉じてくれません。幼い愛し子を異国の地に残して逝かなければならない母は、死ぬにも死ねなかったのです。

よう。

「お母さん、私達の事は心配しないで」と言いながら、何回も何回もまぶたを撫でてあげることによってやっと目を閉じてくれました。周囲の方のお世話になりながら、母の遺体は吉林の山中に埋葬されました。

もう2度と来て手を合わせる事のないこの土地に…それを思うと、涙はとめどもなくあふれます。「お母さん、さよなら」と最後の別れに合掌しました。

母の死から1週間後、街で母の友人に出会いました。一部始終を聞いてくれた。その人の紹介で、北海道出身の吉林市内に自宅を持つが子供に恵まれぬ吉本さんという民間人に、弟は養子としてもらわれて行くことになりました。日本へ帰って、父が無事復員して来た時は必ず返してもらう約束で。母に死なれ弟までいなくなった私達の淋しい生活が始まりました。

6月も半ば過ぎ、私達の団体に移動命令がきました。少しずつ日本へ近づくように吉林から新京へと向かうことになりました。

新京の街に幾日滞在するかわからない。またもや生活への不安におびやかされました。でもよくしたもので、収容所へ入って半日もたたないうちに子守に来てくれないか？という中国人が見えたのです。妹と2人集団から分かれ、中国人と一緒に馬車で2時間位の所へ連れて行かれました。

半月ほど過ぎた頃です。午前10時頃になるとすごい胸騒ぎがしました。母が亡くなる前と同じように痛く苦しいのです。私は御主人に「収容所へ連れて行って下さい」と頼み荷物をまとめ、妹と収容所に着いたのが午後3時過ぎ。校庭で最後の人が身分証明の写真を撮っている最中でした。「連絡先がわからず困っていた」というのです。なんと不思議な事でしょう。もしこれに間に合わなかったら、今頃私も中国残留孤児の一人として悲しい想いをしていたでしょう。

新京を出て奉天を通過。営口という港から1週間の船旅を続け、7月26日博多港へ…ここで4日間滞在、弾む心で手にした浜松行きの切符、車内は引揚者や買出しの人で満員です。夕闇せまる6時半頃、人並みでごったがえす浜松駅に到着。袋井の駅で降りたのが7時過ぎ、袋井派出所から豊浜の役場へ、役場から祖母の待つ我が家へ…。連絡はスムーズにいき、迎えに来てくれた叔父、叔母と一緒に帰って来ました。

それにしても不思議です。母が亡くなる前と、新京で移動命令が出た時のあの胸騒ぎ、一度ならず二度三度。混雑する浜松駅では妹と2人迷子になっていたかもしれません。母が私達姉妹を見守ってついて来てくれたとしか思えませ

ん。我が身は滅びても、我が子を思う母の魂は永遠に生きていることを痛感しました。

このようにして、あの人、この人のお陰で当時 17 歳だった叔母と 57 歳になる祖母の待つ日本に引き揚げて来ました。私さえ日本に帰って来なければ祖母は父の妹、私には叔母にあたるその人の世話になり、余計な苦勞をせずにすんだのではないかと背を丸めて働き通した祖母の後姿に、手を合わせたものです。

戦後 10 年、それまで行方不明という名のもとに父の存在に僅かな希望を託しておりましたが、「昭和 20 年 8 月 16 日吉林の山中にて死す」との公報が 30 年 8 月に我が家に届き、息子の安否を気遣う祖母と、父の帰りを今日か明日かと待つ私達姉妹の望みも空しく、ついに断たれました。

そして時は流れ、48 年 9 月ふとしたことから弟の消息を知ることができました。約 30 年ぶりに見る弟は体格のよい一児の父親となっておりました。満州での悲しい別れが脳裏に焼きついていた 3 歳の弟はこれでようやく大人になり、私の心の中での戦争に終りを告げました。

非業の死

磐田市遺族会 米津幸男

私は物心ついたころから 1 年に一度、我が家の仏壇にお参りに訪れる人たちのことを覚えています。小学校に入る頃、その方々はフィリピン東方の海で戦死した芳太郎おじさん（父の弟）の命日（11 月 13 日）に訪れるということをも母より聞きました。しかし、昭和 36 年、私が中学生になると、毎年訪れていた人たちも減り、いつしか一人だけになっていました。その方はおじさんの最後を見届けた戦友の梨子田実さんでした。

戦前、現在の自衛隊浜松基地の中に陸軍飛行学校があったことをご存知の方はもう僅かかもしれません。戦局が極まりつつある昭和 19 年、陸軍飛行学校は教導飛行師団へと名前が変わり、攻撃と教育研究を行う飛行部隊がおかれしました。同じ年におじさんは陸軍航空士官学校を卒業すると、10 月には急きよ編成されたばかりの陸軍特別攻撃隊「富岳隊」の隊員に命ぜられて浜松からフィリピンのルソン島に向かうことになりました。特攻機といっても海軍の神風特攻隊のゼロ戦（戦闘機）とは異なり、陸軍特別攻撃隊は複数名が搭乗する重爆撃機を改造したものです。しかし、この特攻機は飛行機の機体から銃器は外され、爆弾は落とせない構造にして、搭乗する人間を飛行機もろとも敵の軍艦へ体当たりをさせる非人道的なものだったのです。

「昭和 19 年 11 月 13 日、ルソン島東方の海上に敵の艦隊を発見、富岳隊は

必殺攻撃により、これを撃滅すべし…」午後3時、富岳隊に出撃の命令が伝えられ、攻撃隊員13名は飛行場に整列し壮行の乾杯がおこなわれ、すぐに夕映えの空に向けて出撃しました。おじさんは、無線の係として五機編成のうち、隊長が操縦する一番機に搭乗しました。めざす敵艦がいる海上に近づいたときに突然、雲の下から20機ほどの小型飛行機の編隊が飛び出し、艦隊からは高射機関砲から打ち上がる赤い炎が飛び散り、おじさんの乗っていた特攻機は体当たり直前に6,000m上空で撃墜されてしまいました。この目撃談はエンジンの不調で基地に戻った戦闘機の隊員の口からもたらされたのでした。その時の「18時2分、空母発見。体当たり」とのおじさんの打った最後の電文が飛行基地に届いていたそうです。

翌日の大本営発表では「特別攻撃隊富岳隊はルソン島東方の敵艦隊を攻撃し、戦艦一隻を撃沈せり」として、特攻隊の戦果は新聞やニュースでも大々的に報道されました。新聞の見出しには「陸軍特別攻撃隊 戦艦を撃沈 郷土の勇士に続け」などと一夜にして英雄的な存在として扱われていました。

おじさんは3人兄弟の末っ子に生まれ、母親のお腹にいた時に父親を亡くし、貧しい生活の中を母親一人で育てられたので、人一倍母親思いのやさしい少年であったそうです。

特攻隊員として出撃する薄暗い朝に、機関係の梨子田さんは戦闘機が並ぶ飛行場を歩いていると、尾翼の下に体をもたせるようにしてむせび泣いている人影を見ました。それは、いつも元気なことを言っていたおじさんの後姿でした。梨子田さんは慰めようもなくその場を立ち去ったそうです。おじさんはたった26歳の短い人生を国に捧げたのでした。

父親からおじさんのお話を聞くたびに私は子どもながら「なぜ断らなかったの?」「なぜ逃げなかったの?」「こんなに人が悲しむ戦争をなぜやるの?」と次々と疑問が湧いてきました。太平洋戦争末期における陸海軍4,000名を超える特攻隊員の非業の死と、その若者を取り巻く人々の悲しみを決して忘れてほしくありません。そして、日本人は2度とこの人間を兵器と化して特攻隊員を戦争へ送り出す思想とシステムを生んではいけないと思います。

私が今を生きている若者の皆さんへ伝えたいこと、それは、たった一度だけの自分の人生を大切に生きてほしいと思っています。若いうちにいろいろな本を読み、あちこちを旅して、多くの友達を作り、異なった文化に触れて、様々な生き方や考え方があることを学んでいただきたいと思います。そして、誰もが一人の人間として尊重され、幸福を感じられる社会を実現することこそが平

和への近道であることを私は信じています。

(令和3年磐田市平和祈念式「追悼のことば」より)

母の遺稿

磐田市遺族会 市川勝己

旧豊田町戦友会が遺族の思い出を集めて「いしずえ」を刊行したのは昭和50年でした。母がいしずえに寄せた手記を私なりに要約致しました。

昭和18年10月2日臨時召集を受け取り静岡中部第3部隊に入隊。当時長男3歳、長女1ヶ月の可愛い盛りの子ども2人を残しての出征。人一倍子煩悩だった主人の気持ちはいかばかりだったか。その2ヵ月後好物のおはぎを作って面会に行った。「大きくなった。大きくなった。」と涙を流して喜んだ顔が今も目に浮かぶ。翌昭和19年7月18日マリアナ諸島方面にて戦死。「お父さんが帰ってくれば」の支えを失って寂しさと失望は言い表せなかった。

その頃にはB29の不気味な爆音におののき親子3人肩を寄せ合った狭い防空壕の日々。配色濃くなった6月遺骨が届き、8月には村葬をしていただく。4年という短い結婚生活だったが優しい夫との楽しい思い出だった。やがて子どもも成長して孫に囲まれ楽しい日々を過ごす。ある日孫が言った。「おじいちゃんも横井さんや小野田さんのように帰ってくるといいね」と。私もそんな夢をみている。

戦死した人たちは「自分が犠牲になるから、将来どんな事があろうが戦争だけは絶対にしてくれるな」との思いで散っていったと思います。私たち遺族はそうした英霊の思いを後世に伝えなくてはならないと強く思います。

戦後77年平和の俳句

磐田市遺族会 磯部節子

1945年、敗戦後、満州（現中国東北部）から日本への引揚が始まった。4歳の少女、夜の暗い甲板に立ち小さな手を合わせて何かを祈っていた。毎夜のように衰弱し亡くなってゆく幼子、赤子、その水葬が始まる。母親も体力がなく、お乳の出ないお母さんに抱かれ、はかない命を目の当たりにしながらの引揚船でした。雑穀と芋のつるが入った食事は、私も消化出来ず日毎弱ってゆきました。明日の朝まで持つ事が出来るだろうか？今宵、命を落とすかも知れない？最後の食事としてふるまわれたのが「白粥」でした。かすかな塩味だったような記憶、最高のごちそうでした。白粥を頂き寝た私は何とか命をとりとめ、日本の地を踏むことが出来ました。重爆機のパイロットの父は昭和18年12月26日、南方ニューブリテン島での激戦にて、28歳の命でした。白粥は今も命

の絆と思っています。

| | |
|---------------|---------|
| 白粥に命もらひし帰燕かな | 戦後 73 年 |
| 茹で玉子今朝も輝く平和かな | 戦後 74 年 |
| 夏野菜天ぷら溢る平和かな | 戦後 75 年 |

終戦の日に一日限定で復活した「平和の俳句」(中日新聞掲載)。私の想いは今日の平和への感謝を詠みました。戦後の間もない小学校時代、給食は6年間ありません。

低学年の頃、お弁当を持って来られない少年、そっと教室を出て校舎の片隅にいた事、今でも覚えています。

茹で玉子は昔も今も輝いています。

親戚の家でさつま芋の天ぷら大皿に溢れんばかり、目を見張るごちそうでした。

竜洋遺族会で靖国参拝後に訪れた「霞ヶ浦航空隊、予科練記念館」。映像、写真、あどけない面影を残した少年達の姿、少年のある日記?の中に夢は「ぼたもち、お汁粉他、甘い物を食べたい」希望がありました。館内では皆、涙が止まりません。

2度とこの様な事があってはなりません。

現在の平和に感謝しつつ残りの人生を穏やかに。

三ヶ根山の思い出

磐田市遺族会 大橋洋子

初夏、あじさいの花が美しく咲く頃になりますと、毎年なつかしく思い出すことがあります。それは、私の群馬県出身の戦死した父の、日本に無事帰国された戦友の皆様と、平成11年の6月に蒲郡市外三ヶ根山頂の鎮魂碑前で東通会トーツーカイ主催の行われた碑前式に初めて参加した時のことです。

東通会とは、全国から集まった若者達が、磐田のかぶと塚にあった建物で、通信隊としてツートト、ツートトの信号等通信を学んだことにちなんでつけられたと聞きました。第二十四師団通信隊として共に戦地で苦労された方々が、戦後、全国に散らばった仲間に出たいという切なる思いで連絡しあい、何年もかけて捜し続け、やっと昭和43年11月から全国大会にこぎつけ、持ち回り制にして各地で開催されていたようです。

平成11年に八十路の坂を越え、体調を崩される人も数多く出てしまい、区

切りにするという時でした。私は、父が通信の勉強の合い間に浜松へ遊びに行ったりしていた時に、当時、少年兵でかわいがっていたという村松敏郎さんが私を捜し、嫁ぎ先までおいでくださり、「春山勇喜さんの嫁さんをみんなに会わせたい。」というありがたいお話で、喜んで参加いたしました。

三ヶ根山には沖縄から北海道まで130名余り、大勢の家族も加わり、大型バス2台で集合というにぎやかさで本当にびっくりいたしました。車椅子ではせ参じた方もあり、きずなの強さに感動しました。

戦死した父は、門司港から母のお腹にいた私、祖母に見送られて出征し、台湾バシー海峡で米軍の攻撃を受け、親州丸と共に海に沈みました。三ヶ根山には、仲間の船に助けられた方も参加されており、万感の想いで私の手をにぎって喜んでくださいました。三ヶ根山頂からのながめは、はるか南方の景色によく似ているようで、じっくり眺めている皆さんがまぶしくうつりました。生きている喜びを感じていたのでしょうか。

碑前式はおごそかに、帰国してから神職になられた方の進行で、身の引き締まる思いがしました。最後に、音楽が流れ“海ゆかば”の歌を全員で歌いましたが、涙をぽろぽろ流されている姿に私も涙がほおを伝い、今でもその光景は強く心に残っております。三ヶ根山頂には、浜松出身の俳優・鶴田浩二さん達が建立した碑もあり、戦争にまつわる、あまり知られていない殉国七士の碑もあり、考えさせられました。

三ヶ根山頂を去る時に、戦友の皆様との出会いを感謝すると共に、東通会の皆様がもらった命を、地元で、世の為人の為につくそうという気持ちで、これから生きるというお話を伺い、私もささやかな平和な暮らしを願いつつ、現在も遺族会に協力し、過ぎ去りし人々の出逢いをなつかしく思う今日この頃です。

知らなかった伯叔祖父の戦争参加

磐田市遺族会 森口雅博

先日、祖父の兄弟が亡くなりました。その葬儀の準備で親戚と故人の生い立ちを書き留めている中で、故人が召集令状を受け取り、家族で見送りをしたとの話を聞きました。祖父が戦地であるニューブリテン島に派兵され、幸運にも赤痢による戦線離脱で命が助かったことは聞いていたのですが、他の親戚の戦争体験の話聞くのは初めてでした。

後で詳しく聞いてみると、祖父母、曾祖父母の代の男性の半数の8名が召集され、その半数の4名が戦死していることを知りました。当時、働き盛りであった男性親族の、ほぼすべてが召集を受けたのだと思います。文字通りの「国

民総動員」であったのだと感じるとともに、戦地に向かうことになった方が、命を落とした方が、自分の身内にもこんなに多くいたことに驚かされました。

私と同じ40代以降の人間は、どれだけの親族が戦争に赴き亡くなったのかわからない方がほとんどなのかと思います。私は、身近な戦没者のことを知らなかった自分を恥じるとともに、自分の子供が大きくなったら、戦争に赴きそして戦争によって命を落としたご先祖様の事を伝えていきたいと思います。

父の眠る沖縄

水窪町遺族会 知久勝宣

あの悲惨を極めた大戦が終わりを告げて77年、過ぎし大戦においてひたすら祖国の隆盛と^{どうぼう}同朋の安泰を念じつつ、一身も顧みず危地に赴き^{かんなんしんく}艱難辛苦に耐えながら奮戦され、戦場に散華された戦没者の皆様のご無念に思いをいたす時、私たちは永遠に忘れることの出来ない痛恨の極みであります。

私の父は昭和20年6月20日、沖縄で戦死し帰らぬ人となりました。私が3歳の時でした。早いもので私は80歳になりました。

父が最後に母宛てに出された手紙には「一人十殺一戦車」「一飛一艦」「一艇一船」の合言葉でますます闘魂を高め頑張っています、という文書で、沖縄県^{なかがみぐんちやたん}中頭郡北谷村嘉手納、暁第一六七四一部隊ホ隊、知久良一と書かれ、もう暫く手紙は出せないと言う父からの最後の手紙でした。昭和20年4月、沖縄戦は太平洋戦争最初で最後の地上戦で、民間人を巻き添えに歴史に残る戦いで「鉄血勤皇隊 ひめゆり部隊」も犠牲に含まれ、父は、ここ沖縄の地で帰らぬ人となりました。

その後の、父亡き母は、私達幼い6人の子供をよく育ててくれたものと思います。苦勞した母も、父の戦死から13年の命で若い母の死でありました。

終戦間もない頃の両親のいない生活は、私達にとりまして苦勞の始まりでした。私も職場を変えながらも働かなければ生活が出来ないとの気持ちで、無我夢中で頑張り、会社を立ち上げ現在に至っております。私にとりまして人生波乱の60年間でした。

親孝行したいときには親は居らず、苦勞した母に対しても何もしてあげることが出来ないことが私にとりまして残念です。

今後も、私達夫婦、子供、孫が先祖を祀り供養することが両親に対する何よりの責務と思っています。戦争を知らない世代が国民の8割超となり、戦争の記憶が風化しつつある今こそ平和のありがたさ、御霊の心を心として感謝の心と戦争の悲惨さを後

世に語り継ぎ、日本の恒久平和と繁栄を築くために精進努力することが私たちの務めであります。

母を想う

水窪町遺族会 井水正勝

私は昭和17年1月に井水寛武の長男としてこの世に生まれ、その時既に父の弟清寛は志願兵として横須賀の海軍に入隊しておりました。その後19年9月24日ソロモン諸島において戦死、当時20歳。父親は終戦の前半に召集兵として満州に出兵され、私は父と接した覚えは残る写真で想像する程度でした。

20年8月15日終戦を迎え、先に除隊された兵隊さんが井水君も間もなく帰ってくると家に立寄り伝えてくれたと聞いておりましたが、21年9月21日朝鮮興南収容所病院において死亡の報告を受けました。

母は病弱な体で父を待ち続けていましたが、昭和22年7月3日にこの世を去りました。

私は祖母と二人だけの生活となり、祖母はこの10年の間に10人の葬式を出したと聞いております。

残された家族は私と祖母の二人だけとなり、今思うと、祖母の心境は如何ばかりかと想像がつきかねます。当時祖母の年齢は57歳、元来心の強い人でしたので弱音は言いませんでしたが、母の葬儀の終わった翌日の朝、祖母と二人で裏の川へ洗濯に行った時、祖母の眼から2、3滴の涙が出ている様子を私ははっきり覚えております。その時の心境は母の死で二人だけになった悲しさと、これからの生活、5歳位の子供をどう育てていけば良いのか、さぞ苦しい胸の内があ那时的涙だったのかと想像されます。

祖母は、それからは生活のために自分の実家へ農業の手伝いに行き日当で収入を得たり、ある時は工事現場へ出て土方の手伝い等したり、色々の仕事をして収入を得ておりましたが、幸いにして祖母は豆腐を作る技術があり、豆腐屋さんに勤めるようになり生活を支えてくれました。楽な生活ではなかったけど、私と二人の生活は自由で気楽で、前向きな性格でしたので今日駄目なら明日がある・というような考え方の祖母でした。

私も昭和43年26歳になり、同年代の女性と結婚することになり、祖母は昭和22年以来家庭を守ってきましたが、新しい私の妻に家事の仕事を引き渡すことになり、21年間本当にご苦労様と感謝の気持ちでいっぱいでした。その後は私の子供ひ孫二人を可愛がってくれましたが、昭和40年12月28日82歳で永眠致しました。長い間ありがとうございましたと感謝の気持ちしかありません。

今思うと、生存中に靖国神社へ祖母を連れて行きながら東京見物でもしてやりたかったと、後悔しても何もできません。

故人となりました島倉千代子さんが歌った「東京だヨおっ母さん」の歌を聞くたびに祖母を思い出します。

当り前の平和に

水窪町遺族会 大藤積平

テレビのニュースでロシアとウクライナ戦争の様子を見るにつけ、多くの人命が失われ、建物の破壊等に恐ろしさを感じる。

さて、今年は戦後77年となり、沖縄復帰50年となる。

私は戦死により遺児となった大藤家の一人娘に婿入りしたが、義父については一枚の写真しか見たことがなかった。そこで、義父についてももう少し知りたいと思い、遺品がないか捜した。今はなき義母の小物入れの中に、茶色に変色したハガキ5通が丁寧に保管されていた。

昭和13年の消印があり、検閲の押印もあることから、言論が統制されていたことがわかる。限られたスペースからはみ出さんばかりの細かい字で綴られ、読むのに苦労した。伝えたいことがいっぱいあったことがわかる。その中の一通を紹介する。

「ちよ（妻）さん、度々故郷の懐かしきお手紙ありがとうございます。ご慈愛のこもった文を読みいじらしく思いました。友人のY Bの所在地もありがとうございます。又弟の下宿地の番地をお知らせください。S H君もT Yさんと祝言をあげられたとか、早速お祝いの文を出します。家にいたころは、我儘放題でしたが、今は軍務に精励致しております。山間地出身故に靴傷一つ作らず元気そのものです。同郷のA E君も同じ隊に居り、演習の点呼後の寸暇に故郷の話に花を咲かせています。

今の農業は馬鈴薯造りの真っ最中でしょうが余り無理をせず、軍人の妻として後に残せし娘の保育に全力を尽くしてください。僕も面会は到底出来ぬものと思うから、朗らかな顔の写真を送るので、ブックに貼付して置いてください。消灯お休みください」

故郷の懐かしさが詰め込まれているが、厳しい軍隊生活は知ることが出来ない。

「欲しがりません。勝つまでは」の標語のとおり全ての国民もじっと我慢した。結局義父は戦死した。敗戦となり、水窪でも多くの人が祖国の為に尊い生命を捧げられ、生活必需品である衣食住まで欠乏した。

わが家でも主を失い、家族の平和は崩れた。年老いた祖父が父親代わりとなった。現在の日本は物価高というものの飽食の時代で、物を大切に作る気風が薄らいできている。野菜などは、形が悪いだけで商品化できないという。こんな時代だから、もう一度戦争の苦しみを知る為、水窪に近い長野県阿智村の満蒙開拓記念館を見学しようと思っている。

以前見学したときは、満州開拓の背景と実情を知ることが出来た。特に敗戦後の過酷な逃避行で、帰国できた人は半数弱といわれ、言葉では言い尽くせない悲惨さを垣間見ることが出来た。

ウクライナ情勢から考えて、平和でなければ、当り前の人生を歩むことが出来ないことを知ることが出来る。

戦争をかたならなかった義母

水窪町遺族会 高木園乃

1945年8月15日終戦

戦後70年を迎えて、各メディアが伝える戦争の悲惨さをしみじみと思いながら、遺族であった祖母、義母、主人が決して戦争中の詳しい体験や暮らしの事を語ることは無かった事に思いを馳せた。

義母が亡くなって20数年たった今、義母達の戦中戦後の思いが今になって心の中に甦って来るのです。長年の重労働で痛めた膝に灸治療をしている祖母を家に残して、恒例の月2回の寺参り墓参りに義母と出掛けた。寺参りを済ませ、暮れに手向水、香花を供えた義母は、墓石をつくづく眺めながら「夫は自分でこの墓を造り戦争に行きそのままこの墓に帰って来たのよ」と。

戦争のニュースやテレビは見る事も無く、語る事の無かった義母から、遺族の言葉を初めて聞いたのでした。ずーっと深い悲しみを抑えていたのだろう。義母の眼に白く光る涙をこの時見逃す事は出来なかった。

意味の分からぬ緊張感とどうする事も出来ない心の動揺が全身を硬直させた記憶は今でもはっきり覚えている。

義母と2人でドライブした時には、「私には青春の一部が壊されてしまったのよね」と笑顔で語られたその奥には、悲しみ苦しさから打ち勝った誇りの様な表情が見えた様に感じたものでした。そして又、語り継ぐ思いや平和への願いを私に伝えてくれた一瞬でもある様に思って、この責任を受け継いでいかなければとも感じました。

義母の70年の人生は祖母との二人三脚で4人の子供を育て、遺族年金、特

別給付金を戴きながら、僅かな不動産で賄って生活は出来ましたが、それ以上に、男手の無い家を守り、小さな町で農業を続けていくには体力的、精神的な負担は想像を絶するものがあったと思います。

また、小野田少尉の帰還のニュースを見て「今頃帰って来てくれても私は嬉しくもないわ、却って戸惑う思いだわ」の言葉に当事者ではない私には返す言葉もありませんでした。

晩年苦しさと痛みの病床の中で「やっぱり父さんに逢いたかったわ」とか細かい声で枕を濡らしていた時、初めて語った義母の最後の本音の言葉だったであります。今でもその時の私の衝撃は全身「鉛」に釘付けられた言葉となって残っています。

護国神社・靖国神社への参拝には「手向け水」を持って英霊に供え、祖母、義母、主人の思いを、嫁の私が子や孫に語り継ぎ平和である事の大切さを、ずっと（末永く）祈り続けたいと思っています。

叔父を偲ぶ

水窪町遺族会 竹下裕二

何年か振りに、手元にある戸籍謄本と仏壇に祀ってある「繰り出し位牌」を調べました。

戸籍謄本 竹下 繁

群島ガダルカナル島堺台西北側高地において戦死 中部第二部隊長鈴木榮助
報告

昭和 18 年 9 月 21 日受付（大正元年 12 月 25 日生）

碑 空錦光院義芳繁道居士

昭和 17 年 12 月 4 日 陸軍軍曹 竹下 繁 ガダルカナル島ニテ戦死

叔父の兵役はいわゆる徴兵検査で甲種合格、2年の兵役を終え、職は大工で、召集による兵役につくまでは浜松市野口町で就職、盆暮の帰郷は自転車で野口町から水窪を往復しておりました。

思い出 1 当時の 152 号線は勿論無舗装、特に横山では天竜川に橋はなく、船で往復（渡船）という不便極まりない道路事情の中、体力気力にものをいわせ汗だくだくでペダルを漕ぐ叔父の姿。その自転車を無断借用し狭い庭で乗り回し、何回か転倒して叱られたこと、思い出は走馬灯のごとく。

思い出 2 私は国有林関係に就職し、昭和 54 年より 2 年間秩父営林署に勤務。この間縁あって地元の住職と知りあい、ある時、大東亜戦争ガダルカナル

戦の話となり叔父がこの地で戦死したことを話すと、住職は偶然にもガダルカナル島方面に慰霊と遺骨収集団の一員として参加しその折ガダルカナル島の海岸で貝を拾い、持ち帰り寺で祀っており、ガダルカナル島で戦死したのであれば遺骨は勿論、故人の身の回りの物は一切無かったと思うから、叔父の形見として祀るようと「貝」を授かった。帰省の折持ち帰り、この次第を両親に話して仏壇に祀り、一日としてお茶・線香を絶やしたことはありません。

思い出3 叔父は召集後陸軍軍曹に昇進。戦地に赴く前、家に軍刀を所望、祖父、父が思案の結果、遠縁に当たる草木（地名）の現守屋彰方をお願いしたところ、快諾の上「刀一振り」と研磨料、鞘代として当時としては破格の金子を賜り、家では急ぎ軍刀を仕上げ、陸軍軍曹竹下繁に届けた次第で、今回静岡県護国神社遺品館に展示する遺影に、その軍刀を携えた叔父の写真をお願いしました。

思い出4 私が住む地域には小学校が所在し約80戸程ですが、この地区で大東亜戦争での戦没者霊（8柱）を同一敷地に祀っております。特に盆、正月、誰に言われたわけではありませんが、ここ何年か自宅の墓と共に一時間ほどかけて清掃しています。清掃後は改めて戦没者8柱の霊に、郷土の為、国の為に想像を絶する苦難と戦い

若くして散った諸霊に思いを馳せながら感謝し、深い祈りを捧げています。

終わりに、水窪町史「出征軍人を送る」の項より抜粋、一読して欲しく加えます。

「出征軍人の中には一人息子もあった。一家の柱として父母や妻子を養っておられる方もあった。また少年の面影を残している青年もあった。夜には親戚、組合、友人が集まって壮行会を催し、「後のことは心配なく立派な手柄を立ててくれ」とみんなで励ました。地区の婦人の人々は弾よけの腹巻、千人針を縫った。死（四）線を越えるようと五銭玉（当時の通貨）を、また苦（九）線を越えるようにとの願いを込めて十銭玉をいくらか縫い込んだ。隣組の人々は手分けで百社参りをして戦勝を祈願した。

出征の日には、軍服に寄せ書きの日の丸の旗をたすきにつけ、「祝出征武勲長久〇〇〇〇君」と大書きしたのぼり幡を何本も立てて、まず氏神様にお参りして武勲長久を祈り、その後小学校の校庭に集まり盛大な歓送式を行った。続いて大きな力強い声で軍歌を歌い小旗を振りながら、半島（地名ハンジマ）の万歳岩までお見送りをした。歓呼の声に送られていく若者の姿は実に頼もしくも又悲壮であった。

あれから長い年月は流れ去った。万歳岩も無くなった。しかし、あの勇ましい姿、歌声万歳の叫び、旗の波、そして最後の別れを惜しまれる肉親の人々の悲痛な姿は、今も忘れる事は出来ない。」

遺族会への思い

湖西市遺族会 近藤伊織

太平洋戦争の開戦から2か月後、私は浜名湖畔片田舎の町医者の子として生を受けました。勝てる訳がない戦争に、父は1歳に満たない私を残してフィリピンに軍医として出征しますがどれ程心残りだったでしょう。その悲しみの中で母は肺結核に罹り、戦時中の事、ろくな治療も出来ず若い命を落としました。父は昭和20年9月、ルソン島北部の山奥からバギオに引き上げる途中風土病に倒れ、戦友を先に行かせたまま山中で消息を絶ちました。

私には父と母の記憶は全くありません。叔母達から断片的に聞いた両親の我が子への愛と、理不尽にも夫婦を引き裂かれた悲しみと辛さが、私が戦争を憎み遺族会を維持する原点となっている気がします。

5年程前の事です。市の賀詞交換会に出席した時、ある市議員にあなたは遺族会長の名札を付けているが何の遺族ですかと聞かれました。私は暫く絶句した後戦没者ですと答えましたが、行政に深く関わる市議でさえ戦争があった事も遺族会にも無関心なのが現実でした。

平和であった平成から新元号の令和に変わり激動の昭和が又一つ遠ざかりましたが、私達遺族は生きている限り戦後が終わる事はありません。集団的自衛権の閣議決定に続き憲法改正を言い続け、防衛費無制限の政府に私達遺族の気持ち伝わっているとはとても思えません。兵力を拡大し自国の主張ばかりして相手を罵りあう国同士が平和に共存できる訳がないのです。世界の平和と日本国の存続の為に、遺族会としての考え、意見を政府に堂々と伝えてもらいたい。ただ黙っているだけの遺族会では遺族会の存在価値はありません。

戦争という狂気に翻弄され、残した家族の為に願ったこの平和な日本を私達の子や孫にどんな理由があろうとも残していかなければなりません。私は既に父と母の2人の命を足してもなお余りある人生を生きました。これからの余生は今の遺族会を大切に、戦没者の御霊に今日あることの感謝とご冥福をお祈りし、戦争を二度と起こさない平和な世の中の為に微力を尽くしていきたいと思えます。

(令和2年4月発行の静岡県遺族会報より)

殉難学徒への思い

浜松市遺族会 阿部俊子

昭和 19 年春、動員学徒として相生町の鈴木織機に派遣された私達四年生は、毎日慣れない旋盤と懸命に取り組む日々を繰り返していました。暑い夏も終わって秋の初めだったのでしょうか。会社の好意で一日観劇の会が催されました。

会社の製造部長さんの挨拶、軍から監督に見えていた憲兵の方のお話があった後、校長先生が壇上に立たれました。何時にも似ぬはげしい口調でこうおっしゃいました。

「日本を戦争に巻き込んだのは私達大人である。貴女方にペンをハンマーに替えて工場に行けと命令したのも私達大人である。貴女方には直接責任はないのに黙々と国の為に純粋な気持ちで励んでいてくれる。どんなにか書物に飢え、活字に飢えているであろうか。真剣に働く貴女方を見るにしのびない。戦争を起こした日本をこのような状態にした全責任は私達大人にある…」

あとの言葉は聞いていませんでした。私はただ呆然と校長先生のお顔を見つめました。あの状態の時に、あのような言葉を口にする人はいなかったのです。誰も彼もが国土防衛第一、ひたすら戦うこと、勝つことだけを叫び、またそれに慣らされていた私は、憲兵の方や会社の人達の前にあって、生徒を守ろうとしておられる様な校長先生のお言葉に限りない大きな愛を感じたのです。五郎劇の他愛ない笑いの渦の中で、私は幾度か校長先生のお言葉を反芻^{はんすう}してみました。そしてよい先生の許で育てられて幸せであったと思ったのです。

「昭和 20 年 4 月 30 日、5 月 19 日の両日、米機の無差別攻撃のために、学業半ばにして尊い犠牲となった若き生徒たちを偲び、

長い西遠女子学園の校長生活の中で最大の痛恨事は、可愛い生徒を 29 人も戦争の犠牲にしてしまったことだ。卒業免状ももらえず、冷たい砲弾を抱いて、何の楽しい青春も味わえず、御国のために死んで行った可哀想な子供達…本当にたまらない気持ちがするのです。」

と心境を吐露され、

「昭和 19 年、戦争はいよいよ激しく、国内戦禍はいよいよ拡大されて、通学は危険となり、登校は中止されて、学区は各通学区域毎に分散されて、寺院や父兄の住宅を借りてわずかに続けられた。昭和 19 年の春には、遂に中等学校にも学徒動員令がくだり、中学一年生は農家の手伝い、二年生以上はそれぞれ工場に動員されて、汗と涙と血の苦難な生活が続けられた。生徒たちの工場の生活は、朝 7 時に出勤、学徒の矜持をすてさせず、たとえ僅か 1 時間でも工場の机に向かい、授業が終わると、『君見ずや、明日は散りなん花だにも、力の限りひとときは咲く』の歌を朗読して、工場の現場にそれぞれ散って行って、

油と汗にまみれながら彼女たちは慣れない仕事に、黙々と働き続けた。

かくして、昭和 20 年 4 月 30 日、5 月 19 日の両日、米機の無差別攻撃のために、尊い犠牲となって若い命の幕を閉じた。

ただ彼女たちは、学業半ばにしてたおれたので、学校法規上、卒業生として扱うことが許されず、従って、卒業生名簿に記載することができなかった。祖国のための、その尊い犠牲を思えば、それはあまりに悲惨であり、痛ましいことである。」と殉難学徒に思いを馳せている。

(平成 12 年発行の浜松市戦争戦災体験の記録より)

竹の子べんとう

浜松市遺族会 天野ふ志江

昭和 20 年 4 月 4 日夜、広沢の我が家の戸を叩く音がしました。誰かと思っ
て出てみると、満州鉄道に単身赴任していた夫でした。突然でしたので驚くと、
長男の衛から手紙をもらったので帰ってきたというのです。

…浜松にも何回か空襲があり、いつどうなるかわかりません。お父さんに会
いたいから帰ってきてください。…という手紙の内容だったそうです。

この手紙のおかげで、夫婦と子供 4 人の何年ぶりかの一家団らんとなりました。
この時、衛は浜松工業学校の生徒で 15 歳、夫が国を衛ようと名付けま
した。親の口からいうのもなんですが、親孝行で、できのよい子でした。私は
生まれも育ちも樺太で、浜松の地に知り合いはいませんでした。衛君のおか
あさんならということで信用してくださる方もおりました。

戦いの中でも季節は春を迎え竹の子が出回り始めました。夫も浜松に帰った
ことだし、乏しい米を集めて竹の子ごはんをつくりました。その頃の浜工は寺
島町にありましたが勉強どころではなく、学徒動員で金原用水を兵隊さんと一
緒に掘っていました。

4 月 30 日の朝、衛はほころびをつくろった地下たびに学生服、竹の子ごは
んのお弁当をもって元気に出かけました。そして数時間後物言わぬ人になりま
した。浜工では生徒 5 人、先生 1 人が亡くなり、衛は艦載機の爆撃による爆風
で服が木にひっかかっていたそうです。竹の子ごはんのお弁当がそのまま残っ
ていました。この大好きな竹の子ごはんのお弁当を食べられずに、これからも
永久に食べることはない衛を思って泣きました。体がバラバラになった人もい
たそうですが、衛は傷一つありませんでした。ですが焼場に行く時、座敷から
玄関までおどろくほどたくさんの鼻血を出しました。若くして死ななければな
らなかった衛との別れと未練のように思われ、今でもその光景は忘れられませ

ん。

5月17日、夫は満州を引き上げることを決意して残務処理のため中国へ行きました。それっきりです。知り合いも少ない浜松に母子4人とお腹の赤ん坊が残りました。

6月17日の浜松大空襲では焼き出され、道一つ隔てた付属小学校は焼け残り、1週間そこで暮らしました。舞阪での半年の疎開暮らし、布橋での戦後生活、悲しんでいる暇はなく、今日のごはんをどうするかという毎日でした。「三度のご飯を二度にしてもお母さんと離れちゃいけない。死ぬときは一緒だ」自分にも子供にも言い聞かせました。まわりの人にも助けられ、好きで習った洋裁で身をたて、寝る間も惜しんで働きました。

月日のたつのは早いもので、衛の手紙のおかげで誕生した子も50歳になろうとしています。でも何年たとうとも夫も衛も心から離れることはなく、毎晩仏壇に話しかけています。

(平成12年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より)

戦争とその家族

浜松市遺族会 鶴飼重雄

「国破れて山河在り」の詩を地で行く、昭和20年9月21日零時30分頃、掛川の戦友と車中で別れてたった一人で浜松駅に降り立った。鹿児島より軍務の合間に民間人との話で、浜松方面が「空襲や艦砲射撃」でかなり被害のあったことは聞いていた。現実はこの光景を見た時は、「驚愕」と「悲しみ」で一瞬たじろいだ。ホームはほぼそのままであったが、屋根があるわけでなく、駅舎も跡形もなかった。周囲を見回しても、「灯火」一つあるわけでなく、わずかに鴨江方面と思われる方向に灯火が5つ、6つ。人が住んでいる証だ。これで少しは「ほっと」した。しかし、終戦より既に1カ月余り経過しているのに「焼け跡」特有の臭気が鼻につき、空襲のすさまじさが想像できた。我に返り改札口へと出た。夜間ということから誰ひとり居ない。駅前広場を出てから、焼ける前の家並みの記憶をたどりながら板屋町道路に入った。ふと夜空を見上げると、おぼろ月夜のわずかな明るさの中を霧雨が降ってきた。が、衣服を濡らす程でもなかった。今でも物寂しいあの光景を思い出すが、不思議と「恐ろしい」とは思わなかった。家に向って夢中で歩きながら、「果たして家はあるだろうか?」「無い時はどうしようか?」と次第に「期待」と「不安」の気持ちに襲われながら歩くほどに、まばらに残る家が見えてきた。勇気百倍、やっと嬉しや焼け残っていた我が家に戻った。何やら人の居る気配がしたので雨戸を二、三度

叩いてみたら、なんと見知らぬ人が戸を開けて出てきたので、一瞬不安な気持ちになった。すぐ氏名を名乗って、「ただ今復員して、浜松駅に降りたばかりである」との事情を説明し、ひょっとしたら、家族の消息を知っているかも知れないと思い、重ねて尋ねたところ、空襲で、お父さんと、子供さんが亡くなった事を話してくれた。

後日の話だが、当時ここのご主人は、6人も亡くなった事を知っていたが、何も知らずに来た私に同情して、真相を秘していたことが判明した。その細かい配慮に感謝した。ご主人も、夜中で気の毒に思ったのか、「今夜は泊って、明日訪ねた方がよいのでは」との暖かなお言葉に、私も「軒先でもよいから」と言ったが、家族同様に泊めてくださった。勝手知った我が家に、7ヶ月ぶりに横になったが、ご主人の話を聞いてから寝つけず、それでもしばらくまどろんでいたら夜が明けた。朝起きてからご主人が、近所の人に母の疎開先を知っている人が居るからと聞いてくれた。折よく近所の渥美さんというお爺さんが案内役をかってくれ、同道して頂いた。

遠鉄小林駅から東へ歩いて30分位のところ。「浜名郡中瀬村古中瀬」という所だった。楨囲いのかなり広い屋敷に着いた。門を入り15、6歩歩いて静かに表戸を開けたら、ちょうど母が秋のお彼岸を迎えて、仏様に供えるお饅頭をこしらえている最中であつた。母にやっと無事復員して来たことや、昨夜の出来事を話したところ、母から初めて「留守家族6人が全員亡くなったこと」を告げられ、一瞬、奈落の底に突き落とされた様なショックが全身を走った。

「母^{いわ}曰く」「お前もこれから大変だろうが、自棄^{やけ}をおこさず一生懸命やってくれ」との言葉が返ってきた。お饅頭づくりをしている間に疎開先の方にもお世話になったお礼を述べる。のち、部屋の片隅に置いてあつた本箱の中から、「白木の御位牌」を取り出して、6人の戒名を一人ひとり詳しく教えてくれた。しばらくその御位牌を押し戴いていると、とめどもなく涙が出て、在りし日のあの和やかな一家の面影が偲ばれた。残された「4つと、2つの妹」が無心に私の姿を見つめていた。

それからしばらくの間は母と毎日、6月18日当時の、父・弟・妹達の殉難の日々を語り合うのが日課であつた。母の話によると、19日早朝、隣組の方の「一家全滅の知らせ」に急いで入院先の日赤病院に駆けつけた時、2番目の妹は息も絶え絶えに「お母さんと分かるけど、全然顔は見えない」と…。内臓損傷で排尿は既に血尿であつたそうだ。比較的元気だつた2人の小学生の弟達も、火傷をした父をリヤカーで運んだと誇らしげに何回も何回も母に語つたとか。

その父も、燃え散る油脂を体から取り払おうとして、熱い熱いと言いながら、防火用水につかってそのまま息を引き取ったらしい。母は19日、病院で終日付き添って看護していたそうだが、夜は燈火管制で病室は暗く、あちらこちらで絶え間ないうめき声やら助けを呼ぶ声などで、この世の地獄というものがあるならば、これが本当の「生地獄」というものだと言った。当時の「治療」は薬品不足で、現在ならば治る負傷も、「破傷風」のために2人の弟も、翌20日相次いで息を引き取り、神も仏もないと感じたそうだ。そんな気丈な母と二、三度「姫路の慰霊祭」に参加したこともあったが、「86歳」で一生を全うした。

「日本の大陸の生命線、満州国」とか、子供には理解できないスローガンが毎年毎年叫ばれ、拳句の果ては「支那事変」となり、「早期解決・不拡大方針」の政府声明もなんのその、今度は「太平洋戦争」につながって敗戦となり、幾多の戦争犠牲者を出したことは、今更言うまでもなく、まぎれもない歴史的事実である。

この記録は、私と健気に戦後50年の歳月を頑張ってきた「母の体験談」であるが、我が家としても末永く語り継がれるよう祈念して筆を措く。

(平成12年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より)

戦争と私

浜松市遺族会 小山敦子

連日の空襲警報発令で、昼夜を問わず防災頭巾にリュックサックの姿で、家の床下に掘った防空壕の中に居る時間が多くなりました。

忘れもしない、あの6月18日の夜は、まさに非常事態の発生でした。

焼夷弾が落下し、火災が発生したので、「みんな、火のない所へ逃げよう」ということになり、父と兄は家の近くへ、母と長女、次女、弟、私達は隣のおばあさんと一緒にとにかく遠くへ逃げた。夜が明けてみると、どこだか知らない所の田んぼ道にいました。周りを見ると一緒に逃げたはずの家族の姿はなく、私は逃げる途中でみんなとはぐれてしまったのです。家族とはぐれてしまって困っていた時、私の困っている表情を見て女の人が声を掛けてくれました。私の上着につけてあった名札を見て、私の家まで連れて帰ってくれました。後で知った事ですが「ヤマヤ」のお嬢さんだったそうです。

町は一夜にして焼け野原と化してしまい、9歳の私には何が何だかさっぱり分かりませんでした。父、兄、長女、弟たちとはすぐに会えましたが、母と次女はお昼を過ぎても消息が不明でした。私達はとりあえず母の実家である館山

寺の家へ行く事にしました。

行く途中、至る所に焼夷弾の筒や不発弾らしきものが落ちており、爆撃のすさまじさを感じました。行き交う人々の中に、もしや母と次女が居ないかと一生懸命探しながら歩きました。途中、鳥居先という所で差し入れのおにぎりを頂いた時のおいしかった事。

母の実家に着いてみると、他に2家族の人達が来ていて、実家の家族が12人あり、まさに大家族の生活でありました。2日後、母と次女が防空壕の中で焼死していたという知らせがありました。

その後、いつまでも母の実家に世話になっている訳にもいかず、ちょうど磐田に空室があったのでそこに移り、やがて浜松に形ばかりの家を建てて住むようになりました。しかし、雨が降ると雨が漏り、晴れるとベニヤ板の屋根がそって太陽が差し込むありさまでした。また、物資の足りない時勢でしたので、時には、米津の浜へ行き、石油缶で海水を煮詰めて塩を作ったり、アイロンの箱の内側に鉄板を張り、パンを焼いたりした事もありました。

その後、姉は住み込みの見習い看護婦として勤めに行き、弟は他所へもらわれて行き、やがて私も、磐田の親戚の家へ行くことになり、家族がバラバラになってしまいました。しばらくして私は、今度は静岡県と長野県の境の、本当に山また山を越えた山村の家へ行くことになりました。その家での私の仕事は、当時、山村では電灯がなく、代わりにランプを使っていたので、その「ホヤ」というガラス管みたいな物をきれいにする事、回覧板を山を越えた約5km程離れた家まで見せに行き、そしてそれを今度は、分教場に届ける事でした。いつも犬と一緒に、時々熊の親子、鹿、猪、うさぎなどを見ました。はじめは、それが本物とは思えず、月日が経つうちに本物であると知り怖くなりました。

その家のおじさんは猟師で、熊や猪や鹿などを獲り、毛皮を売り、肉は食べていました。私がいつも食べていた肉は、その肉かと思ったら、食事がのどを通らなくなったのでその家でも困ってしまい、弟のいる町の近くの家に養女に出されました。

その頃、浜松で見習い看護婦として働いていた姉が亡くなったという知らせがありました。死の直前まで一生懸命働いて、その為の過労死と分かりました。あの空襲から3年後のことでした。結局は姉の死も、「戦争の犠牲」になったと思うと、かわいそうで、残念でたまりませんでした。

養女として入った時は、「栄養失調」や、たらい回しにされていたという事から同情してくれましたが、私としては、いろいろな家にお世話になったお陰

で、生きのびられたという感謝の気持ちで一杯でした。

母や姉が亡くなってから、もう 50 余年になります。現在でも、時々母や姉の面影を偲び、「生きていたらなあ」と涙することがあります。「戦争さえなければ」と今更いっても「ぐち」になりますが、こんな苦労や体験は、私一人で沢山だと大声で叫びたい気持ちでいっぱいです。

(平成 12 年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より)

私の人生

浜松市遺族会 佐藤康一郎

戦後 50 数年を経た今日、戦後の混乱期を何とか乗り切って、「古希」を過ぎて遠からず「喜寿」を迎えようとしている今、安穏な生活を頼っても世相の荒廃は目を覆うものがあります。そして、国家の存亡に一命を賭けたことを誇りに思い、今日あることに感謝している現在です。

昭和 12 年戦争が始まった頃から、世の中がだんだん活気づいたというのか全て忙しくなってきました。私の家は「煉瓦工務店」で、従業員も大勢なもので、私も早く父の片腕になるようにと名古屋工業学校に入学し、下宿することになりました。幸せ一杯の家庭を後に、戦争一色となり「食糧等も配給制」となった統制時代の一人旅でした。学校でも勉強するのは僅かで、農家の手伝い、荒地の開拓に行くくらいで、毎日のように「空襲と食糧」で苦労するようになりました。そして、軍需工場に学徒動員になり、勉強に来たのに兵器を作る手伝いなんて気の進まない毎日でした。空襲も激しくなり下宿にも居られなくなりました。志願兵の募集もあったので、「陸軍幹部候補生」の試験を受けて入隊する事になりました。

名古屋駅前で学校全員の見送り、胴上げを受け、「小豆島の暁部隊で 4 ヶ月訓練」の後、「特攻要員」として江田島に移され特攻訓練に入りました。爆雷を抱えて敵の艦に体当たりするのです。実家に便りを出すのですが全く返事がなく、落ち着かない毎日でした。B29 がものすごく来るようになって、呉から瀬戸内海に入って、岩国の方へ抜けていく何百機という毎日の空襲でした。

そして 8 月のあの原子爆弾でした。直ちに広島へ集合するようにとの命令で宇品から広島市内へ入りました。栈橋には死骸が俵の様に何ヶ所にも積み重ねてあり、市内は瓦礫の原野と化し、道路と思われる両側には死体の列、家の下敷きで死んでいる人、歩いている人は真っ黒に焼きただれ、「我が子、我が親」の名を叫びながら、行く宛のない死の旅路か。「重傷者は似の島」へ舟で運び、我々の隊は死体処理班とのことで、死体を担架で川西の穴まで運びました。

宇品より千田町、昭和町、国泰寺町と7日間、夜は駅近くの屋上に寝ていました。火事で5ヶ所くらいが燃え続けても消す人もいない状態でした。時々玄米のおにぎりの配給を受け、水道管の溜水等^{ためみず}を飲んで、ものすごく暑い8月の炎天下で「暑さと疲れ」で「放射能」とも知らずに吸いたいただけ吸って身体がくたくたになりやっと隊へ戻りました。

そして間もなく「終戦の詔勅^{しやうちやく}」で「家に帰ることができる」と力が湧き元気づきました。すると中隊長から、「一家七人焼死（6月18日）」という官報を渡された時は言葉も出ませんでした。特攻隊に出動が決まっていたので知らせなかったと詫びられました。そして、江田島のお寺で「四十九日の法要」を行って下さった五條大尉を忘れる事は出来ません。

9月12日貨車で復員しました。浜松駅に降りるとやはり広島と同じ焼け野原で、戦禍の惨めさを覚えました。そして、実家の焼け跡に立った時、「偉大な父母は帰って来ない」今の自分はどうすればよいのかと考えると、身体が動かなくなりました。復員する時に頂いた2年分の給料も、駅で「一コ十円のおにぎり」では心細くなりました。一応落ち着く所を捜さなければと歩き回りました。市役所へ行っても親戚もわからず、駅の休憩所で話しかけてくれたおばさんから、「村櫛へ行ってみなさい」と言われ、叔母さんの家に行ってみました。暫く叔母の家に世話になっていましたが、いつまでも世話になってもおられず、昔の土地を借りてバラックを建て、父のやっていた仕事を修行しながら始めました。静岡、熱海、東京と修行に歩きました。

放射能を浴びているためか身体が弱く、その後は病気ばかりしています。昭和22年には渡辺病院に「急性腎臓炎」で1ヶ月、3月15日には「肺浸潤^{しんじゆん}」で小島病院で1ヶ月。最近目は悪くて医大病院へ70日間入院し、現在通院中で、私も正しく戦争被害者です。

（平成12年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

お昼はじゃがいもひとつ

浜松市遺族会 杉浦芳己

子供達に、今日のお昼は「じゃがいも」でどうかと聞いたとしたら、「いやだ」「いらぬ」「店でお弁当を買ってくる」と返事が返ってくると思います。

50余年前（昭和20年1月）に私は、静岡第二師範学校の生徒として、学徒動員令により、浜名郡新居町にあった中島飛行機製作所新居工場で、エンジンの部品焼入れに「1日3交替」で働きながら学習や教練を受けていました。その期間、食事は朝昼晩「食券」にて食堂の前に行列をつくり、ドンブリと皿を

受け取ってテーブルにつき、ポケットの箸を取り出して夢中で食べ、短い時間で食事を終えました。当時 16 歳の私達は食欲旺盛で、いくら食べても満腹感をもった時はありませんでした。

ドングリの中はいつも大豆の粕、^{かす}高粱、^{こうりゃん}さつまいもなどが米といっしょに炊き込んであり半分程の量しか入っていません。また一日のうち一回は「すいとん」といって、おつゆの中に野菜が入り、うどん粉を練っただんごのようなかたまりが、3つほど入ったものをいただいでいました。だれも文句を言う人はいませんが、常に腹がへった状態でした。

日増しに食糧事情が悪く、たまに肉がお皿に乗ったおかずは、ひよこの焼き鳥であったり、野菜と思って食べたものはさつまいもの葉でありました。

7月の始め、夜勤の私は寮の部屋で寝ていました。午前9時頃だと思えます。空襲警報のサイレンと同時に物凄い爆発音で、あわてて布団にもぐりこみ上から押される感じでのぞき見をしましたが見えませんが、きな臭い匂いが漂い、これは大変だと気づき布団からはい出しましたが、部屋の出口が見つかりません。同僚の声でやっと出口に出てからまた大変です。廊下は無残にも天井は落ち、壁や窓枠もふっとび歩けません。かすかに見えた階段に向って夢中ではい出ました。隣の寮がロケット弾の直撃を受け、私達の寮も爆風でメチャメチャに破壊されたことが解りました。その後、近くの寺に集合し、寮が全滅したので鷺津工場の寮に順次移ることになったのですが、まだ昼食をとっていないことがわかって、食堂に連絡したら、大きなざるに「ゆでたじゃがいも」を入れて運んでくれました。食堂のおばさんは、一つずつ分けてくれた時もう一つと片方の手を出すと払いのけ立ち去りました。直径5cm位、手の平にちょこんと乗ったじゃがいも一つ、寂しく、哀れに思う間もなく、皮をむかずに食べてしまいました。これでお昼ごはんが終わりです。当時、食べ盛りの私達は仕方なく荷物を整理し、新居から歩いて鷺津に向いました。

国民全体が苦難の時、「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵」と、我慢を通しました。それでも標準以上の体格となり、丈夫に育ってきたことが不思議と思うことがあります。

現在、食べ物の心配もなく、自由に好きな物が腹いっぱい、いつでも食べられる子供達は、過去に「食糧難の時代」があったことなど知らずに生活しています。食べ物や調理する人に感謝する気持ちを是非持ってもらいたいと願っています。

(平成12年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より)

残念・無念な思い出

浜松市遺族会 鈴木東二郎

私も、80年この世に生をうけ、思えば50有余年前、私のまわりに戦争という文字がだんだん身近に感じる時代でした。

友人が昭和14年頃今の中国で戦死し、戦争のことを身近に感じたものでした。

当時、国家総動員法ができ、忘れもしない昭和17年に、私のところに豊川の海軍工廠へ入廠の徴用令が来ました。その時、父が海軍工廠の門前まで送って来て何か言ったと思いますが、今となっては思い出す由もありません。

その日浜松駅で宮沢君という人と会い、彼と別れるまで一緒にいました。彼は、支那事変で兵隊として負傷して内地送還になり、傷も治り何年にもならないのに今度は徴用工員として入廠しましたが、その時、彼は政府の行政に対し納得が出来ないとよく言っていました。彼とは唄の文句ではないが、血肉を分けた仲のように良く気が合ったものでした。その彼に、昭和18年に再び召集令状が来て「今度は、生きて日本の土を踏むのは無理だろう」と言って、下宿の壁に「海ゆかば、水づく屍」の文句を書いて出征しました。私はあの時の別れが今でも瞼の中にはっきり浮かんでいます。

戦後、彼の親から戦死のことを聞き、「諸行無常」、どうしてこうも世の中が不公平なのか腹が立ちました。

私は昭和19年4月結婚しました。当時は誰もが耐乏生活でした。その私にも昭和20年4月召集令状が来て名古屋の部隊に入隊。護国部隊として、浜北の岩水寺に駐屯しました。それから8月15日分遣先の役場で終戦のラジオを聞き、戦争の終わった事を知りました。分遣先の整理をすませ本隊の岩水寺に合流しました。

9月になってから一通の葉書が私の所に来ました。文面は、父が6月の空襲で焼死、母は実家で病死になった内容でした。当時のことを思うと呆然自失、世の中はどうなっているのかと疑うよりほかはなかったです。当時の葉書の日付を見ると、部隊の動きが察知されないよう、何事も自由が許されない世の中でした。

私は、隊の残務整理が残っていたが休暇を取り、浜松まで来たが今のようバスが無く、歩いて母の実家まで行きました。

母の実家に着いた時、母の葬儀も済み、私の知らない所での色々な出来事を聞きました。それは母の悲劇そのものでした。夫を空襲という文字の中に一瞬

のうちに亡くし、家は丸焼けとなり何も残っていない中で、母は辛い毎日であった事と思います。

焼け出されて、親類を頼り身を寄せて居たが、そこもままならず私の妻の実家に世話になりました。親切にしてくださいましたが、私にしてみれば嫁の実家ではあるが心苦しい事でした。

母は自分で判断して、一番下の弟を連れて自分の実家に行ったと思うが、それも安住の場所ではなかったらしい。その頃、急に体調が悪くなり、当時は終戦直後で食事、医者、薬とて十分ではなく、病気になれば最悪の所へ行くしかなかったと思うと、母の残念無念、心中を察して余りある事でした。

夫を空襲の中で失い、70日余り過ぎた8月末に亡くなったことを聞き涙も出ませんでした。

母は51歳で生涯を終え、現在ならこれから楽しむ年なのに、それまで一生懸命働き、戦争の余波を受け不運な人生を終わり、私としては今でも忘れられません。

当時は父も母も土葬だったので、寺の住職の意見を聞き、現在の墓の中にその場所の土を入れ供養しました。

あれから54年過ぎた現在、あのことはどうにもならない時代であり、どうにもできない事であったと、自分の心の中では判っているが、それでも残念、無念でなりません。過ぎた日のこの出来事は、私の心と臉に残るだろう、いつまでも…。
(平成12年発行の浜松市戦争戦災体験の記録より)

西部ニューギニア地域戦跡巡拝団に参加して

浜松市遺族会 加藤えい

長い間の念願であった西部ニューギニア地域戦跡巡拝団の総勢60名が成田空港を出発したのは昭和56年10月16日でありました。宿泊先のバリ島デンパサール、ハイアットホテルに着きここでマノクワリ、ジャヤブラ、ビアク島の3班に分かれ、翌17日私達一行19名はビアク班に加わり最初の追悼がセレベス島の海岸で行われました。

18日は待ちに待った夫の眠るビアク島に向いました。赤道直下40度近い灼熱地獄のような島に着いた時は、夫がどんな思いでこの地を踏んだのだろうか、当時を偲びビアクでの第一夜はなかなか眠れませんでした。

島内にある南洞窟と呼ばれる巨大な洞穴には約2,000名にも及ぶ日本兵が有力な連合軍の空軍や海軍部隊、火焰放射器などにより強烈な砲撃を受け焼き殺

されたと伝えられております。ホテル近くの海岸には砲弾や戦車の残骸がそのまま、山際には日米両軍が交戦したと思われる当時の兵器等が、まさに戦場の墓場であり、無残な姿で残されておりました。

19日はモワメルへ向い、白い珊瑚礁の砂浜で追悼が行われました。眼前にはやはり当時のままの戦車の残骸があり、戦争の激しさを物語っているのが感じられました。

夫の戦跡は島の北側コリム湾への道を左折した未踏の地とも言われた所に水源地農場あとのワホールがあり、炎天下車を降りた私はその場に呆然と佇んでしまいました。

戦うには弾薬なく、食べるには食糧もなく、悪疫に苦しみ、遂には持久戦に耐えられず日本兵 37 名が餓死したとのこと。夫もその中の一人でした。決戦の様相が異様なまでに私の脳裏をよぎっていきました。同じ部隊の岩手県の松井様と夫の慰霊祭がここで行われました。朝食の後、皆様のご好意でおにぎりをつくっていただき、煙草、菓子、お酒など、又持参していった花輪、写真、お供え物を供え、全員が読経する中に新たな涙にむせび「あなたお迎えに参りました。いっしょに帰りましょう。みんなが待っておりますよ」と語りかけるように合掌しました。日程を全部終えて帰国したのは 10 月 24 日でした。

かつては激戦地であったビアク島は生還者も皆無とさえ言われ、島内の住民感情もわからず不安におびえながらの訪島でありましたが、現地人に大変あたたかく迎えられ無事帰国できましたことを何より嬉しく思いました。

しかし戦後 36 年経た今日も、なお島の生活は乏しく、現在国内に住んでいる私達には到底耐えられないような生活程度の低さに驚きました。この地で散華していった父、兄、夫たちの心情は如何ばかりであったかと思い、再度の訪島を誓いつつ日本遺族会の皆様、又同行された遺族の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。ほんとうに有難うございました。

(昭和 57 年発行の浜松市遺族会会報より)

浜松市街大火災のころ

浜松市遺族会 伊藤ゆきゑ

昭和 17 年に主人が召集されましたが、その少し前に浜松市街地から少し離れた田舎に移り住むようになりました。19 年頃から浜松市内には焼夷弾を始めとする爆弾が落とされ、田舎から見ると市内全体が真っ赤に燃え上がり、今頃市内に住んでいたならば二人の子供を抱えてどうなっていたのかと、ゾッとする思いの日々でした。

何回かの空襲で主人が勤めていた会社も私の実家も爆弾で吹き飛んでしまい、とても悲しかったことが今でも心に焼き付いております。

連合軍の艦船による艦砲射撃の時は、始めに飛行機が市内の上空で照明弾を落とし、一時は真昼のようにしてから大砲を打ち込んでくるので、私は下の子供を背負い、上の子供の手を引いて軍隊が作った山の防空壕に急ぎました。

防空壕の中は村の人達で一杯の中、艦砲射撃の弾が近くに落ちると山全体が揺れ動き、頭の上に土がバラバラと落ちて子供達を抱き抱えながら生きた心地がなく、ただ震えて砲撃が止むのを祈るばかりでした。壕の中にいたそれぞれの家族もみな同じであったと思いますが、中にはお念仏を唱える人もあり大変怖い毎日でした。

戦時中は何もかもが配給の時代でした。そのような中で近くのお百姓さんはわが家の生活がわかるため、食糧を高くは売れないためでしょう売り惜しみをされることが多く、結局少し離れた知らない農家まで行って自分のきものと交換してもらって何とか凌いで生活してきました。乳母車に子供と一升瓶を乗せて、3 km 程離れた遠州灘の海岸まで海水を汲みに行きその海水を煮詰めて醤油代わりに使っておりました。

お百姓仕事は未経験でしたが、幸いにも山の上のお茶畑を貸してくれる方がありましてそこを開墾して、そばとさつま芋を植えやっとな収穫したら、たしか農業委員の方だったと思いますが「この量は大人1人と子供2人が食べていける量だから1ヶ月お米の配給を止める」と言われ、育ち盛りの子供にお米がなくてほと、泣くにも泣けない口惜しく情けない思いをしたことがありました。近くの農業委員の役員の方にわけを話してやっとな少しだけお米の配給を受けることが出来ました。

その頃は芋だけではなくさつま芋のつるまで重要な食糧となり、僅かばかりのお米と混ぜて食べていた頃は本当に生きていくのに精一杯の日々でした。

終戦直後、ラジオを持っている近くの人から「ラバウルから兵隊さんが帰って来ると放送があったので、ご主人も直に帰って来るよ」と伝えられ、それからの毎日どんなに待ったことでしょう…

夜中に遠くから聞こえてくる靴の音に聞き耳をたてていると、家の前を通り過ぎ遠くに去って行く…そんな繰り返しがなんとも空しかったことでした。……

昭和55年10月ラバウルから復員された方々と遺族3名の29名が南太平洋戦没者慰霊巡拝団として、ラバウルを訪問することが出来ました。官邸山と言

うところにある日本政府とパプアニューギニア政府の協力により建てられたばかりの碑の前で、慰霊祭が行われました。戦死された方々の御霊もどんなにか喜んで頂けたことかと思えます。

主人が戦死したタウリル農場付近を探しましたがわからずに、諦めて帰りかけた時、50歳過ぎの現地の方と偶然にもめぐりあい「タウリル農場は自分の部落だ」と言って案内してくれました。今は椰子林になっているが兵舎が建っていたという場所に、家から持ってきたお米、塩、水、ローソク、線香をあげ般若心経を唱え冥福を祈ることが出来ました。

ラバウルに来ただけでも嬉しく思いましたが、同行していただいた皆様のご協力のお陰で主人が眠るタウリルまで行くことが出来まして感慨無量でした。

昭和17年に主人に召集令状が来て以来、16年生まれの長男、戦地に出立してから生まれた次男の二人を育て、衣食住の苦労も多々ありましたが、丈夫で何事もなく育てくれたことだけが、亡き主人に対して胸を張って伝えられることでした。

やすらかに眠って下さい。

運命の昭和20年6月18日浜松大空襲

浜松市遺族会 奥村利彦

尾張町の自宅から、上池川町の家へ疎開してきたのは一昨日（6月10日）であった。

この家は父の友人（松井航空の高橋さん）が信州の実家へ疎開するので、いざと言うときのことを考えて父が借りることにした家であった。私は浜商二年13歳であった。学校にも近く、長男でもあり祖父、祖母の世話をするとということで一緒に住むことになった。夏でもあり、さしあたり布団・ナベ・釜・勝手道具類を乳母車に積んで、六間道路の坂道を上がった追分交番の裏の借家へ移った。翌日17日も学校から帰ると、尾張町の家から足りないものを乳母車に乗せて持ってきた。当時は空襲も激しさを増し、各家では田舎へ疎開が盛んに行なわれていた。

私の家ではやっと所帯道具を、母の実家の上石田の家へ持って行こうと荷造りが済み、家の中の防空壕の上に積み込まれていた。大八車（当時の唯一の輸送手段）が何時借りられるか、父の休暇が何時とれるか分からないので、傘屋の店先に疎開道具が積んであった。その下は防空壕であった。この防空壕は店

の（八畳）床下に、父が会社（松井航空＝三菱重工の下請け会社）から帰って来て食事の後、毎夜私と一緒に掘ったものであった。以前に作ったコンクリートづくりの防空壕があったが、出入り口が家の中にあったので家屋が倒壊した場合脱出できない危険があったため、新たに出入口を道路に作ったものであった、広さは約六畳くらいで、非常用の米・水・バケツ・梅干しなどと一緒に空襲があると家族で退避して、警報の解除を待ったものである。

6月17日は日曜日であった。日本晴れの蒸し暑い日であった。午前10時ごろアメリカのB29、一機が飛んできてビラが撒かれた。「マリアナ時報」というルビつきの日本字の豆新聞が二種類撒かれた。フィリピン戦況・東都心臓部戦災状況・沖縄戦の不安な記事などが書かれていたらしい。この日は珍しく昼間の空襲はなかった。嵐の前の静けさ、不気味なうちに時は過ぎて行った。

今日もお客さん（B29の空襲のこと）が来るのかな…と思いながら9時頃寢床に入った。このころは夜は空襲が多く夜中に起こされるので、眠れる時はなるべく早く寝た。一寝入りした午前零時ごろ、突如警戒警報のサイレンがけたたましく鳴り渡った。寢床から起き出し身支度を整え、庭の防空壕へ走りながら夜空を見上げたら探照灯に照らし出されたB29爆撃機が、低空で飛んでいて不気味に見えた。すぐ空襲警報のサイレンが鳴り響いた。すでに西の空が赤く染まっていた。鴨江方面にすでに焼夷弾が落とされていた。これは何時もの空襲とは違う、怖いと思った。後は防空壕の中で祖父・祖母と一緒に震えていた。そのうちザーという音が聞こえた。祖父が防空壕の外へ様子を見に行っただけでなかなか帰ってこないのが心配だった。後で聞いたら家の塀に焼夷弾の油脂が飛び散ったので、火たたき（竹の棒の先へ縄を巻いて塵払いのようなもの）で消していたとのことであった。祖父の年は68歳であった。昭和22年70歳でなくなった。

敵機は1時間もの間波状攻撃を繰り返し、浜松全市を灰燼にして立ち去った。

午前4時ころ警戒警報になった。下町の空は真っ赤に染まり熱い風が吹いていた。尾張町の家ももう駄目か？何とか早く親、兄弟の安否を知りたかったので、一人で六間道路の坂を下りて行った。現在のUホール（当時は市の水道課）あたりからどの家も焼かれてくすぶっていた。暑くて煙が目に染みて目を開けていられなかった。熱い空気と、人間や動物が焼かれた匂い、すべてが焼き尽くされた匂いが充満する町を、道端のドブの水を手ぬぐいに浸し目を拭きながら、とにかく尾張町の家の方角を目指して歩いた。途中道路に電柱の焼けたものらしい丸田風のものが沢山転がっていた。死体であった。老若男女の区別は

つかなかった。悲しいとか、さびしいとか、苦しいとか、すべての感情はなかった。ただひたすらに尾張町の家を目指した。やっとのことで尾張町の家あたりに辿り着いた。

家はみるも無残に焼け落ち、父と一緒に苦労して掘った防空壕は焼けた畳の灰で覆われていた。ああ家族みんなこの中で焼け死んだのか、掘って確認しようにもまだ熱くてどうしようもない。でもどこかに避難したかもしれないと、いろいろ考えが浮かんだがそれでもすぎる思いで探そうと、街中の主な建物の避難者の群れを探し回った。

主な建物といえば銀行、松菱百貨店で溢れんばかりの避難民でいっぱいであった。死んだ子供を抱いた母親、大やけどの人、手足を折った人、死んでいる人、どの人もただボーッと座り込んだまま動こうともしない。その中をかき分けながら探したがどこにも見当たらない。鹿谷町に横穴式防空壕が沢山あった。よしあそこへ行ってみよう。ひょっとして避難して助かっているかもしれない。切れた電線、破裂した水道管から溢れる水、道路に横たわる死体を横目に見ながら、現場へ着いた。地元の消防団、警防団の人達が死体の搬出をしていた。みんな煙に巻かれて蠟人形のように窒息死していた。一人ひとり確認したがいない。あちらこちら探したが行方不明だ。もう疲れて歩く気力もない。仕方なく尾張町の自宅の焼け跡にもどり歩道に座り込んだ。歩道の防火用水の中にどこの人か知らないが、鉄兜をかぶり男の人が死んでいた。用水の水は一滴も無くからからであった。もうみんな死んでしまったのか、これからどうしよう、収入はないし食べるものはないし、祖父母を抱えどうやって生きて行けばいいのだろう、ただ呆然とするのみであった。

時計はないので時間はわからないが、日が西に傾きかけてきた。避難先から戻って、焼け跡に立ち退き先を書く人が出てきた。だけど自分には何の連絡もない。もう駄目か、ひとりでに涙が溢れてきた。その時、北の方（元目町）から道路を自転車を曳きながら男の人がこちらへ向って来た。近づくに連れて父であることがわかった。また、再開の涙が溢れてきた。父の話では、全員無事で母の在所の上石田へ、昨夜の火の海の中を妹たち、弟たちを負ぶったり、手を引いたりして、何も持たずに逃げたとのこと、本当に嬉しかった。この空襲で、常磐町の村尾病院の村尾君一家8人が、家の近くのマンホールで焼死体となって発見された。ご冥福をお祈りします。

この日の空襲は、B29約百機による焼夷弾攻撃で、徳川城下町の時代を経て明治新政による建設時代の市民の苦闘、市制施行以来、先賢の努力の結晶など

跡形も無く消滅した。

静岡県西遠地方事務所が昭和 20 年 7 月 3 日現在でまとめた「管内昭和 20 年 6 月 18 日戦災対策概況」によると、この大空襲は浜松市内だけでなく、隣接の可美村・新津村・神久呂村・入野村・積志村にも及んでいたことが分かる。

(参考) 投下焼夷弾約 65,000 個、死者 1,717 人、重傷 250 人、軽傷 1,250 人、家屋全焼 15,218 棟、半焼 91 棟、非住家全焼 490 棟、半焼 75 棟

婦人部のあゆみ

浜松市遺族会 小倉てい

戦後 30 年は、私共戦争未亡人にとっては長い苦しい坂道でありました。幼児をかかえ、焦土の中をねぐらに定め、食糧を求めながらの血みどろの生活戦争でした。

今は子供達もそれぞれ独立してようやくホッとした時。頭には白いものが見え、苦勞の深いしわがきざまれ、出征当時の若妻がたどってきた今までのきびしさをまざまざと見る思いがする。

戦後、遺族に対する援護の手は、何の保障もなく全て打ち切られ、途方に暮れた遺族達が、長島先生を先達に立ち上がり、全国的な会の組織が出来たのが昭和 22 年の事であった。幼な子を家に残して、度々の遺族大会に上京し、政府に対して切々の陳情を続けたものでした。或る県では白装束に位牌を持って、又或る県では鉄兜に竹槍と、まことにすさまじいものでした。続いて 23 年には婦人部が結成された。

浜松は少し遅れて、26 年 2 月 5 日に初顔合わせ。部長は鈴木こう、鈴木節子、杉浦千代、棚田淑子と私の四人が副部長に選出された。

27 年 5 月 2 日全国戦没者慰霊祭が新宿御苑で催されたが、浜松からは故中村勝五郎会長と私の二人が代表として参加した。この時は両陛下のお出ましを頂き、戦後初めての慰霊祭であった。午後は一同バスに分乗して、白バイに守られながら宮城に到着。陛下よりあたたかいお言葉と、恩賜の煙草を始め数々の品を拝受、感激して宿舎に引揚げました。明るる 3 日には宮城前広場で、吉田首相主催の講和記念祝典に参列させて頂く光栄に浴しました。

その後、役員改選で部長は鈴木こう、副部長は大庭かの、小倉ていとなった。遺児達も進学やら就職の時になって片親の為はねられることが多いと聞き、未亡人のかなしさが一人身に沁み、夫の戦死は全くの犬死であったのか「後を引き受けた」といって送り出した方々の身勝手さに幾度か夜半の枕をぬらした事か。こうした頃 (30 年) 神奈川県知事を始めとして多くの知事が保証人となっ

て下さったので、就職の道も明るく、各事業所でも競って採用する様になり、全員手を取り合って喜んだものでした。

37年5月国会遺族議員協議会の中に「戦没者の妻等に特別加給金を支給する件」についての小委員会が設けられたのを第一歩として、私達未亡人の処遇問題は、その手掛かりを得ることが出来ました。

その後、法制局等の立法措置により加給金が給付金と改められ、37年8月4日衆議院法制局において起草、同年8月10日の小委員会で認められ、議員立法として推進する事になったので、日本遺族会婦人部も親会の方々と緊密な連絡のもとに法案の内容を検討し実現を図る事になって、度々の婦人部大会が開かれ、或いは地元の先生方をお願いしたり文書陳情を行なったり執拗なまでの運動を続けた。この間最も感激した一つは、大野伴睦副総裁が最後の陳情をした時「よしよしよくわかった。この年の暮れに一家の主婦が、家を留守にして滞京している事は誠に政治の貧困であって申し訳がない。自分が何とか骨を折ってあげるから、すぐ家に安心して帰りなさい」と私の手を固く握って、お約束いただいたのでした。今は亡き先生を偲んで、忘れる事が出来ません。

こうして29日夜の大詰まで靖国神社の北参集所の板の間で頑張り通したのですが、30万円の要望が20万円、10年償還、無利子という私達への国としての処遇が実現したのでした。明るく日は雨の中を晴々とした心持で、関係の先生方にお礼まわりをして帰郷しました。

39年には、当時の石井会長さんのご意見で、婦人部は本来の妻の立場で、という事になり、浜松でも私が代わって部長になり、現在に至りました。副部長も杉田、岡田、玉木、栩木、杉浦、天野さん達と交代してお骨折りいただきました。

歴代の福祉事務所長さん、課長さんにも、大変お世話になりましたが、特に古橋課長さんには、婦人部へのご理解、ご指導をいただき、現在の婦人部の基礎を作って下さった事は一同忘れる事が出来ません。

さて婦人部が妻の手に渡ってまいりますと、やはり身近な問題が多く益々忙しくなり、毎日を夢中で飛び回ってまいりました。毎年年末から年始にかけて、公務扶助料の増額、身寄りのない老父母の給付金、或いは非受給者となった遺族への特別祭祀料、又は2番目の未亡人への特別給付金、同じく老父母の問題に取り組みました。

靖国神社の国家護持の請願陳情で、神社より国会までのデモ行進にも幾度か参加して、お願いしたのですが、新聞もテレビも甚だ冷淡で、報道すらされ

ず、むなしく思ったものでした。極寒に酷暑に首相官邸に、或いは自民党本部の大理石の床に何時間も座り込みの激しい陳情には、私のような頑健な者も、時には熱を出したり体を壊したりしたものでした。殊に、中井日本遺族会婦人部長さんは卒倒して、意識もなくなり一時は心配する状態もありました。

49年4月12日には、徳永先生、村上先生のご努力によって、靖国神社法案が衆議院では可決されましたが、この時は全くひどいもので、委員会の会場前に野党は人垣を築いて先生方を入れず、衛士の牛蒡抜きによって入場されると喧々ごうごう、先生のマイクを取り上げ、あるいは原稿を取り上げ、床を踏み鳴らし、実力で審議を妨害阻止する行動に出たのでした。先生は殴られたり、蹴られたりで負傷され、又身辺が危なくて自宅へもお帰りになれなかったと聞いております。議会民主主義の下で、おだやかな話し合いの出来ない現状に、激しいいきどおりを感じました。引き続き参議院に移り、陳情を続けましたが、ご承知のように、残念ながら廃案となってしまいました。

今や老父母の平均年齢80歳を越え、妻といっても60歳前後になりかつて圧力団体と新聞紙をにぎわした遺族会も弱体化し、昔のおもかげを止め得ないまじになってまいりました。

永くお世話いただいた親会に感謝しつつ、次代を担う青年部の育成に努めて、婦人部が中堅となって、今後の運営や陳情に当らなければならない時になってまいりました。

婦人部の方々は、これからも心を合わせて遺族のために、なお一層のご努力をお願いして、つたない筆をおきます。

(昭和51年発行の浜松市遺族会終戦30周年記念号より)

編集後記

各市町遺族会会員の皆様には、令和4年2月刊行の「語り継ぐ思い～戦没者遺族として～」の続編の発刊に向け、戦没者の家族として体験し、また、母親等から伝え聞いた苦労や戦争の悲惨さ、平和への思いを寄稿いただくようお願い申し上げたところ、多数お寄せいただき、改めて感謝申し上げます。

編纂に当たっては、語り部資料編集委員会で校正等に努めましたが、至らぬ点もあろうかと存じます。ご容赦をお願いいたします。

語り部資料編集委員会委員長 大石 功
委 員 横山俊英
勝又壽治
佐野義晴
久保田文雄
竹内 治
事務局 伊藤秀治

続編 語り継ぐ思い
～戦没者遺族として～

令和5年1月発行

編集兼発行所
一般財団法人 静岡県遺族会
静岡市葵区柚木 336
電話 (054) 261-7796

印刷所 株式会社スズコウ印刷